續國譯漢文大成

文學部　六十七の下

309
65

峡入

始

續國譯漢文大成

文學部　第六十七册（第十七帙の下ノ三）

蘇東坡詩集　六の三

吉田徳郎氏

309
65

蘇東坡詩集　卷四十七　他集互見詩

古今體詩　四十七首

老翁井

井中老翁誤年華。
白沙翠石翁之家。
公來無踪去無跡。
井面團團水生花。
翁今與世兩何與。
無事紛紛驚牧豎。
改顏易服與世同。
毋使世人知有翁。

老翁井

井中の老翁、年華を誤る、
白沙翠石、翁の家。
公、來つて踪なく、去つて跡なし、
井面、團團、水に花を生ず。
翁、今、世と兩つながら何ぞ與からむ、
事の紛紛として牧豎を驚かすなし。
顏を改め、服を易へて世と同じうすとも、
世人をして翁あるを知らしむる毋れ。

【題義】　蘇洵の嘉祐集、老翁泉銘の敍に「往歳十年、山空しく月明かに、老人あり、泉上に倀息し、これに就けば、隱れて泉に入る。因つて、亭を其上に作る。銘に曰く、山起二東北一、翼而南西、涓涓斯泉、坌涌以瀾、斂以爲レ井、可レ飲二萬夫一」とあつて、これは、蘇氏の故里に在る老翁井を詠じたのである。査註に「朱子晦菴詩話、老翁井の詩、老蘇、送二蜀僧去塵一の前に在り、必ず他人の作に非ず。然れども、嘉祐集に見えず、亦たその何を說くかを省せざるは何ぞや。彼の井中の老翁をして、顏を改め、服を易へしめ、人をして知らざらしめむと欲す、しかも後篇、遽に瘦を嫌ひ、彈を廢するの嘆あるは何ぞや。然れども、その言、怨んで怒らず、用意亦た遠し、と。これに據れば、この詩と送二蜀僧去塵一との二首は、皆老蘇公の作なり」とある。抑も、東坡の詩集は、前卷で畢つて居るので、以下四卷は、補遺と稱すべく、そして、後人は、東坡を敬慕するの餘、一篇でも詩の數を多くせむとし、極力取り入れた爲に、中には、明かに、それと見え透く樣な誤もあるし、更に愼重なる考證を進むれば、滿足なものは、一首もないといつても善い位。これは、誰の場合でも、さうであるが、東坡に於ては、愈よ甚しい。そこで、査初白は「愼、案ずるに、唐宋名家の詩文、間ま他集に互見するものあり。馬退山茅亭記、獨孤及集に載す。柳州謝表の其一は、卽ち李吉甫郴州の作にして、皆子厚の集中に入る。大樂十二均の圖は、楊次公の作なり、嘉祐集に編す。靈對二織婦一文は、宋元憲の作なり、米襄陽集に編す。三先生論事錄序は、陳同甫の作なり、朱文公集に編す。かくの如きの類、往往之あり、但だ舛繆混雜、幾んど百篇に及ぶ、東坡詩の甚しきが如き者あらざるなり。李端叔、言ふあり、先生嶺外より歸る、作るところの字、他人の詩文多しと。蓋し、紹聖以後、蘇氏の學を嚴禁し、淳熙の初に至つて、禁、乃ち弛む、後人、公の手跡を得れば、便ち采つて公の集に入る。譌を承くる數百年、註者と讀者と、漫に辨を加へず。凡そ愼の駁正するところ、敢て一毫臆斷するに非ず、悉く諸家の文集詩話より、一一搜刈校對し、その雷同の者は別編二卷。單行の什の如きは、注して云ふ、この詩、亦た某人の集に見ゆ、と。その或は同時唱和せしは、和詩に依り、例、各卷本詩の後に附載し、この卷中但だ題目を列して云ふ、この詩、すでに第幾卷に載すと。覽者、これを詳にせよ」といつて居るので、今、大抵これを繼承することにした。

【詩意】　井中に住んで居る老翁は、年華に誤られ、白沙翠石、その家が儼然として存在するに拘はらず、來去、ともに蹤跡なくして、行方も知れず、井水の面には、團團として、泡が花の如く浮んで居るのみである。今や、翁と世間とは、兩つながら關係なく、紛紛たる世上の俗事は、牧童を驚かすものさへもない。そこで、翁に告げるが、たとひ、形貌を改め、服裝を易へて、世と同化するにしても、韜晦して名なきを旨とすべく、なまなか、世人をして、翁あるを知らしめぬ樣にするが善からう。

送蜀僧去塵

蜀僧去塵を送る

十年讀易費膏火。　十年、易を讀んで膏火を費し、
盡日吟詩愁肺肝。　盡日、詩を吟じて肺肝を愁へしむ。
不解丹青追世好。　解せず、丹青、世の好を追ふを、
欲將芹芷薦君盤。　芹芷を將て、君の盤に薦めむと欲す。
誰爲善相寧嫌瘦。　誰か善相となす、むしろ瘦を嫌はむ、
後有知音可廢彈。　後に知音あり、彈を廢すべけむや。
拄杖掛經須倍道。　杖を拄へ經を掛けて須らく道を倍すべし
故鄉春蕨已闌干。　故鄉の春蕨、すでに闌干。

【題義】去塵、その人失考。ただ詩に依つて、併せて儒家の業を修めた僧といふことが分かる。查註に「愼、案ずるに、苕谿漁隱叢話、石林詩話を引いて云ふ、蘇明允の詩、多く見ず、然れども、精深にして味あり、語、徒に發せず、讀易の詩に、誰爲二善相一寧嫌レ瘦、後有二知音一可レ廢レ彈と云ふが如き、婉にして迫らず、哀んで傷まず、作るところ、自ら必ずしも多からざるなり、云云と。今、これを朱子の詩話に合せ、斷じて老蘇の作となす」とある。

【詩意】君は、十年の久しき、易を研究して書燈の膏油を費し、又盡日、詩の爲に苦吟して、肺肝を愁へしめ、頻りに刻苦された。畫筆を弄して、世俗の嗜好を迎へることを知らぬのは、なかなかに尊く、ここに、別をなすに際し、芹芷を摘んで君に薦めやうと思ふ。誰が善く人相を見るか知らぬが、瘦せたのは嫌ふに足らず、加ふるに、後世、必ず知音の人があらうから、彈琴を止めることも出來まい。これより、杖に御經をかけて、大急ぎに還ること、然るべく、故鄉に於ては、春の蕨が、すでに其盛りを過ぎやうとして居る。

【餘論】紀昀は「五六、是れ骨に到るの宋格、然れども、用意、甚だ深し」といつて居る。

【字解】【一】膏火　書燈の油。
【二】丹青　彩色、轉じて畫をいふ。
【三】芹芷　芷はよろひぐさ、一種の藥草で、その根は、肌膚顏色を潤澤する效がある。
【四】知音　前に讀二杜詩一及び送二治易僧一の詩中に注して置いた。
【五】倍道　大急ぎで行くこと。
【六】闌干　やや盛りを過ぐること。

和人回文五首

人の回文に和す　五首

紅窗小泣低聲怨。　紅窗小泣、聲を低くして怨み、
永夕春寒斗帳空。　永夕、春寒くして斗帳空し。
中酒落花飛絮亂。　中酒、落花飛絮亂れ、
曉鶯啼破夢忽忽。　曉鶯、啼破して夢忽忽。

【題義】回文は、下から逆讀しても別に一首の詩をなすものである。查註に「愼、案ずるに、淮海後集、

【字解】【一】紅窗　紅は美辭、格別の意味もない。
【二】斗帳　北斗の形に屈折して居るのであらう。
【三】中酒　酒に中る、二日酔。

この五絶句を載せ、題して云ふ、蘇子瞻、江南集載するところの詩本を記するも、全からず、余、かつて之を見て、その五絶を記し、今以て子瞻の遺を補ふと。これを經籍志に考ふるに、江南集十卷あるも、作者の姓名を載せず、と。これに據れば、東坡の詩に非ざること知るべし」といひ、馮應榴の案に「清江三孔集に見え、題して、題二織錦璇璣圖一と云ふ。この五首、乃ち毅父の作るところなり」とある。すでに、題二織錦璇璣圖一といへば、蘇蕙が例の廻文、璇璣の圖を織つて居る處を畫いた圖であつて、この詩は、卽ち其圖に題したのである。

【詩意】紅閨の窓の下に泣きつつ、聲を低くして、獨り言に怨みの言葉を述べ、春の夜を明かし兼ねて、その長長しきに堪へず、斗帳の中、人なければ、寒さも、一しほである。落花飛絮、春、將に盡きむとする折から、中酒の氣味で惱み勝ちである上に、心なき鶯が、曉に啼けば、おもひ寢の夢は、忽忽として、醒めはてて仕舞つた。

【餘論】これを逆讀すると、左の一首になるが、その方の解釋は、讀者に任かせることに致さう。

忽忽夢破啼鶯曉。亂絮飛花落二酒中一。空帳斗寒春夕永。怨聲低泣小窗紅。

同誰更倚二閒窗一繡。誰と同じく、更に閒窗に倚つて繡せむ、
落日紅扉小院深。落日紅扉、小院深し。

東復西流分水嶺。東して、復た西に流る、分水嶺、
恨兼二愁續一斷絃琴。恨は愁と續ぐ、斷絃の琴。

【詩意】誰と共に、更に物靜かなる窓に倚つて、刺繡をなすべき、夕日は、紅の扉に映じて、小小たる院落は、奥深く見える。わが心の亂るるは、水が分水嶺を過ぎ、東し復た西して流るるが如く、切れた琴の絃を續ぎ足し、恨と愁とを併せて、やさしき其音に寄せつつ、試に彈じて見やうと思ふ。

【餘論】この詩を逆讀すれば、左の通りである。

琴絃斷續愁兼二恨一。嶺水分流西復東。深院小扉紅日落。繡窓閒倚更誰同。

寒信風飄霜葉黃。寒信、風飄つて霜葉黃なり、
冷燈殘月照二空牀一。冷燈殘月、空牀を照らす。
看君寄憶傳二文錦一。看る、君が寄憶、文錦を傳ふるを、
字字縈二愁寫一斷腸一。字字、愁を縈つて斷腸を寫す。

【詩意】寒氣俄に音づれ、風は霜葉を飄して、その色さへ黃ばんで居る。一室の內には冷燈、外には

殘月、ともに寂しげに空牀を照らして居る。その時、閨人は、夫に寄する爲に、一幅の錦を織り上げたが、廻文の字字、愁を蘂つて、斷腸の思を寫したものであつた。

【餘論】この詩を逆讀すれば、左の通りである。

腸斷寫レ愁蘂二字字一。錦文傳レ憶寄レ君看。牀空照レ月殘燈冷。黃葉霜飄風信寒。

前堂畫燭夜凝レ淚。　前堂の畫燭、夜、淚を凝らし、
半夜清香荔(一)惹レ衾。　半夜清香、荔、衾を惹く。
煙鎖竹枝寒宿鳥。　煙は、竹枝を鎖して宿鳥寒く、
水沈天色霽(二)橫參。　水は、天色を沈めて橫參霽る。

【詩意】前堂の畫燭、夜の更くる儘に淚を凝らし、夜半に、清香が衾にまとひ付いて居る。その時、外面を見ると、煙は一叢の竹を鎖して、宿鳥の寒げなるは、哀れにも見え、水は晴天を涵して、參の星が橫はつて居る。

【餘論】この儘では、夜の字が重複する。孔穀父集には、夜凝レ淚の夜が殘に作つてあるといふこと。なほ、この詩を逆讀すれば、左の通りである。

參橫二霽色一天沈レ水。烏宿二寒枝一竹鎖レ煙。衾惹二荔香一清夜半。淚凝二夜燭一畫堂前。

【字解】【一】荔惹衾　荔は香料を云ふものと見える、孔穀父集には舊に作つてあるといふこと。
【二】橫參　參は星の名。

蛾翠斂時聞燕語。　蛾翠、斂まる時、燕語を聞き、
淚珠彈處見鴻歸。　淚珠、彈ずる處、鴻の歸るを見る。
多情妾似風花亂。　多情の妾は、風花の亂るるに似たり、
薄倖郎如露草晞。　薄倖の郎は、露草の晞くが如し。

【詩意】みどりの眉を斂めて、燕の睦ましげに語り合ふを聞き、淚の珠を彈じて、雲井を歸り行く雁を眺めて居る。多情なる妾の心は、落花の風中に亂るるが如くであるが、これに反して、薄倖なる我が情郎は、露草の晞くに似て、やがて、その跡を留めぬ樣に成ることであらう。

【餘論】この詩を逆讀すれば、左の通りである。

晞レ草露如二郎倖薄一。亂レ花風似二妾情多一。歸鴻見處彈二珠淚一。語燕聞時斂二翠蛾一。

送淡公二首

淡公を送る　二首

燕本氷雪骨。(一)越淡蓮花風。　燕本は氷雪の骨、越淡は蓮花の風。

五言雙寶刀。聯響高飛鴻。
翰苑錢舍人。詩韻鏗雷公。
識本不識淡。仰咏嗟無窮。
清韻生物表。朗玉傾壺中。
常于冷竹坐。相語道意沖。
嵩洛興不薄。稽江事難同。
明日若不來。我作黃石翁。
何以兀其心。爲君學虛空。

【字解】【一】燕本　燕國の無本、唐書に「賈島は、范陽の人、はじめ、浮屠となつて無本と名づく、後、進士に擧げらる」とある。【二】越淡　越國の淡公、その人失考。【三】翰苑　即ち翰林。【四】錢舍人　不詳。【五】雷公　姓譜に「唐の雷威、かつて深林の中に入り、風雪の聲、逶迤然鶴の者を聽き、伐つて琴となす、世に雷公琴と稱す」とある。【六】嵩洛　神仙傳に「浮邱伯、姓は李、嵩山に隱居し、黃鶴を服すること二十年、これに久しくして道成り、白日飛昇す」とあり、列仙傳に「王喬は、周の靈王の太子晉なり、好んで笙を吹いて鳳鳴を作し、伊洛の間に游び、道士浮邱公に遇ふ、接して以て嵩山に上る」とある。【七】稽江　賀監の事を用ふ、前に元日次韻張先生及び吳三刁景純の詩中に注して置いた。【八】黃石翁　漢書張良傳に「老父、良に謂つて曰く、後五日、平明、われと此に期せよ、と。五日、平明、良往く、父、すでに先づ在り、怒つて曰く、老人と期して後るるは何ぞや、と。去つて後五日、早く會す。又曰く、孺子、われを濟穀の下に見む、黃石は即ち我のみ、と。遂に去つて見えず」とある。【九】兀其心　陸機の文賦に「兀若枯木」とある。【一〇】虛空　楞嚴經に「起てば世界となり、靜なれば虛空と成る。虛空を同となし、世界を異となす」とある。

【題義】査註に「孟東野集、淡公を送るの詩、共に十一首、これ其二、知らず何を以て、訛して蘇集に入るか」とある。すると、淡公も唐人であるが、今失考。

【詩意】燕地に生まれた無本は、氷雪を以て其骨となし、越國から出た淡公は、蓮花の如き風采である。二人、ともに詩が上手で、その五言は寶刀の如く、二人で聯句をすると、その高超の趣は、飛鴻を凌ぐばかり、その詩の遠韻は、鏗然として雷威の造つた琴にも優つて居る。さきには、無本と面識であつて、まだ淡公に逢つたことなく、仰いで高詠し、歎息窮まりなき程であつたが、今、面のあたり、その人を見ると、清韻は萬物の表に生じ、朗朗たる美玉が壺中に傾いて居る樣である。そこで、毎毎、冷竹の間に竝んで坐しつつ、話をして見ると、道意沖澹、この世ならぬ想がする。かの嵩山洛水の間は、むかしから、仙人に緣ある處で、これから出かけると、興、浸からざるべく、賀監の稽江に於けるとは、決して同一視することが出來ない。游びに行くも善いが、早く還つて來て貰ひたいので、後日、もし來ない時には、われこそ黃石公といつて、汝を痛く叱り付けるであらう。この心を、兀然として枯木の如くならしめ、この世界を超越して、虛空と爲さうとするには、如何したら善いか、その事を篤と君から承りたいので、かくは待つて居る次第である。

郊の作であつて、東坡の詩でないとすれば、この評は、丸で當らぬことに成る。

【餘論】紀昀は「東坡の詩の極めて佳ならざるもの」といつて居るが、査初白の言ふ如く、これは孟

坐重青草公。意合滄海濱。　坐は重し青草公、意は合す滄海の濱。
渺渺獨見水。悠悠不聞人。　渺渺として、獨り水を見、悠悠として人を聞かず。
鏡浪洗手漾。剡花入心春。　鏡浪、手を洗つて漾く、剡花、心に入つて春なり。
雖然防外觸。眼前遶衣新。　然かく外觸を防ぐと雖も、眼前、衣を遶つて新なり。
行當譯文字。慰此吟殷勤。　行く〻當に文字を譯し、この吟の殷勤なるを慰むべし。

【字解】【一】坐重　孟郊の集には坐愛青草上に作つてあつて、下句との對偶上、その方が宜しいから、それに從ふことにする。【二】鏡湖　鏡湖の湖、輿地志に「鏡湖は、後漢の太守馬臻の開くところ、本名慶湖、漢の安帝の父、清河王の諱を避け、改めて鏡湖となす、今、紹興城南に在り」と見ゆ。【三】剡花　剡溪の花。【四】遶衣　維摩經天女散花の事を暗用したので、前に坐上賦二蓮花一の詩中に注して置いた。【五】譯文字　鳩摩羅什が梵文を譯せしこと、高僧傳に見ゆ。

【詩意】青草の上に坐することを愛し、滄海の濱が氣に入つたといふので、平生游行を恣にし、渺渺として獨り水を眺め、悠悠として人聲をだに聞かぬ。君は、元と越國の生まれで、鏡湖の淸き浪に手を洗ひ、剡溪の春の花を心にしめ、外部の觸動を防ぐものから、面のあたり、天花が衣に降り注ぐ奇瑞があつた。この上は、更に修行を積み、梵本の御經を翻譯して、慇懃に詩を餞とした我が心を慰める樣にして貰ひたい。

黃州

南山一尺雪。雪盡山蒼然。　南山一尺の雪、雪盡きて山蒼然。
澗谷深自暖。梅花應已繁。　澗谷、深く自ら暖かに、梅花、應に已に繁かるべし。
使君厭騎從。車馬留山前。　使君、騎從を厭ひ、車馬、山前に留まる。
行歌招野叟。共步青林間。　行歌、野叟を招き、共に步す青林の間。
長松得高蔭。盤石堪醉眠。　長松、高蔭を得、盤石、醉眠に堪へたり。
祇樂聽山鳥。攜琴寫幽泉。　祇だ樂んで山鳥を聽き、琴を攜へて幽泉を寫す。
愛之欲忘反。但苦世俗牽。　之を愛して反るを忘れむと欲す、但だ苦む、世俗の牽くを。
歸來始覺遠。明月高峯顚。　歸り來つて、はじめて遠きを覺ゆ、明月高峯の顚。

【字解】【一】寫幽泉　樂府に幽澗泉といふがあつて、李白の作に拂三彼白石、彈三我素琴一、幽澗泉今流泉深とあり、金徽變化篇に「陰由夫、琴を攜へ、松風澗響の間に就いて曰く、三者皆自然の聲あり」と見ゆ。

【題義】査初白は「愼、案するに、この詩、亦た歐陽公の集に見え、題して游三琅琊山一と云ふ。琅琊は、滁州の南に在り、故に南山と稱す、歐公、時に滁州に知たり、故に自ら使君と稱す。山中泉あり、音會に中るが若し、醉翁、これを喜び、毎に酒を把り、欣然として歸るを忘る。時に沈遵といふものあり、琴を以て其聲を寫して醉翁操となす、故に又云ふ、攜レ琴寫三幽泉一と。この詩、斷じて歐公の作るところたること、疑なきなり」とある。

【詩意】琅琊山には、一尺の雪が積つて居たが、雪が殘りなく消えると、山は蒼然として見え、澗谷は深くして自ら暖に、梅花も、すでに繁く咲き出でたであらう。太守は、騎馬の伴人を召し連れることを厭ひ、車馬を山前に留め置き、行く〻歌ひつつ、野叟を招き、ともに青林の間を逍遙して居る。長松に就けば高蔭を得、平たい石の上では、醉うて睡ることが出來る。そこで、唯だ樂んで小鳥の聲を聞き、琴を攜へて、幽泉の鳴る音を寫し取つた。かくの如く、山中の風景を愛しては、歸るを忘るるばかり、但だ世俗に牽かれるのに閉口する。歸り來れば、はじめて、幽境の遠きを覺え、明月は、高峰の巓に差し上つた。

古風

精神洞二元化一。白日昇二高旻一。
俯仰凌二倒景一。龍行逸如レ神。
半道過二紫府一。弭レ節聊逡巡。
金牀設二寶几一。璀璨明月珍。
仙者二三子。眷然骨肉親。
飲レ我霞石盃。放レ盃恍如レ春。
遂朝二玉虛上一。冠劍班二列眞一。
無端拜失レ儀。放棄令二自新一。
雲霄難二遽反一。下土多二埃塵一。
淮南守二天庖一。嗟我復何人。

古風

精神、元化を洞し、白日、高旻に昇る。
俯仰、倒景を凌ぎ、龍行、逸して神の如し。
半道、紫府を過ぎ、節を弭めて聊か逡巡。
金牀、寶几を設け、璀璨たり、明月の珍。
仙者二三子、眷然たる骨肉の親。
われに飲ます霞石の盃、盃を放てば、恍として春の如し。
遂に玉虛の上に朝し、冠劍、列眞に班す。
無端、拜して儀を失ひ、放棄して自ら新にせしむ。
雲霄、遽に反し難く、下土、埃塵多し。
淮南、天庖を守る、嗟す、我、復た何人ぞ。

【字解】【一】元化　宇宙の本體、莊子に「廣成子曰く、至道の精は窈窈冥冥、視るなく、聽くなく、神を抱いて以て靜」とあり、張紫陽眞人の言に「精が以て氣を化し、氣を以て神を化し、神を以て虛を化す、名づけて三華聚頂といふ」とある。【二】倒景　前に

孫氏馮松堂の詩中に注して置いた。【三】紫府　天帝の居ます處。【四】金牀　顧令内傳に「老子、尹喜と崑崙に登り、金臺玉樓、七寶宮殿に上る、豐夜光明、及び天地四王の遊ぶところの處、珠玉七寶の牀あり」と見え、古樂府に金牀玉几不レ能レ眠、下堂徘徊與レ露とあり、拾遺記に「瀛洲の南に金鼎の觀あり、中に寶几あり、覆ふに靈執の素を以てす」とある。【五】霞石盃　霞は朝やけ夕やけ、その色を爲せる石で造つた杯。【六】玉虛　大空。【七】天庖　天帝の廚所、抱朴子に「河東の蒲阪に項曼都といふものあり、一子と山に入つて仙を學び、十年にして歸る。家人、その故を問ふ。曼都曰く、山中に在つて、三年精思、仙人あり、來つて我を迎へ、ともに龍に乘じて天に升る。良や久しうして、頭を低れて地を觀れば、杳杳冥冥、上、未だ至るところあらず、而して、地を去る、すでに絕だ遠く、龍行くこと甚だ疾し。天上に到るに及びて、先づ紫府を過ぐ、仙人、瀛霞一盃を以て我に與へて之を飲ましむ、觀ち仰視せず、忽然家を思ひ、天帝の前に至り、謁拜、儀を失ひ、斥けられて來り還らしめ、令して當に更に自ら修積すべしといふ。むかし、淮南王劉安、天に升り、上帝を見て、其坐大言、自ら寡人と稱す、遂に謫せられて天廚を守ること三年、我、何人ぞやと。河東、因つて、曼都を號して斥仙人となす云云」とある。

【題義】古風は古詩、これは古詩に擬して作つたのである。

【詩意】この精神を活動させれば、宇宙の本體たる元化を洞視して、白晝に高空に上昇することが出來、俯仰して、日光の倒に映れる影を浚ぎ、龍に乘じて、その速なること、神の如くである。その半途で、紫府といへる天帝の居を過ぎ、節を弭めて、聊か後しざりをした。その府中には、金牀があつて、その前には七寶の几を備へ、珍らしい明月の珠が、璀璨として照り輝いて居る。そこには、仙人が二三人居て、眷然として、さながら骨肉の親の如く、われに霞石の杯を薦めたが、一飲して其杯を差し置くと、恍然一醉、さながら春の如き心持がした。やがて、大空の上に朝して、天帝に謁することになり、冠儀の敝、仰仰しく、多くの仙人どもの間に列したが、ゆくりなくも、拜をなす時、不行儀であつた爲に、放棄して自ら新にせよといはれた。身は雲霄の上に在つて、還に歸られもせず、下界は、塵埃多くして、とても住むことが出來ず、そこで、仕方がないから、當年の淮南王劉安の如く、天帝の臺所を預ることに成つた、ああ、我は如何なる人であるか。

【餘論】査初白は、抱朴子斥仙人の事を引きし後「この詩、全くこの事を用ふ、乃ち仙を學ぶの流、語に荒誕多きを諷す。先生の和二陶山海經一、古强本庸妄の一首と略ぼ同じ。もし東坡の手に出づれば、語意重複す。淮海前集第四卷、亦た此詩を載す、中間、數處、微に同異あり」といつて居る。

無題

引レ手攀紅櫻。紅櫻落如線。
仰首看紅日。紅日走如箭。
年光與時景。頃刻互衰變。
況是血肉身。安得常强健。
人心苦執迷。慕貴憂貧賤。

無題

手を引いて紅櫻を攀づれば、紅櫻、落ちて線の如し。
首を仰いで紅日を看れば、紅日、走つて箭の如し。
年光と時景と、頃刻、互に衰變。
況んや是れ血肉の身、安んぞ常に强健なるを得む。
人心、執迷に苦み、貴を慕うて、貧賤を憂ふ。

憂色常在眉。歡容不上面。
吾今頭半白。把鏡非不見。
惟應花下盃。更待他人勸。

【字解】【一】紅櫻　櫻は櫻桃であらう。【二】憂色常在眉　南史王元謨傳に「隨ぜて孚武に啓して、具さに本末を陳ぶ。帝答へて曰く、七十の老公、反して何をか求めむと欲する。聊か復た笑を爲す。想ふに、以て柳の眉頭を申ぶるに足るのみ、と。元謨性慟未だ嘗て妄りに笑はず、時人言ふ、元謨眉頭、未だ嘗て伸びずと、故に此を以て戲となす」とある。【三】把鏡非不見　南史齊本紀に「鬱林王昭業は、文惠太子の長子。高帝、相王となつて、東府を鎮す、鬱林、時に五歲、牀前に戲る。高帝、左右をして白髮を拔かしめ、問うて曰く、兒、われを誰と言ふかと。答へて曰く、太翁と。高帝、笑つて左右に謂つて曰く、豈に人の爲に曾祖となつて、白髮を拔くものあらむや、と。卽ち鏡鑠を擲つ」とある。

【題義】査初白は「愼、案するに、この一篇は、乃ち白居易、花下對酒二首の一なり」といつて居る。

【詩意】手を引いて、紅の花さく櫻桃樹を攀づれば、その花は、線をなして、つづけざまに散り落つる。首を仰いで、赤色の太陽を見れば、走ること箭の如く、さッさと西へ移つて行く。年波と四季折折の景色とは、しばらくの內に衰變して仕舞ふ。どうすれば、この血肉の身が、常に强健なることが出來やうか。人心は執著迷悶に苦み、富貴を欲して貧賤を賤んで居る。心配な氣色は、常に眉頭に在つて開かず、喜びの樣子は、決して顏に上らない。われ今頭が半分白くなつて仕舞つたが、鏡を手に執れば、見ない譯には行かぬ。そこで、花下の盃を他人の更に勸むるのを待つ外はない。

古意

兒童鞭笞學官府。
翁憐兒癡旁笑侮。
翁出坐曹鞭復呵。
賢于羣兒能幾何。
兒曹鞭人以爲戲。
公怒鞭人血流地。
等爲戲劇誰復先。
我笑謂翁兒更賢。

【字解】【一】鞭笞　山公註に、「漢刑法志、薄刑は鞭朴を用ふ。唐開元名例律、笞刑五注、笞條を用ふ、十より五十に至る。贖銅、一斤より五斤に至る。賈誼の過秦論、敲朴を執り、以て天下を鞭笞す」とある。【二】坐曹　曹は小役人。【三】血流地　左傳に「鬷を徒人費に葬め、これを鞭つて血を見るなからしむ」とあり、北史齊本紀に「流血、地に溢ぎ、以て娛樂となす、又馬鞭を以て楊情の背を鞭ち、流血、地に溢れし」とあつて、山公註に「按するに、古しへより今に至るまで、鞭笞流血を以て戲劇となすもの、高洋に若くはなきなり。題して古意といふ、豈に亦た此に感ずるあるか」とある。

【題義】査初白は「愼、案するに、この一首、張文潛の宛邱集第十四卷に見え、有感三首の一なり。

兒童、張集に羣兒に作り、鞭人以爲戲、張集に相鞭以爲戲に作る。蛍溪詩話に云ふ、張文潛の兒曹鞭笞學官府云云、予謂ふ、この詩、亦た權を操るものをして知らしめざるべからざるなり、と。宋文鑑、選して二十一卷中に入れ、亦た以て張耒となす。この三段に據るに、その文潛の作たること、疑なし」とある。

【詩意】兒童は、鞭もて人を笞ち、役所の眞似だといつて得意がつて居る。すると、老翁は、兒童の癡愚を憐み、傍に立つて、且つ笑ひ且つ侮つて居る。しかし、老翁が家を出でて小吏の間に坐せば、矢張、人を鞭つて呵責をして居るので、格別、羣兒より賢なる譯ではない。兒童等は、人を鞭つて游戲として居るのであるが、老翁は、本氣に怒つて、人を鞭つから、流血は地に流るるばかりで、隨分、慘澹たる有樣である。兩者とも、等しく戲劇であるとして、誰が先たるべきか、われ笑つて老翁に向ひ、羣兒の方が更に賢いといつて遣つた。

雷州八首

白髮坐鉤黨。南遷瀕海州。白髮、鉤黨に坐し、南に遷る瀕海の州。
灌園以餬口。身自雜蒼頭。園に灌して以て口を餬し、身、自ら蒼頭に雜はる。

籬落秋暑中。碧花蔓牽牛。籬落、秋暑の中、碧花、牽牛を蔓す。
誰知把鋤人。舊日東陵侯。誰か知らむ、鋤を把るの人、舊日の東陵侯たるを。

【字解】【一】鉤黨　後漢書黨錮傳に「陳蕃、太傅たり、大將軍竇武と共に、朝政を秉り、宦官を誅せむことを謀る、故に天下の名士を引用す、乃ち李膺を以て長樂少府となす。陳竇の敗るるに及び、膺等、復た廢ぜらる。後、張儉の事起りて鉤黨を收捕するや、鄉人、膺に謂つて曰く、去るべし。對へて曰く、事、蘇を辭せず、臭、刑を逃れず、臣の節なり、吾、年すでに六十、死生命あり、去つて將に安くにか之かむとする、と。乃ち獄に詣つて考死す」とある。この詩は、餘論の項に述ぶるが如く、もと秦觀の作に係り、宋史の本傳に「紹聖の初、黨籍に坐し、出でて杭州に通判たり。賞錄を增損するを以て、貶ぜられて處州酒稅を監し、繼いで秩を削つて郴州に徙され、橫州に編管し、又雷州に徙され、徽宗立つて、放ち還され、藤州に至つて卒す」とある。【二】灌園　後漢書鄧騭傳に「於陵の仲子、三公を辭し、人の爲に園に灌す」とある。【三】餬口　左傳に「その口を四方に餬ぜしむ」とある。【四】蒼頭　漢書鮑宣傳に「蒼頭、虛兒皆用つて富を致す」とあつて、その註に「奴を謂うて蒼頭となす、猶ほ、秦、黔首と言ふがごときなり」とある。【五】東陵侯　卽ち召平、前に蔡州道上遇雪の詩中に注して置いた。

【題義】一統志に「雷州は古しへの粵地、天文、牛女の分野、秦、象郡に屬し、漢、徐聞となし、梁隋、合州となして海康縣に治し、唐、雷州たり」とある。この詩は、東坡ではなく、實は秦觀、字は少游の作であつて、後に餘論の項に於て詳說することにする。

【詩意】白髮の生える老年に成つてから、朋黨の事に連坐し、南、海に瀕するこの雷州の地に貶謫された。そこで、人の爲に、園中に水を灌して、いささか餬口の資を得、蒼頭の下僕輩に立ちまじつて

居る。秋暑の候、籬落の間には朝顔の蔓が延びて、碧花を開いて居る。鋤犁を把つて躬耕するものが、當年の東陵侯であることを誰も知らなかつたといふのは、むかしの事ながら、今日の予も、まさしく其類である。

【餘論】紀昀は「前四首は佳」といつて居る。

荔子無幾何。黄甘遽如許。荔子、幾何もなく、黄甘、遽に許の如し。
遷臣不惜日。恣意移寒暑。遷臣、日を惜まず、意を恣にして寒暑を移す。
層巢俯雲木。信美非吾土。層巢、雲木に俯し、信に美なれども、吾が土に非ず。
草芳自有時。鵑鳩何關汝。草の芳なる、自ら時あり、鵑鳩、何ぞ汝に關せむ。

【字解】【一】黄甘　廣志に「荔支は樹青く花朱、實の大さ、雞子の如し。實白、肪の如く、甘くして汁多く、安石榴に似たり。甜酸なるものあり、日、幷に中ぜむとするに至つて、翕然として俱に赤ければ、食ふべきなり、一樹子を下す、百斛あり」と見え、風土記に「甘橘の屬、滋味甜美、黄なるものあり、緒なるものあり、これを胡甘といふ」とある。【二】信美非吾土　王粲の登樓賦に見えたる句、前に北寺の詩中に注して置いた。【三】鵑鳩　杜鵑を云ふ。前に和「張郎中春雪」の詩中に注して置いた。

【詩意】荔子の實は、幾ばくもないが、遽に黄色に熟して、甘きこと、かくの如く、遷謫の臣は、日を惜まず、意を恣にして寒暑を移す。高い處に掛れる鳥の巣は、雲を帶びたる喬木を俯視し、あたりの景色は、至極面白いが、萬里の異郷であつて、わが故土に非ざるが故に、感慨を催さぬ譯には行かない。芳草は、自然、時があつて生長するので、決して、汝、杜鵑の關係して居ることではない。

【餘論】紀昀は「怨んで怒らず」といつて居る。

下居近流水。小巣依嶺岑。下居、流水に近く、小巣、嶺岑に依る。
終日數椽間。但聞鳥遺音。終日、數椽の間、但だ聞く鳥の遺音。
爐香入幽夢。海月明孤斟。爐香、幽夢に入り、海月、孤斟に明かなり。
鷦鷯一枝足。所恨非故林。鷦鷯、一枝足れり、恨むところは故林に非ず。

【字解】【一】下居　低地に在る住宅。【二】嶺岑　嶺、一に嶔に作る。【三】數椽　住居の狹きをいふ。【四】鷦鷯　莊子に「鷦鷯は深林に巣ふも、一枝に過ぎず」とあつて、前に除夜病中の詩中に注して置いた。

【詩意】低い處に在る住宅は、流水に近く、小さい鳥の巣は、あたりの險しい山に依り、終日、家の中では、鳥の鳴く音が聞こえる。金爐で焚く香の煙は、幽夢の中に入り、海上の明月は、獨酌を照ら

して明かである。鷦鷯は一枝を以て足れりとして居るけれども、その場所が故國の山林で無いのが、遺憾の至である。

培塿無松柏。駕言此焉游。　培塿に、松柏なく、駕して言に、此に游ぶ。
讀書與意會。却掃可忘憂。　讀書、意と會し、却掃、憂を忘るべし。
尺蠖以時屈。其伸亦非求。　尺蠖、時を以て屈し、その伸ぶる、亦た求むるに非ず。
得歸良不惡。未歸且淹留。　歸るを得ば、良に惡しからず、未だ歸らず、且つ淹留。

【字解】【一】培塿　說文に「培塿は小山なり」とある、晏子に「培塿、松柏を生ず」とある。【二】却掃　前に與三周長官二の詩中に注して置いた。

【詩意】小山に有るべき筈の松柏だになく、車に乘つて、此に游びに出かけたが、どうにも仕方がない。書物を讀んで、わが意と相會する時は、さながら掃除をした樣に、憂を忘れ去ることが出來る。尺蠖は、時を以て屈し、その伸ぶるのも、亦た求むるところあつて然るに非ず。ここから、北に歸ることが出來れば、まことに惡くはないが、まだ歸らずして、しばらく淹留して居るから、まことに懷きことの限りである。

粵嶺風俗殊。有疾時勿藥。　粵嶺、風俗殊なり、疾あるも、時に藥するなし。
束帶趨房祀。用史巫紛若。　束帶して、房祀に趨き、史巫の紛若たるを用ふ。
絃歌薦繭栗。奴至洽觴酌。　絃歌して繭栗を薦め、奴至つて、洽ねく觴酌。
呻吟殊未已。更把雞骨灼。　呻吟、殊に未だ已まず、更に雞骨を把つて灼く。

【字解】【一】房祀　馮應榴の案に「騈は詩の大房、禮記の東房・西房のごときなり」とある。【二】史巫　易に「巽、牀下に在り、史巫を用ひて紛若たり」とある。【三】雞骨　漢書郊祀志に「粵人、これを勇とす、乃ち言ふ、粵人の俗は鬼、而して、その祠、皆鬼を見ること、數ばにして效あり、廼ち粵巫に命じ、粵の祝祠を立つ、臺に安んじて壇なく、亦た天神帝百鬼を祠り、而して、雞を以て、卜することこれより始めて用ふ」とある。

【詩意】越嶺の外は、風俗特殊にして、疾病あるも、すべて藥を與へず、束帶して房祀に赴き、神主や巫女を聚めて、頗る賑はしく、絃歌して繭栗を供へ、そして、下部が出て來て、殘りなく酒を酌ましめる。それで、病者が呻吟して殊に已まざる時は、更に雞骨を火に燒いて、それで卜をする。

粵女市無常。所至輒成區。　粵女、市に常なく、至るところ、輒ち區を成す。
一日三四遷。處處售鰕魚。　一日三四遷、處處に鰕魚を售る。

青裙脚不襪。臭味猿與狙。　青裙、脚、襪せず、臭味、猿と狙と。
孰云風土惡。白洲生綠珠。　孰れか云ふ、風土惡しと、白洲、綠珠を生ず。

【字解】【一】生綠珠　方輿記に「博白雙角山下、梁氏の女綠珠、ここに生まる。石崇、採訪使となり、珠三斛を以て之に易ふ。會井、倒に存す、汲飲するもの、女を產すれば、必ず麗色」とあり、嶺表錄異に敍するところも、略ぼ同じく、能改齋漫錄に「白州雙角山、猶ほ綠珠井を存す。今綠珠水あり、相傳ふ、水旁の問、美麗を產す」とある。

【詩意】越の女の市を開くのは、一定の場所もなく、至るところ、卽ち區を成し、一日中に三四回も遷り、どこでも、蝦や魚を賣つて居る。越の女は、青裙の儘、素足で、足袋を穿かず、その臭味は、猿狙と類して居る。しかし、風土が惡いといふのではなく、現に、白州に於ては、綠珠の如き絕代の佳麗を產出したことがある。

海康臘己酉。不論冬孟仲。　海康、臘は己酉、冬の孟仲を論せず。
殺牛撾鼓祭。城郭爲傾動。　牛を殺し、鼓を撾つて祭り、城郭、爲に傾動。
雖非堯頒曆。自我先人用。　堯の頒曆に非ずと雖も、わが先人より用ふ。
苦笑荆楚人。嘉平臘雲夢。　苦笑す、荆楚の人、嘉平、臘には雲夢。

【字解】【一】海康　地名、前に吾謫海南の詩中に注して置いた。【二】臘己酉　臘には先祖を祭り、蜡には百神を祭り、眞觀の初には、丑の日に蜡、辰の日に臘の祭をしたが、宋では、二祭ともに、同じく戌の日を用ひた。しかし、海康では、己酉の日を用ふるといふので、唐宋の制に遵はないのである。【三】冬孟仲　初冬と仲冬。【四】嘉平　史記に「秦の始皇の時、更めて臘を名づけて、嘉平といふ」とある。【五】雲夢　澤の名。臘とは、元と田獵の獲物を云ふので、荆楚の人は、臘の祭をなす前に、雲夢に於て獵をした。

【詩意】海康の地に於ては、己酉の日に臘の祭をするので、初冬でも、仲冬でも拘はない。その時は、牛を殺し、鼓を鳴らし、その鬧がしいことは、城郭も爲に傾動せむばかり。これは、堯が制して頒布した年中行事ではないが、その起源、頗る古く、そして、荆楚の人が臘の祭をなす爲に、前以て、雲夢に獵することを笑つて居る。

舊時日南郡。野女出成羣。　舊時の日南郡、野女、出でて羣を成す。
此去尙應遠。東風已如雲。　ここを去つて、尙ほ應に遠かるべし、東風、すでに雲の如し。
蚩氓託絲布。相逢通殷勤。　蚩氓、絲布に託し、相逢うて殷勤を通ず。
可憐秋胡子。不遇卓文君。　憐むべし秋胡子、卓文君に遇はず。

【字解】【一】日南郡　後漢書郡國志、日南郡の註に「秦の象郡、武帝、名を更め、交州刺史の所都に屬す」とあり、劉熙の逸雅に「郡は羣なり、人の羣聚するところなり」とある。【二】已如雲　詩經に有る女如雲とある。【三】蚩氓託絲布　詩經の氓之蚩蚩に抱布貿絲とある。【四】秋胡子　列女傳に「魯の秋胡流婦は、魯の秋胡の妻なり。秋胡子、すでに之を納る、五日にして去つて

陳に宦し、五年、乃ち歸る。未だ家に至らざるに、採桑の婦の美なるを見、謂つて曰く、力田は少年に逢ふに如かず、力桑は公卿を見るに如かず。今、われ金あり、願はくは、夫人に與へむ、と。夫人受けず。秋胡子、家に還り、金を奉じて母に遺る。母、人をして其婦を呼ばしむれば、卽ち採桑者の婦、乃ち自ら河に投じて死す」とある。【七】卓文君　前に數ば見ゆ。蜀人卓王孫の女、新に寡して、司馬相如に琴心を以て挑まれ、遂に之と駈落をした。

【詩意】むかしの日南郡に於ては、百姓女が野に出でて羣を成すといふが、その地は、ここより尙ほ遠かるべく、東風、一たび吹き至れば、野外に聚まるもの、雲の如く夥しい。氓の蚩蚩たるもの、布を抱いて絲を買ふに託し、言ひ寄つて殷勤を通ずることが、その地の風俗である。秋胡子の如きも、ここに來さへすれば、いくらでも、卓文君の如き風流女に逢ふことが出來たらうが、まことに氣の毒なことであつた。

【餘論】査初白は「右五言古詩八首、皆秦少游の作なり。按ずるに、淮海集中、雷陽書事三首あり、今、越嶺風俗殊、舊時日南郡は乃ち其二。又海康書事十首あり、今、白髮坐二鉤黨一、荔子無二幾何一、下居近二流水一、培塿無二松柏一、粵女市無レ常、海康臘己酉は乃ち其六。先生、遠く海外に謫せられ、應に南遷瀕海州といふべからず、その子由に相遇ひ、同行、雷に至り、僅に留まること月餘、一の悠悠たる過客、豈に灌園餬口の事あらむや、且つ先生、雷を過ぎて海を渡るを計るに、五六月の間に在り、今、詩中、一は籜落秋暑中といひ、二は黃甘遽如許といひ、三は海康臘己酉といひ、四は東風已如レ雲といふ、細に詩意を玩ぶに、皆この地に謫居し、夏より秋に徂き、冬に背いて春を涉る、歲時記事の辭、斷斷として、東坡の作に非ず。これを宋文鑑第二十卷中選するところ、海康書事五首に考ふるに、亦た以て秦の作となすこと、疑なきなり」といつて居る。

申王畫馬圖

申王の畫、馬圖

天寶諸王愛名馬。
天寶の諸王、名馬を愛し、

千金爭致華軒下。
千金、爭つて致す華軒の下。

當時不獨玉花驄。
當時、獨り玉花驄のみならず、

飛電流雲絕瀟灑。
飛電流雲、絕だ瀟灑。

兩坊岐薛寧與申。
兩坊、岐薛、寧と申と、

憑陵內廐多清新。
憑陵內廐、清新多し。

肉騣汗血盡龍種。
肉騣汗血、盡く龍種、

紫袍玉帶眞天人。
紫袍玉帶、眞に天人。

驪山射獵包原隰。
驪山の射獵、原隰を包ね、

【字解】【一】天寶諸王　王註に「岐薛寧申の四王、皆明皇の諸弟」とあるが、查註に「案ずるに、舊唐書に、睿宗の六子、その一、早く卒す、竇后は明皇を生み、劉后は肅皇帝憲を生む、卽ち寧王なり、宮人柳氏、申王撝を生み、崔婦人、岐王範を生み、王德妃、薛王業を生む。はじめ、閤を出でて第を東都興慶坊に列し、五王宅と號すと。洪容齋謂ふ、明皇の兄弟五人、岐薛申寧よりして外、又郊王守禮あり、而して、舊唐書載せず、今これを考ふるに、寧王

御前急詔穿圉入。　御前、急に詔して圉を穿つて入る。
揚鞭一蹙破霜蹄。　鞭を揚げて一蹙、霜蹄を破る、
萬騎如風不能及。　萬騎、風の如く、及ぶ能はず。
雁飛兎走驚弦開。　雁は飛び、兎は走り、驚弦開き、
翠華按轡從天回。　翠華、轡を按じて天より回る。
五家錦繡變山谷。　五家の錦繡、山谷を變じ、
百里烏珥遺纖埃。　百里の烏珥、纖埃を遺す。
青騮蜀棧西超忽。　青騮蜀棧、西に超忽、
高準濃娥散荊棘。　高準濃娥、荊棘に散ず。
回首追風趁日飛。　首を回らせば、追風、日を趁うて飛び、
五陵佳氣春蕭瑟。　五陵の佳氣、秋蕭瑟。

は申王の兄なり、岐王は薛王の弟なり、明皇とともにして五たり。故に、當時、明皇を目して三郎となす。申王は開元十二年に薨じ、岐王は十四年に薨じ、薛王は二十二年に薨じ、惟だ寧王稍や後る。然れども、亦た二十九年に沒す。天寶改元以後、諸王一も存するものなし。この詩の起句に天寶諸王といふは、乃ち一時落筆の誤、又王氏書註に謂ふ、岐薛申寧、皆明皇の弟、と。何の據るところたるを知らざるなり」とある。【三】華軒　立派なる車。【四】玉花驄　素斷に「唐の玄宗の乘ずるところ、玉花驄・照夜白あり」と見ゆ。【五】飛電流星　ともに馬の名。新唐書回鶻傳に「唐の貞觀中、骨咄、良馬を

貢す、一は飛電赤と名づけ、一は奔虹赤と名づく」とあり、名畫錄に「開元の內廐、浮雲の乘あり」と見ゆ。【六】肉鞭　鞭は鞭、杜甫の詩に肉鞭磊磊連錢動とある。【七】汗血　前に次韻孔文仲二送二段屯田一次韻答二完夫一等の詩中に注して置いた。【八】鷹飛兎走　山公註に「古今詩、秦の始皇、七名馬あり、一に追風、二に白兎、三に踏雪、四に追電、五に飛翮、六に銅臂、七に晨凫。瑞應圖に、飛兎は神馬の名、日に行くこと三萬里。顧延之の馬賦、紫燕騏衡。按ずるに、應飛・兎走、皆馬を指して言ふ、すなはち、應、當に燕に作るべし」とある。【九】翠華　天子の旗、ここでは天子を指して云ふ。【九】按轡　手綱を取り捌く。【一〇】五家　唐書后妃傳に「十月ごとに、帝、華淸宮に幸す。五宅の車騎、皆從ふ。家ごとに、別つて隊となし、隊一色、彼にして、五家の隊合すれば、爛ゝして、萬花の若く、川谷、錦繡を成す」とある。【一一】百里烏珥　唐書后妃傳に「遣銅墮烏、瑟瑟琵琶、道に狼藉として、香、數十里に聞こゆ」とある。【一二】青騮　山公註に「原註、明皇、青騮に乘じて蜀に入る」とあるが、他本には見えない。【一三】高準　隆準に同じ、鼻の高いこと。【一四】濃娥　眉の濃いこと。【一五】五陵　杜甫の詩に王孫善保千金軀、五陵佳氣無二時無一とある。宣註に「班孟堅の賦、南望二杜鄠一北眺二五陵一。李善註に、高帝の長陵、惠帝の安陵、文帝の霸陵、景帝の陽陵、武帝の茂陵、平帝の昭陵、宣帝の杜陵。程大昌の雍錄に云ふ、七帝七陵にして五陵と稱するもの、劉良謂ふ、高・惠・景・武・昭の五陵、北に在りと。その說、是なり。北に在りとは、渭の北に在るなり。後世、陵邑の盛を言うて、但だ五陵といふは、語順なれば

【題義】　申王は、唐の玄宗の弟で、この詩は、その人の畫いた馬の圖に題したのである。查初白は「愼、案ずるに、苕溪漁隱叢話、この詩及び老人行、皆東坡の作るところに非ず、故に前集載せず。又云ふ、蔡天啓、王荊公に知るところたり、東坡の申王畫馬圖歌は、卽ち天啓の作、その氣格、東坡に類するあり、世、因つて誤まつて收め入る。その後、姑蘇の居世英の家、東坡前後集を刊するや、遂に刪り去る云云と。蔡天啓、名は肇、紹聖元符中、中書舍人に官し、かつて、睦州に守たり、後、元祐の黨に坐して斥に遭ふ」とある。

【詩意】天寶の時の諸王は、名馬を愛せられ、各〻千金を投じて、これに立派な車を引かせることにした。その當時の名馬は、ひとり玄宗乘用の玉花驄のみでなく、飛電、流雲といふべき、甚だ瀟灑なものが幾らもあつた。諸王の中、岐薛と寧申とは、兩坊に分れて住み、その飼つて居る馬は、内厩をも壓倒する位で、清新なるものが多く、鬣の肉が高く張り、一たび走れば、血の如き赤い汗を流すのは、盡く龍馬の種であつて、紫袍玉帶を著けて、これに乘ずれば、さながら天人の如く見える。驪山に於て、射獵を催される時は、廣い澤地を包圍し、やがて、御前より急に詔を下し、圍を穿つて、その中に攻め入れと仰せられる。そこで、鞭を揚げ、一たび脚を縮めて、霜を踏む蹄を高く蹴上げると、その勢のすさまじさ、風の如き萬騎も及ぶことが出來ぬ位。たとへば、燕が飛び兎が走るが如く、弓の弦を開いて、矢を放つと、見事に命中し、天子は、手綱を手にした儘、天上より回り來つて、ぢッと見て居られる。やがて、愈よ還幸になるまで、楊氏の五家は、錦繡を張つて山谷の景色を一變し、路に落ちて居る遺鈿墮舄は、百里も續いて、塵埃に塗みれた儘である。開寶全盛の日は、かくの如くであつたが、安祿山、一たび亂を爲し、玄宗が、青騾に跨つて、はるばると蜀の棧道を通つて、忙がしげに落ちて行かれると、當時の名臣佳麗等、盡く荊棘の中に散じて跡もなく、首を回らせば、追風の駿馬のみが、日影を趁うて急に馳せ去り、長安に於ける五陵の佳氣も、秋になれば、蕭瑟として、物さびしく、とても、克復の望なきが如く見えたと思はれるので、今、この圖を見るにつけても、感慨愴然たるを禁じ得ぬ始末である。

【餘論】紀昀は「眞に東坡の意あり」といつて、推賞して居る。

老人行

有一老翁老無齒。
處處無人問年紀。
白髮如絲向下垂。
一雙眸子碧如水。
不裹頭。又無履。
相識雖多少知己。
問翁畢竟何所止。
笑言只在紅塵裏。
秋風獵獵行雲飛。

老人行

一老翁あり、老いて齒なく、
處處、人の年紀を問ふなし。
白髮、絲の如く下に向つて垂れ、
一雙の眸子、碧、水の如し。
頭を裹まず、又履なし、
相識多しと雖も、知己少し。
翁に問ふ、畢竟、何の止まるところ、
笑ひ言ふ、只だ紅塵の裏に在りと。
秋風獵獵、行雲飛ぶ、

【字解】【一】年紀　年齢に同じ。

【三】所止　止は落ちつく處。

老人此意無人會。
目注雲歸心自知。
黃口小兒莫相笑。
老人舊日曾年少。
浪跡常如不繫舟。
地角天涯知自跳。
亦曾樂半夜。
傳籌醉朱閣。
美人如花弄絃索。
只恨尊前明月落。
亦曾憂羈旅。
他鄉迫莫秋。
故國日邊無信息。

老人の此意、人の會するなし。
目は雲の歸るに注いで、心、自ら知る、
黃口の小兒、相笑ふ莫れ。
老人、舊日、かつて年少、
浪跡、常に繫がざる舟の如し。
地角天涯、知る自ら跳るを。
亦た曾て半夜を樂み、
籌を傳へて朱閣に醉ふ。
美人、花の如く、絃索を弄し、
只だ恨む、尊前、明月の落つるを。
亦た曾て羈旅を憂へ、
他鄉、莫秋に迫る。
故國、日邊、信息なく、

【三】黃口　雛雀の嘴の黃色なるに比して云ふ。
【四】浪跡　浪游の跡。
【五】傳籌　籌は數とり、白居易の詩に醉折二花枝一當二酒籌一とある。
【六】莫秋　莫は暮に同じ。

斷鴻空逐水長流。
或安貧。　或安富。
或爵通侯封萬戶。
一任秋霜換鬢毛。
本來面目長如故。
水有蘋兮山有芝。
人意雖存事已非。
有時却憶經游處。
都似茫茫春夢歸。
爾來尤解安貧賤。
不爲公卿强陪面。
皎如明月在秋潭。
動著依前還不見。

斷鴻、空しく水を逐うて長く流る。
或は貧に安んじ、或は富に安んじ、
或は通侯に爵して、萬戶に封せらる。
一に任かす、秋霜の鬢毛を換ふるに、
本年の面目、長しへに故の如し。
水には蘋あり、山には芝あり、
人意、存すと雖も、事、すでに非なり。
時あつて、却つて憶ふ經游の處、
すべて似たり、茫茫、春夢の歸るに。
爾來尤も貧賤に安んずるを解す、
公卿の强ひて陪する面を爲さず。
皎として、明月の秋潭に在るが如し、
動著、前に依つて還た見えず。

【七】爵通侯　侯爵。
【八】强陪面　いやいやながら、強に陪坐して笑顏をする。
【九】動著　動靜行止に同じ。

還不見。可奈何。　還た見えず、奈何すべき、
空使遠人增眷戀。　空しく遠人をして、眷戀を增さしむ。
但祇從他隨物轉。　但だ祇だ從す他の物に隨つて轉ずるに、
青樓黃閣長相見。　青樓黃閣、長しへに相見る。
若相見。莫殷勤。　もし相見るも、殷勤にする莫れ、
却是翁家舊主人。　却つて是れ翁家の舊主人。

【10】青樓　漢紀に「漢の世觀、樓上に於て青漆を施し、これを青樓といふ」とあつて、下の黃閣が三公の詰所たると并せて、臺省の職。杜牧の詩に贏得青樓薄倖名とある、その青樓とは、意義を殊にして居る。

【語義】この詩は、ある老人に代つて、その感慨を述べたのである。查初白は「愼、案ずるに、苕溪漁隱叢話、東坡集、世に行はるるもの、惟だ大全備成の二集、詩文最も多し。誠に言ふところの如きも、眞僞相半す。その後、居世英の家、大字前後集を刊し、最も善本たり。世に傳ふ、前集は、乃ち東坡手づから自ら編するもの、謬誤絕だ少し。御史府の諸詩の如き、これを世に傳ふるを欲せず、老人行、題申王畫馬圖」は、その作るところに非ず、故に皆之なし云云と。胡仔は南宋の人、その言、必ず據なきに非ず」とあつて、要するに、この詩が、東坡の作でないことだけは、確實である。

【詩意】一老翁があつて、大分、年を取つて、すッかり齒が拔けて仕舞ひ、そして、どこへ往つても、あまり氣の毒なので、年齡を問ふ人もない位。白髮は、絲の如く、下に向つて垂れ、二つの眸子は、碧色にして水の如くである。その上、頭巾も被らず、履をも穿かず、顏を見知つて居るものは、多いけれども、本當の知己は、至つて少い。翁に向つて、とどのつまりは、何處に落ち付くかと問へば、翁は笑つて、只だ紅塵の中に居るといつた。折から、秋風颯颯として、空ゆく雲は飛び迷ふけれども、老人の此意を本當に領會する人はない。翁は、歸りゆく雲に注目して居るが、その心は、唯だ自ら知るのみである。口先の黃色な小兒どもは、決して、笑はぬが善いので、老人とても、むかしは、かつて少年であつて、その浪游の跡は、繫がざる舟の如く、天涯地角、どこでも、勝手に躍り跳ねて居た。この人でも、むかしは、夜半に豪興を縱にし、數どりを傳へて、紅閣の上に醉ひ、花の如き美人が紘索を弄し、尊前に明月の落ち行くを遺憾に思つて居た位。それから、ある時は、羇旅を憂へ、知らぬ他鄕に於て、暮れ行く秋に迫られ、悲しい思をしたこともあるので、故國は、日邊に遠く、絕えて音信だになく、列を離れし雁が、長しへに流るる江水を逐うて、飛び行くのみである。そこで、ある時は、貧に安んじ、ある時は、富に安んじ、或は目ざましく立身して、爵、通侯を賜はり、萬戶に封せられたこともあつたが、やがて、秋の霜の鬢毛を換ふるに任かせ、本來の面目は依然として、もとの儘である。顧みれば、水には蘋あり、山には芝あるが如く、人の意志は、矢張、存在して居るものの、萬事、すでに非にして、運命が與みせぬ上は仕方がない。時あつて、從前經過した跡を追憶すると、すべて、茫茫たる春夢に同じである。その後、貧賤に安んずべきことが、餘程分かつて來た

ので、この上は、公卿輩の如く、上官の前で、心にもあらぬ機嫌よき顔をすることも無い樣になつた。心、ここに至れば、皎皎として、明月の秋潭に在るが如く、行止は、前の通りであるが、最早、矢鏑に人の目に觸れる處に出遮張ることも致さず、すでに、人の目に付く處に居らぬからには、むなしく、遠人をして眷戀の想を增さしむるばかり。物に隨つて、頻轉して行くに任かせ、唯だ臺省の上に於て、末長く相見ることが出來るのである。しかし、相見たとて、あまり鄭重にせぬが好いので、今は、老翁自身、その家の舊主人たるに過ぎぬからである。

【餘論】紀昀は「これ眞に惡札」といつて、ひどくけなして居る。

又贈老謙

又老謙に贈る

瀉湯舊得茶三昧。　湯を瀉いで、舊と茶三昧を得、
覓句近窺詩一斑。　句を覓めて、近ごろ、詩の一斑を窺ふ。
清夜漫漫困披覽。　清夜漫漫、披覽に困む、
齋腸那得許慳頑。　齋腸、那ぞ許く慳頑なるを得む。

【字解】〔一〕齋腸　齋は精進。〔二〕慳頑　片意地にして頑固なること。

【題義】老謙は、前に見えた南屏の謙師であらう。查初白は「愼、案ずるに、能改齋漫錄に云ふ、この詩、劉貢父の作るところ」とあり、馮應榴の案に「この詩、彭城集に見ゆと雖も、但だ先生が前に南屏の謙師を送る詩に、來試點茶三昧手の句あり、すなはち、この詩、亦た先生の詩たるに似たり」といつて居る。

【詩意】老師は、早く既に湯を瀉いで、煎茶三昧を悟られたが、近ごろは、句を覓めることに因つて、詩の一斑を窺はれた。折から、清夜漫漫として長きも、披覽に困む位、澤山の詩があるので、精進ばかりして居る心腸でありながら、どうして、かほどまで、片くるしく老頑に遣つて退けたものであるか、どうも不思議の至りである。

送公爲游淮南

公爲の淮南に游ぶを送る

負米萬里緣其親。　米を萬里に負ふは、その親に緣り、
運甓無度憂其身。　甓を運んで度なきは、その身を憂ふ。
讀書莫學流麥士。　書を讀んで、學ぶ莫れ、麥を流すの士、
挾策莫比亡羊人。　策を挾んで、比する莫れ、亡羊の人。
乃翁辛苦到白首。　乃翁は、辛苦して白首に到る、

【字解】〔一〕負米萬里　家語に「子路曰く、むかし、由、二親に事ふる時、かつて、藜藿の食を食ひ、親の爲に米を百里の外に負ふ、親沒するの後、南、楚に游ぶ、從車百乘、積粟萬鍾、茵を累ねて坐し、膳を列して食ふ、顧みて、藜藿を食ひ、親の爲

汝今勉強當青春。　汝今、勉強して、青春に當る。
昔時管鮑以君霸。　昔時管鮑、君を以て霸たらしむ、
此兩士賈寧非貧。　この兩士賈、むしろ、貧に非ざらむや。

へて曰く、晉、方に力を中原に致す、過つて留かく優逸なれば、恐らくは、事に堪へず、と。その志を勵まし、力を勤むる、皆この類なり」とある。【四】流寥士　後漢の高風、前に徐大清閒軒の詩中に注して置いた。【五】乃翁　父君の稱。【六】管鮑　管仲・鮑叔牙の二人、齊の桓公を霸たらしめしこと。【七】兩士賈　管鮑二人、かつて行商を爲せしをいふ。

【題義】　査初白は「愼、案ずるに、この詩、亦た難助集に見ゆ、晁无咎の作なり、題下、晁の自註に云ふ、陶靖節云ふ、既耕亦已種、且還讀我書」と。卽ち此意なり」とあり、馮應榴の案に「晁無咎集に、公爲求親の啓あり、中に云ふ、仲孺、姪は孫吏部の長男、公爲は人に逮ばず、粗ぼ敎ふるに義を以てす、云云と。すなはち、公爲は、當に是れ无咎の從孫行たるべきなり」とある。すると、この詩は、晁无咎の作で、その從孫公爲の淮南に游ぶを送つたのである。

【詩意】　米を萬里の遠きに負ふは、その親を養はむが爲めであるし、甕を運んで度なく、しきりに、骨の折れる業をするのは、その身の懦弱になるのを心配して居るからである。書を讀んでも、かの庭上の乾麥を流せし高鳳の眞似をせず、鞭を腋ばさんでも、羊を亡つて探がし廻る人に比してはならぬ。汝の親父は、辛苦の餘り、白髮頭に成つた位で、汝は今勉強すべく、丁度、青春の若い盛りに當つて居る。むかし、管仲・鮑叔牙の二人は、その君を輔けて霸主とした位であるが、この二人とても、はじめは、行商をした位で、決して貧乏でない譯ではなく、これにつけても、汝の奮勵せむことを切望する次第である。

池上二首

小池新鑿會天雨。　小池、新に鑿つて、會ま天雨ふる、
一部鼓吹從何來。　一部の鼓吹、何よりか來る。
有蟾正碧亂草色。　蟾あり、正に碧にして草色を亂し、
時泅出沒東南隈。　時に泅いで出沒す、東南の隈。
井幹跳梁亦足樂。　井幹跳梁、亦た樂むに足る、
洞庭魚龍何有哉。　洞庭の魚龍、何かあらむや。
能歌德聲莫入月。　能く德聲を歌ふも、月に入る莫れ、
清池與爾俱忘回。　清池、爾と俱に回るを忘る。

【字解】【一】鼓吹　前に次韻遠古夜飲の詩中に注して置いた。【二】有蟾　蟾は蟾蜍、ひきがへる、蛙の大なるもの。【三】井幹跳梁　莊子に「子、獨り埳井の蛙を聞かずや、東海の鼈に謂つて曰く、吾樂しいか、吾、井幹の上に跳梁す云云」とある。【四】莫入月　張衡の靈憲に「羿、不死の藥を西王母に請ふ。嫦娥、これを竊んで以て月に奔る。將に往かむとするや、これを有黃に枚筮す。有黃、これを占して曰く、

吉、縹緲たる歸綺、獨り斜に西行せむとす、天の晦冥に逢ふとも、驚く勿れ、恐るる勿れ、後、且に大に昌へむとすと。蟾蜍、遂に身を月に托す、これを蟾蜍となす」とある。

【題義】この詩は、池上に見たところを敍したのである。査初白は「愼、案ずるに、この二首、一たび、黃山谷集に見え、又晁无咎集に見え、題を家池雨中と云ふ」とある。すると、これは、黃晁二人、いづれかの作であらうが、兎に角、東坡の手筆でないことだけは、確實である。

【詩意】小さい池を掘つた處が、丁度、天が雨を下し、何處からとも知らぬが、一部の鼓吹が來て、そこで鳴いて居る。その蟾蜍は、碧色をして、草との區別が分からず、時時、泅ぎながら、池の東南隅に出沒して居る。井桁の上に跳梁して居ても、亦た樂むに足るべく、洞庭の魚龍などは、もとより眼中に無い。よく德聲を歌ふとも、奔つて、月中に入らぬが善いので、この淸池を繞つて、われは、汝と共に、歸るを忘れて居る。

不作太白夢日邊。
還同樂天賦池上。
池上新年有荷葉。
細雨魚兒喰輕浪。
男兒學易不應舉。
幽人一友吾得尙。
此池便可當長江。
欲榜茅齋來蕩漾。

【字解】【一】太白夢日邊　李白の詩に聞來垂釣碧溪上、忽復乘舟夢日邊」とある。【二】樂天賦池上　白居易の池上篇に、十畝之宅、五畝之園、有水一池、有竹千竿、有叟在中、白須飄然、云云とある。

【詩意】李白が日邊を夢みた樣なことはせず、却つて、白居易が池上篇を賦せしと同じである。新春になると、池上に蓮の葉が出て、小雨そぼふる折から、小さい魚が、輕浪に向つて、息をして居る。男兒、易を學んで、科擧などには應せぬ積り。易は、幽人の一友として、尊尙するに十分である。この池は、小なりと雖も、長江に當つべく、茅齋に何とか號をつけて、額でも揭げやうと思ひ、さて來て見れば、水は、矢張、蕩漾として、なかなか廣く見えるのが面白い。

贈仲素寺丞致仕、歸隱潛山

潛山隱君七十四。　仲素寺丞致仕し、歸つて潛山に隱るるに贈る

【字解】【一】潛山　套字記に、

紺瞳綠髮方謝事。
腹中靈液變丹砂。
江上幽居連福地。
彭城爲我住三日。
明月滿舟同一醉。
丹書細字口傳訣。
顧我沈迷眞棄耳。
年來四十髮蒼蒼。
始欲求方救憔悴。
他年若訪潛山居。
愼勿逃人改名字。

紺瞳綠髮、方に事を謝す。
腹中の靈液、丹砂に變じ、
江上の幽居、福地に連る。
彭城、わが爲に住まる三日、
明月、舟に滿ちて同一に醉ふ。
丹書細字、口づから訣を傳ふ、
顧みるに、我が沈迷、眞に棄てむのみ。
年來四十、髮蒼蒼、
始めて、方を求めて憔悴を救はむと欲す。
他年、もし潛山の居を訪はば、
愼んで、人を逃れて名字を改むる勿れ。

【題義】 査註に「仲素、姓は王、名は景純、註、卷十五に見ゆ。愼、案ずるに、先生、徐州に守たり、王仲素寺丞に贈る五言古詩一首あり、時に、子由、亦た徐に在り、この篇、乃ち同時の作。欒城集、原題に云ふ、贈致仕王景純寺丞」と。この年、熙寧丁巳たり、子由、己卯に生まる、故に年來四十髮蒼蒼といふ、その子由の作たること疑なし」とある。馮應榴の案に「この詩、又劉貢父の彭城集に見ゆ」とあるが、これは、誤つて收めたものであらう。

【詩意】 潛山の隱君たる王君仲素は、年、すでに七十四、瞳は紺色をなし、髮は綠にして、今しも、世事を謝絕したばかり。腹中の靈液は丹砂に變じ、江上の幽居は、福地に連つて居る。わが爲に、彭城に於て、三日逗留して臭れたから、明月の舟に滿つる夜、一緒に醉を恣にした。丹書の細字を繰り廣げて、口づから、祕訣を傳へて臭れたのは、至極有り難いが、われは、依然として、濁世に沈迷し、眞に棄つべきものである。今しも、年四十にして、髮は白く、やッと、仙方を求めて憔悴を救はうと思つて居る位。そこで、他年、もし君の潛山の居を訪うたならば、是非逢つて貰ひたいので、人を逃れる爲に、姓名を改めることの無い樣に御願します。

揚州、以土物寄少游

揚州、土物を以て少游に寄す

鮮鯽經年祕醽醁。
團臍紫蟹脂塡腹。

鮮鯽、年を經て醽醁を祕し、
團臍紫蟹、脂、腹を塡む。

【字解】 【一】 鮮鯽　鯽は鮒、孟説の本草に「鯽は是れ鯉魚の化するところ、その魚の腹上、なほ赤色あ

【二】 求方　方は仙藥の處方。

「潛山縣に在り、一名皖伯臺、左思、かつて此に修煉す、上に二嶌・三峰・四洞あり」と見ゆ。

後春蓴(四)茁滑于酥。　春に後れて蓴茁え、酥よりも滑かに、
先社薑芽肥勝肉。　社に先つて薑芽ぐみ、肥えて肉に勝れり。
鳥子纍纍何足道。　鳥子纍纍、何ぞ道ふに足らむ、
飽(六)飣盤飧亦時欲。　盤飧を飽飣する、亦た時欲。
淮南風俗事瓶罌。　淮南の風俗、瓶罌を事とす、
方法相傳竟旨蓄。　方法相傳へて、竟に旨蓄。
且同千里寄(八)鵝毛。　且つ同じく、千里、鵝毛を寄す、
何用孜孜飲麋鹿。　何ぞ用ひむ、孜孜、麋鹿に飲むを。

の盤譜に「濟鄆に生ずるものは、その色紺紫、江浙に産するものは、その色青白」とあり、皮日休の詩に蟹因霜重金背滚、橘爲風多玉脣圓とあり。【四】蓴茁　蓴菜が芽を出す、南方草木狀に「蓴は水中に生ず、葉は龜葵に似て水上に浮び、花は黄白、子は紫色、三月より八月に至る、莖細くして鈿股の如し、名づけて絲蓴となす、蝦ふに堪へたり、味甘美」とある。【五】薑芽　本草の註に「薑は、狀荊前後、新芽頗に長じ、指を列する狀の如し、采食するに筋なし、これを子薑といふ」とある。【六】飽飣　點綴に同じ、あしらふ。【七】方法　調製の法、杜甫の詩に「理レ生那免レ俗、方法報二山妻一」とある。【八】寄鵝毛　黄山谷詩註に復齋漫錄を引いて、千里寄　鵝毛二物輕人意重は鄙語なり」とある。

【題義】揚州から、土地の産物を秦少游に寄するに就いて、作つたといふのである。査初白は「愼、案するに、この詩、亦た淮海集第六卷に見え、題して以二蓴薑法魚糟蟹一寄二子瞻一と云ふ。中間字句異同の處、淮海集、較や勝る。秦は、高郵の人、篇中、土人を以て土貢を致す、語意特に親切、その秦の作たること疑なし」とある。

【詩意】新鮮なる鮒は、もと米の化したのであるから、年を經れば、又美酒になる。臍の丸丸と膨れたる紫蟹は、脂肪が腹に一ぱいである。春に後れて、蓴菜が出て、その滑かなることは酥の如く、秋社に先つて、新生薑が出て、その肥えた樣は、肉にも勝つて居る。鳥の卵の纍纍たることは、取り立てて言ふにも及ばず、これ等の品を以て、盤上の食物にあしらふのも、亦た時に取つての嗜好である。淮南の風俗は、酒を第一とし、その調製の方法は、相傳へて、旨味を蓄へて居る。今、輕少なること鵝毛の如き此等の物を、千里を隔てて送呈するので、何も孜孜として、麋鹿の肉のみで酒を召し上るにも及ぶまいと思はれる。

再過泗上二首

再び泗上を過ぐ　二首

眼明初見淮南樹。　眼明かに、初めて見る、淮南の樹、

〜〜【字解】【一】背蟹雨　後に據く り」と見ゆ、埤雅に「この魚、旅行、沫を吹いて風の如し、その相部くを以て故に之を鮒といひ、その相附くを以て故に之を鮒といふ」とある。【三】醽醁　荆州記に「淥水は、縣章康樂縣より出づ、その間、烏程鄉に酒官あり、水を取つて酒となし、極めて甘美、湘東酃湖の酒と、年ごとに貢て之を獻じ、世、酃淥酒と稱す」とあり、左思吳都賦に「飛二輕觴一而酌醽淥一」とあり、鄱陽の酒賦に、其品類則沙洛淥鄧、程鄉下若、高公之清、關中白薄とある。【三】紫蟹　傳玄

十客相逢九吳語。　十客相逢うて、九は吳語す。
旅程已付夜帆風。　旅程、すでに付す夜帆の風、
客睡不妨背船雨。　客睡、妨げず、背船の雨。
黃甘紫蟹見江海。　黃甘紫蟹、江海を見る、
紅稻白魚飽兒女。　紅稻白魚、兒女を飽かしむ。
殷勤買酒謝船師。　殷勤、酒を買うて船師に謝す、
千里勞君勤轉櫓。　千里君を勞す、勤めて櫓を轉せよ。

【題義】　查初白は「憤、案するに、この二首、舊と張文潛の宛邱集中に於て、かつて之を見る。今傳ふるところの張右史集、ひとり此を遺す、疑を存して附志し、以て再考を俟つ」といつて居るが、馮應榴の案に「今本、宛邱集、前一首、題を宿州道中に作り、後一首、題を阻風累日、泊二寶積山下一に作る、並に遺さざるなり」とあるから、矢張、張耒の作である。

【詩意】　望眼明かにして、はじめて、淮南の樹が見え、十人逢ふ旅客の中、九人までは、吳語をなして居る。夜帆の風に任かせて旅程を過ぎ行くから、ここに碇泊中、後に續く舟に降り注ぐ雨の音も、客睡の妨げにならぬ。黃柑紫蟹は、ともに江海の氣分に滿ちて居るし、紅稻白魚は、兒女を飽かしめるに足りる。そこで、酒を買つて、船頭どもに振舞ひ、君を煩はして、千里の遠きに行くのであるから、怠らず、櫓を動かして、成るべく早く著く樣に、精精骨を折つて吳れろといつた。

繫舟淮北雨折軸。　舟を淮北に繫げば、雨、軸を折り、
繫舟淮南風斷橋。　舟を淮南に繫げば、風、橋を斷つ。
客行有期日月疾。　客行期あり、日月疾く、
歲事欲晚霜雪驕。　歲事晚れむと欲して、霜雪驕る。
山根浪頭作雷吼。　山根の浪頭、雷吼を作し、
縮手敢試舟師篙。　手を縮めて、敢て試みむや、舟師の篙。
不用然犀照幽怪。　用ひず、犀を然やして幽怪を照らすを、
要須拔劍斬長蛟。　要するに、須らく劍を拔いて長蛟を斬るべし。

【詩意】　舟を淮北に繫げば、急雨、車軸を折るが如く、舟を淮南に繫げば、風は橋を斷ち切るばかり。

【字解】【一】　然犀　溫嶠の故事、前に仙游潭五首の詩中に注して置いた。
【二】　斬長蛟　水經註に「澄臺子羽、千金の璧を齎らして河を渡る。陽侯波起り、兩蛟、舟を夾む。子羽曰く、吾、義を以て來むべし、威を以て劫すべからず、と。劍を操つて蛟を斬る」とある。

船に注ぎかかる雨。
【三】　黃甘　卽ち黃柑。

道中は、前以て、日割がしてあつて、頗る忙しいのに、季節は歳晩に近く、霜雪、正に勢を盛にして居る。山の麓に打寄する浪がしらは、雷の如く吼え、船頭は、手を縮めて、竿をも動かさない。犀を燃やして水底の幽怪を照らすまでもなく、直に劍を拔き、長蛟を斬つて退治したいと思ふばかりである。

驪山

君門如天深九重。
君王如帝坐法宮。
人生難處是安穩。
何爲來此驪山中。
複道凌雲接金闕。
樓觀隱煙橫翠空。
林深霧暗迷八駿。
朝東暮西勞六龍。
六龍西幸峨眉棧。
悲風便入華清院。
霓裳蕭散羽衣空。
麋鹿來游猿鶴怨。
我上朝元春半老。
滿地落花無人掃。
羯鼓樓高挂夕陽。
長生殿古生青草。
可憐吳楚兩醯雞。
築臺未就已堪悲。
長楊五柞漢幸免。
江都樓成隋自迷。

君門、天の如く深き九重、
君王、帝の如く法宮に坐す。
人生、處り難し是れ安穩、
何の爲に、この驪山の中に來る。
複道、雲を凌いで金闕に接し、
樓觀、煙に隱れて翠空に橫ふ。
林深く、霧暗くして、八駿を迷はし、
朝東暮西、六龍を勞す。
六龍、西に幸す峨眉の棧、
悲風、便ち入る華清の院。
霓裳、蕭散、羽衣空しく、
麋鹿來り游び、猿鶴悲む。
われ朝元に上れば、春、半ば老い、
滿地の落花、人の掃ふなし。
羯鼓樓は高くして夕陽を挂け、
長生殿は古くして青草を生ず。
憐むべし、吳楚の兩醯雞、
臺を築いて未だ就らず、已に悲むに堪へたり。
長楊五柞、漢、幸に免る、
江都樓成つて、隋、自ら迷ふ。

【字解】【一】深九重　初學記に「闈閤は天門なり、角、亦た天門なり」とあり、君門九重は前に寒食雨の詩中に注して置いた。【二】如帝坐法宮　晉書天文志に「心の三星は天王の正位なり、中星を明堂といふ、天子の位は大辰たり、天下の賞罰を主る、故に天子の居るところを法宮といふ」とあり、戰國策に　蘇秦曰く、謁者、見るを得難きこと鬼の如く、王見るを得難きこと天帝の如し」とある。【三】複道　道が二つ平行して居て、上なるは蒙路、下なるは臣下の通路といふ樣に成つて居る。【四】八駿　周の穆王が天下を乘り廻はした名馬、穆天子傳に「天子の駿、赤驥・盜驪・白義・踰輪・山子・渠黃・華騮・綠耳」とある。【五】峨眉　樓・峨眉山下に通ずる樓道。【六】華清院　もとは華清宮であるが、押韻の都合で、止むを得ず、宮を院と改めた。【七】朝元　閣の名、華清宮に在る。【八】羯鼓樓　雍錄に、「朝元閣の東に在り、南の線道の外に近し」とある。【九】長生殿　白居易の長恨歌に七月七日長生殿、夜半無人私語時とあり、長安志に「長生殿に二あり、その一は都城迎仙宮內に在り、その一は驪山に在り、都

由來留連多喪國。由來、留連、多くは國を喪ふ、
宴安酖毒因奢惑。宴安酖毒、奢惑に因る。
三風十愆古所戒。三風十愆、古しへ戒むるところ、
不必驪山可亡國。必ずしも驪山、國を亡すべきのみならず。

の章華臺を築き、吳王夫差の姑蘇臺を起せしことを云ふ。國語に「楚の靈王、章華の臺を爲り、伍舉と升つて曰く、臺美なるかな」とあり、吳地記に「吳王闔閭の十一年、臺を姑蘇山に起し、山に因つて名となす、後、夫差、復た高くして之を飾る」とあり、吳越春秋に「越、神木を得たり、大夫種、吳に獻じ、遂に姑胥の臺を起し、五年、乃ち成る」とある。【一二】長楊五柞　三輔黃圖に「五柞宮は盩厔に在り、五柞樹あり、枝、數畝に蔭す。長楊宮は、盩厔に在り、本と秦の離宮、漢、修飾して以て行幸に備ふ、垂楊數畝あり、因つて名づく」とある。【一三】江都樓　迷樓記に「隋の煬帝、汴河を開き、艇を泛べて江都の游を爲す、浙人項昇、新宮の圖を進む、帝、これを愛し、卽ち圖の如く營建す、すでに成るや、これに幸して曰く、眞仙をして此に游ばしむるも、亦た當に自ら迷ふべし、これを目して迷樓といふべし」とある。【一四】三風十愆　書經の伊訓に「敢て宮に恒舞し、室に酣歌するあり、これを巫風といふ。敢て貨色に殉ふあり、游畋に恒にするあり、これを淫風といふ。敢て聖言に違ひ、忠直に逆ひ、耆德を遠ざけ、頑童に比するあり、これを亂風といふ。これ、この三風十愆、卿士、身に一あらば、家、必ず喪ふ。邦君、身に一あらば、國、必ず亡ぶ」とあつて、三風は上に見えたる通り、そして、貨色と游畋とを各〻二つに數へ、それが十で、卽ち十愆である。【一五】驪山可亡國　通鑑に「唐の實歷中、敬宗、驪山に幸せむと欲す。拾遺張權輿、紫宸殿下に伏し、諫めて曰く、むかし、周の幽王、驪山に幸して犬戎に殺され、秦の始皇、驪山に葬つて國亡び、玄宗、驪山に宮して禄山亂し、先帝、驪山に幸して、享年長からず。上曰く、驪山、かくの若きの凶か、われ宜しく一たび往いて、以て彼の言を驗すべし」とある。

城に在るものは宸殿なり、驪山に在るものは華殿なり、天子、朝元閣に事あれば、卽ち此に齋沐す」とある。【一〇】醯雞　甕中の小蟲、莊子に見ゆ、前に八月十日看潮の詩中に注して置いた。【一一】楚臺　楚の靈王

【題義】一統志に「驪山は臨潼に在り、溫泉の出づるところ、左肩を東繡嶺といひ、右肩を西繡嶺といふ」とある。查初白は「愼、案ずるに、この詩一首、亦た宋文鑑第十四卷に見え、題して驪山歌といふ、李廌の作、皖江陳焯の宋詩選、これに因る。經籍志を考ふるに、李廌、濟南集二十卷あり、今傳はらず、但だ宋文鑑に據つて考證を爲すといふ」とある。

【詩意】皇居の門は、天の如く高く、そして、深さ幾重にも及び、君王は、さながら、天帝の如く、その中なる常の御殿に坐つて居られる。しかし、人生は、兎角安穩に落ち付いて居られぬものと見え、いかなれば、態態この驪山の中に來られるのであるか。驪山の模樣はといへば、複道、雲を凌いで金闕に接續し、幾多の樓觀は、煙に隱れて、翠空に橫はつて居る。林は深く、霧は暗く、穆王の八駿でも、ここに來れば、迷うて路を失ふに相違ないのに、玄宗皇帝は、ここに御出でになつて、朝には東、暮には西といふ樣に、御苦勞にも、頻りに游行された。やがて、安祿山の亂が起ると、玄宗は西、峨眉山下の棧道に御幸になり、悲風颯颯として、華淸宮に吹き入り、霓裳羽衣の舞も、滅茶苦茶になり、その後は、麋鹿が來り游び、猿鶴が怨めしげに嗚き悲むのみであつた。われ、今、朝元閣に上つて見れば、春も半ば老い、滿地の落花、人の掃ふなく、まことに寂しげな有樣。羯鼓樓は高くして、夕陽を挂け、長生殿は物古りて、あたりに靑草が生ひ茂つて居る。憐むべきは、當年吳楚二國の君で、さながら、甕中の小蟲の如く、全く何事をも知らず、靈王は章華臺を築き、夫差は姑蘇臺を起し、まだ

凌成しない内に、その國は、危亡に瀕し、まことに悲むに堪へたる次第。漢は、長楊五柞の二宮を建てたが、幸にして滅亡を免れ、隋は、江都の迷樓を造つた爲に、その名の如く、煬帝が心迷うて、遂に滅亡して仕舞つた。して見ると、留連して樂を恣にすれば、多くの場合に、國を亡すので、宴安は鴆毒に比すべく、しかも、それは奢侈荒惑に因るのである。三風十愆は、遠き昔、書經の伊訓に於ても戒めてあるところで、何も必ずしも、驪山といふ地が國を亡すといふ譯ではない。

【餘論】紀昀は「哀歌宛轉、亦た殊に誦すべし」といひ「これは是れ宋人の結法」といつて居る。

次韻謝子高讀淵明傳

謝子高の淵明傳を讀むに次韻す

枯木嵌空微黯淡。枯木空に嵌して、微に黯淡、
古器雖在無古絃。古器ありと雖も古絃なし。
袖中正有南風手。袖中、正に南風の手あり、
誰能聽之誰爲彈。誰か能く之を聽き、誰が爲に彈せむ。
風流豈落正始後。風流、豈に落ちむや正始の後、
甲子不數義熙前。甲子、數へず義熙の前。

【字解】【一】嵌空　嵌ははめこむといふ義。【二】微黯淡　紀昀は「微、當に徹に作るべし」といつて居る、徹は卽ち琴絃。【三】無古絃　陶淵明は、無絃琴を貯へしが故に云ふ。【四】南風手　南風の曲を彈ずる妙手、南風は、前に東陽水樂亭、張安道示二近詩一次二韻穀父久旱一等の詩中に注して置いた。【五】正始　世說に「王敦、大將軍となり、壁章に飲す。嵇玠、亂を避け、洛より敦に投じ、相見て欣然、談話日を徹る。ここに於て、謝鯤、長史とある。敦、鯤に謂つて曰く、意はざりき、永嘉の中、復た正始の音を聞かむとは。阿平、もし在らば、當に復た絕倒すべし」とあつて、正始は年號の名。【六】義熙　南史隱逸傳に「陶潛著すところの文章、皆その年月を題す、義熙以前は、明かに晉氏の年號を書し、永初より以來は、惟だ甲子を云ふのみ」とある。【七】缺然　物足らぬ想。

一軒黃菊平生事。一軒の黃菊、平生の事、
無酒令人意缺然。酒なければ、人をして意缺然たらしむ。

【題義】査初白は「愼、案ずるに、この詩、山谷外集に見ゆ。又、中州集、蔡松年の銀州道中の詩に、此時最憶涪翁語、無酒令人意缺然」、その山谷の作たること、疑なし」とある。そして、謝子高は、無論、山谷の詞友である。

【詩意】陶淵明の持つて居る琴は、枯木で造り、中は空洞で、琴の絃も古くなつて居る。かくの如く、古器は儼然たれども、古絃は碌碌揃つて居らぬ。もとより、淵明は、南風の曲を彈ずる自然の妙手を袖中に隱して居るが、誰か能く之を聽き分けるか、そして、誰の爲に之を彈じ出すべきか。淵明の風流は、決して正始の後には落ちず、詩を作つても、義熙以前は、甲子を數へず、晉の滅亡後は、唯だ甲子を書いたといふこと。秋になれば、黃菊が花を開いて軒に映じ、平生、これを愛賞して居たが、酒なければ、物足らぬ想を免れなかつた。

滄洲亭懷古

湘水悠悠天際來。
夾江古木抱山回。
城中人物若可數。
日晏市散多蒼苔。
九疑巉天古雲埋。
遙想帝子龍車廻。
心衰目極何可望。
九歌寂寂令人哀。

滄洲亭懷古

湘水、悠悠として天際より來り、
江を夾んで、古木、山を抱いて回る。
城中の人物、數ふべきが若く、
日晏く、市散じて、蒼苔多し。
九疑、天に巉して、古雲埋め、
遙に想ふ、帝子、龍車の廻るを。
心衰へ、目極まつて、何ぞ望むべけむや、
九歌寂寂、人をして哀ましむ。

【題義】査初白は「滄洲亭、攷ふべきなし。外集、蒼梧懷古に作る。この詩、沈遼の雲巢集中に見え、宋文鑑詩選、亦た以て沈遼の作となす」とある。

【詩意】湘江の水は、悠悠として天際より來り、古木は江を夾みつつ、山を抱いて廻つて居る。ここで眺めやれば、城中に居る人物は、點點として數ふべきばかり、日遲くして市が散すると、蒼苔よりも猶ほ多い。はるかの方には、九嶷山が天に巉立して古雲に埋められ、娥皇女英が、龍車を廻らして立ち還つたのではないかと思はれる。さはれ、心衰へ、目極まり、何をか望むべき、ただ舜の盛德を思うて、幾たびも唱ふる歌の聲、寂寂として、覺えず悲哀を催さしめる。

【字解】【一】九疑　圖經に「九嶷山は零陵に在り、衡州府に屬す」とあり、王留之の神鏡記に「九嶷山牛、皆松竹を植ゑ、路を夾んで清澗あり、澗に黃色の蓮花を生じ、香氣、谷に盈つ。又九井あり、むかし、何侯丹を此に煉る、一井を汲めば九井皆動く。屈原の九歌、九嶷繽兮並迎、靈之來兮如雲」とある。【二】九歌　山公註に「尚書大禹謨、九功惟れ敘し、九敘惟れ歌ひ、又これを勸むるに九歌を以てし、樂るなからしむ。按ずるに、これ九嶷に因つて舜を思ふ、故に九歌寂寂といふ、屈原の九歌に非ざるに似たるなり」とある。

戲詠子舟畫兩竹兩鸜鵒

風晴日暖搖雙竹。
竹間對語雙鸜鵒。
鸜鵒之肉不可食。
人生不才果爲福。
子舟之筆利如錐。
千變萬化皆天機。
未知筆下鸜鵒語。
何似夢中蝴蝶飛。

戲に子舟の畫、兩竹兩鸜鵒を詠ず

風は晴れ、日は暖かにして雙竹を搖かし、
竹間、對語す雙鸜鵒。
鸜鵒の肉、食ふべからず、
人生不才、果して福たり。
子舟の筆、利、錐の如く、
千變萬化、皆天機。
未だ知らず、筆下鸜鵒語るを、
夢中蝴蝶の飛ぶに何似ぞや。

【字解】【一】鸜鵒　廣雅に「鵒に似て觜あり、兩翼に白點あり、その舌を剪れば、教ふるに人語を以てすべし」とあり、方言に「鸜鵒、一名寒皐」とあつて、つぐみの類と見える。【二】不可食　杜甫の詩に、有鳥名鸜鵒、力不能高飛、肉味不足登鼎俎、胡爲見羈縶、鷹鸇中一とある。【三】不才果爲福　莊子に「故に未だ其天年を終へずして、中道に斧斤に夭せらる、これ材の患なり」とあると同意。【四】夢中蝴蝶

飛。莊子を用ふ、前に「臨日游二孤山一」の詩中に注して置いた。

【題義】　査初白は「畫鶴、黄彝、字は子舟、潼川安泰の人、斌老の弟。その名と字と、初めより彝と子舟とに非ざるなり、山谷、その氣を尚ぶを以ての故に、二器を取り、以て之を規す。自後、節を折る。文與可、毎に言ふ、畫竹は子舟に及ばず、と。又愼、案ずるに、この一首、亦た黄山谷集に見ゆ。山谷の詩中、子舟の畫に題するもの、甚だ多し。この詩、確として、山谷の格律に係る」とある。

【詩意】　風は晴れ、日は暖かくして、雙竹を搖かし、その竹の間には、二羽の鸛鶴が相對して語つて居る。畫中見るところは、かくの如くである。鸛鶴の肉は、食はれないから、少しも羅網の厄に罹ることもなく、これと同じく、人生は、不才なるものが、果して、幸福である。今、子舟の筆は、鋭利なること、錐の如く、千變萬化して、皆天機より出て居る。その筆下から出た鸛鶴は、何を語つて居るか知らぬが、蝴蝶が夢中に飛ぶに比しては如何であらうか。

贈山谷子

山谷の子に贈る

黄童三尺世無雙、　黄童三尺、世無雙、
筆頭衮衮懸秋江。　筆頭、衮衮として秋江を懸く。
不憂老子難爲父。　憂へず、老子の父と爲り難きを、
平生崛强今心降。　平生崛强、今心降る。
我來喜共阿戎語。　われ來つて、喜んで阿戎と共に語る、
應敵縱横如急雨。　敵に應じ、縱横、急雨の如し。
生子還如孫仲謀。　子を生む、還た孫仲謀の如し、
豚犬漫多何足數。　豚犬漫に多く、何ぞ數ふるに足らむ。
黄家小兒名小德。　黄家の小兒、小德と名づく、
眉如長松眼如漆。　眉は長松の如く、眼は漆の如し。
只今數歲已動人。　只今、數歲、すでに人を動かす、
老人留眼看他日。　老人、眼を留めて、他日を看む。
笑君老蚌生明珠。　笑ふ、君が老蚌、明珠を生ずるを、
自笑此物吾家無。　自ら笑ふ、この物、わが家に無し。

【字解】【一】雖爲父　晉書伏滔傳に「孝武帝、かつて西堂に會す。滔、坐に據る、還つて車を下り、先づ子系之を呼んで、謂つて曰く、百人高會、天子先づ伏滔は坐に在りや否やを問ふ、人の爲に父と作つて、かくの如し、定めて何如ぞや」とある。

【二】阿戎　王戎の事、前に「夜過二舒堯文一」の詩中に注して置いた。

【三】孫仲謀　三國志に「曹公曰く、子を生まば、當に孫仲謀の如くなるべし、劉景升の兒子の若きは、豚犬のみ」とある。

【四】眼如漆　晉書杜乂傳に「王羲之見て之を目して曰く、膚は凝脂の若く、眼は點漆の如し、これ神仙の人なり」とある。

君當置酒我當賀。君當に酒を置くべし、われ當に賀すべし、
有兒傳業更何須。兒あり、業を傳ふ、更に何をか須ひむ。

【語義】 査初白は「愼、案するに、この一首、亦た陳履常の後山集に見え、題して、贈黃氏子小德と云ふ、按ずるに、先生の本集、すでに次韻魯直、嘲小德の詩二首あり。この詩、當に陳の作なるべし」とある。すると、題は山谷子ではなく、山谷の子と讀むべきであらう。

【詩意】 三尺の黃童、その英妙なること、世間に類なく、筆頭衮衮として、秋江を懸くるが如くである。親爺が其父と爲り難しといふことは憂へずもあれ、平生は、倔强で滅多に引けを取らぬが、今は、心から降服して仕舞つた。われ來つて、阿戎に比すべき此小倅と話して見た處が、敵に對して、縱橫に應酬することは、さながら急雨の如くである。あはれ、子を生まば當に孫仲謀の如くなるべしといつた通り、世上の兒子は、すべて豚犬の如く、漫に多くとも、數ふるに足らぬ位。黃家の小兒は、名を小德といひ、眉は長松の如く、眼は漆を點じた如く、今は、やッと五六歲であるが、すでに人を動かす位、老人は、眼を留めて、他日を囑望して居る。君は、老蚌が明珠を生じたるが如く、この物は、元と吾が家に無い筈であつたといつて笑つて居る。君は、當に酒を置くべく、われは、當に賀すべく、すでに兒あつて、業を傳ふるに足れば、この上、何を求める必要もない。

昭陵六馬、唐文皇戰馬也、琢石象之、立昭陵前、客有持此石本示予、爲賦之

昭陵の六馬は、唐の文皇の戰馬なり。石を琢いて之に象り、昭陵の前に立つ。客、この石本を持して予に示すものあり。爲めに之を賦す

天將剗隋亂。帝遣六龍來。天、將に隋の亂を剗らむとし、帝、六龍をして來らしむ。
森然風雲姿。颯爽毛骨開。森然たる風雲の姿、颯爽として毛骨開く。
飈馳不及視。山川儼莫回。飈馳、視るに及ばず、山川、儼として回るなし。
長鳴視八表。擾擾萬駑駘。長鳴して八表を視れば、擾擾たり萬駑駘。
秦王龍鳳姿。魯鳥不足摧。秦王、龍鳳の姿、魯鳥、摧くに足らず。
腰間大白羽。中物如風雷。腰間の大白羽、物に中れば風雷の如し。
區區數豎子。搏取若提孩。區區たる數豎子、搏取して提孩の若し。
手持掃天帚。六合如塵埃。手に天を掃ふの帚を持し、六合、塵埃の如し。
艱難濟大業。一一非常才。艱難、大業を濟し、一一非常の才。

維時六驥足、績與英衞陪。　維れ時れ六驥足、績は英衞と陪す。
功成鏘八鸞、玉輅行天街。　功成つて八鸞鏘たり、玉輅、天街を行く。
荒涼昭陵闕、古石埋蒼苔。　荒涼たり昭陵の闕、古石、蒼苔に埋む。

【字解】【一】剗　けづる、平定する。【二】六龍　六頭の名馬、周禮に「馬八尺以上を龍となす」とある。【三】毛骨開　杜甫の詩に卓立天骨森開張とある。【四】駿駿　駿はつむじ風、その如く早く馳せる。【五】龍鳳姿　唐書太宗本紀に「生まれて四歳、書生あり、高祖に謁して曰く、公、相法に在つて貴人なり、然れども、必ず貴子あらむと。太宗を見るに及んで曰く、龍鳳の姿、天日の表、その年、冠に爽く、必ず能く世を濟ひ、民を安んぜむ」とある。【六】善鳥　宛邱集に鳥鳥に作り、その方が分かり易い。【七】大白羽　六韜に「堅陣を陷れ、強敵を破るには、大黃參連弩を用ひ、飛鳧電影、自ら副ふ。飛鳧は赤童白羽、鋼を以て首となす。電影は、青童赤羽、鋼を以て首となす」とあり、唐書に「太宗、かつて自ら長弓大羽箭を製し、皆常制に倍し、以て武功を旌はす」とある。【八】英衞　英公徐世勣・衞公李靖、ともに唐書本傳に見え、唐會要に「昭陵、功臣を陪葬す、李靖・李勣あり」と見ゆ。

【題義】昭陵の六馬と稱するものは、唐の太宗文皇帝が戰陣に用ひた名馬で、石を彫刻して之に象り、太宗の昭陵の前に立てたのである。偶ま、客に、この石摺を持參して予に見せたものがあつたから、爲に此詩を作つたといふのである。元和郡縣志に「太宗の昭陵は、醴泉の北二十五里九嵕山に在り」と見え、唐會要に「上、先帝の徽烈を闡揚せむと欲し、乃ち匠人をして石を琢かしめ、諸蕃の君長を寫して、陵の司馬北門の內に列し、又石を刻して、常に乘じて敵を破るところの馬六匹を闕下に爲る」とあり、長安志に「六駿の像、北闕に列す」とあり、趙明誠の金石錄に「昭陵六馬の贊、はじめ、太宗文德皇后の葬を以て、自ら文を爲つて石を昭陵に刻し、又石を琢いて、平生征伐、乘ずるところの六馬に像り、爲に之を贊す、皆歐陽詢の八分書」とある。查初白の案に「昭陵六馬の圖、石刻、その一、拳毛騧といふ、黃馬黑喙、劉黑闥を平らぐる時、乘ずるところ、前に六箭を中て、背に三箭を中つ。その二を什伐赤といふ、純赤色、王世充を平らぐる時、乘ずるところ、前に四箭を中て、背に一箭を中つ。その三を白蹄烏といふ、純黑色、四蹄ともに白し、薛仁果を平らぐる時、乘ずるところ。その四を特勒驃といふ、黃白色、喙微黑、宋金剛を平らぐる時、乘ずるところ、その五を颯路紫燕驅といふ、東都を平らぐる時、乘ずるところ、前に一箭を中つ。その六を青騅といふ、蒼白雜色、竇建德を平らぐる時、乘ずるところ、前に五箭を中つ」とあり、馮應榴の案に「宋の游師雄題六駿碑の石刻、白蹄烏は、薛仁果を平らぐる時の乘、益す唐史の誤を知る。果を以て果となす。又什伐赤は世充建德を平らぐる時の乘と。查氏引くところの石刻と微に同じからざるあり」といひ、又查註に「愼、案ずるに、この五言古詩一首、亦た張文潛の右史集第八卷中に見ゆ、これを蒼谿漁隱叢話及び宋文鑑に合し、皆以て張耒の作となす」とある。

【詩意】皇天は、隋末の騷亂を平定せむとし、天帝は、六四の名馬を下された。いづれも、風雲の姿森然として、いかにも凜凜しく、颯爽として、毛骨開張するが如く見える。その走る時は、旋風の如く馳せて、目にも止まらぬ位、山川は、儼然として在れども、之を招き回すことが出來ない。そこで、

長鳴して、八表を見めぐらすと、世上の駑駘、數かぎりなく、徒に擾擾として立ち騒いで居るのみである。ここに、太宗は、その初、秦王と稱せられ、龍鳳の姿、天日の表、魚鳥に比すべきものなどは、一一摧破するに足らず、腰間には大羽箭を插み、それが物に中れば、風雷の如く、區區たる數豎子を搏つて取りひしぐことは、さながら、稚子を扱ふ如く、又手に天を掃ふ樣な大箒を持つて、六合を掃除することは、さながら塵埃の如くであつた。艱難を侵して大業を成就し、何事についても、非常の英才が顯はれて居た。この六馬の驥足は、功績を奏せしが故に、英衞二公と共に、陵寢に陪從して居る位。その功成りし後、鏘然として、八つの鈴を鳴らしつつ、見事な車を曳いて、都大路を馳せて行つた。さはれ、今日では、昭陵の廟門も、荒涼たる有樣で、古い石は、すでに蒼苔に埋もれて居る。

題盧鴻一學士堂圖

盧鴻一の學士堂圖に題す

昔爲太室游。盧巖在東麓。
むかし、太室の游を爲す、盧巖、東麓に在り。

直上登封壇。一夜繭生足。
直に登封壇に上り、一夜、繭、足に生ず。

徑歸不復往。巒壑空在目。
徑に歸つて復た往かず、巒壑、空しく目に在り。

安知有十志。舒卷不盈幅。
安んぞ知らむ、十志あるを、舒卷するも幅に盈たず。

一處一盧生。裘褐蔭喬木。
一處一盧生、裘褐、喬木に蔭す。

方爲世外人。行止何煩錄。
方に世外の人となり、行止、何ぞ煩錄せむ。

百年入箋笥。犬馬同一束。
百年、箋笥に入り、犬馬同一束。

嗟余縛世累。歸未有茆屋。
嗟す、余が世累に縛せられ、歸つて、未だ茆屋あらず。

江干百畝田。清泉映修竹。
江干百畝の田、清泉、修竹に映ず。

尙欲逃世名。豈須上圖軸。
尙ほ世名を逃れむと欲す、豈に圖軸に上るを須ひむや。

【字解】【一】太室　一統志に「嵩山は、登封に在り、五嶽の中嶽なり、東を太室といひ、西を少室といふ」とある。【二】繭生足　腹れて足の伸びざること、前に與二梁舒一泛舟、及び作二六蟲篇一の詩中に注して置いた。【三】十志　查註に「李壑云ふ、元居十志とは、草堂・總館・元室・翠庭・期仙・蓼煩・錦涼・雲潭・倒景・桃理。十は天地の成數、志は記述の總名、皆圖中の景なり」とある。【四】逃世名　後漢書法眞傳に「友人郭正、これを稱して曰く、法眞、名は得て聞くべきも、身は得て見難し、名を鴻れて、名、われに隨ひ、名を避けて、名、われを追ふ、百世の師たるべし」とある。

【題義】新唐書に「盧鴻、字は顥然、范陽の人、洛陽に徙る、博學、善く籀を書す、廬を嵩山に結び、居るところの廬を名づけて寧極といふ、開元禮徵すれども至らず」とあつて、ここには、名を鴻に作つてある。次に舊唐書隱逸傳に「盧鴻一、嵩山に隱る。開元六年、徵して東都に至る、謁見すれども拜せず、諫議大夫に拜せられしが、固辭し、放たれて山に還り、草堂一所を賜ふ」とあつて、ここに

は、名を鴻一に作つてある。そこで、困學紀聞に「唐舊史、鴻一、蓋し二名、中岳劉眞人碑に書するところと合ふ。新史、一の字を刪り去る、何の據るところなるを知らず、當に舊史を以て正となすべし」とある。周密の雲煙過眼錄に「楊彥德の家、藏するところ盧鴻一の草堂圖一卷、乃ち是れ數百年の物、李伯時、かつて一本を臨し、自ら卷中の歌一篇を書して云ふ、

甘泉建章空草莽。甲第紛紛誰復數。嵩岳徵君一草堂。却有畫圖傳萬古。巖巒奥勝帶煙霞。曠望幽盟空處所。微茫短幅幾臨模。便覽市朝如糞土。輞川別業王維畫。君陽山記希聲敍。胡將氷雪一洗塵埃。規模難勝非我侶。

次は少游・仲殊・參寥、これに繼ぐ、皆、一時の名人」とある。それから、査初白は「愼、案ずるに、この詩、亦た欒城集第十五卷中に見え、題して、盧鴻草堂圖といふ。蓋し、子由、かつて舉人に洛下に試みられ、登嵩山の諸什あり、故に起句に云ふこと然り。東坡、未だ嘗て太室に游ばざるなり」といつて居る。

【詩意】むかし、嵩山の太室に游んだが、盧巖と稱するものは、東麓に在つた。そこから、登封壇に上つた處が、大に疲勞して、夜は足が曲がらぬ位、そこで、直に歸つて二度と行かなかつたので、巒壑の景色は、空しく眼中に殘つて居る。ここの名勝を算して、十志といふものがあるが、その畫は、ほんの少しばかりで、舒べたり卷いたりしても、幅に盈たぬ位だから仕方がない。山中の或處に盧鴻一といふ人が住んで居て、冬は一裘、夏は一褐、いつでも喬木の蔭に身を寄せ、世外の人として、その行止は、錄するを煩はしとして居た。百年の久しき、その幽居の圖は、箱の中に投げ入れられたまま、犬馬と同一束にして、棄てッぽかしてあつた。予は、世間の繫累に束縛せられ、歸つた處で、茅屋だになく、唯だ江岸に百畝の田畑があつて、清泉の修竹に映ずる景色は、流石に床しく覺える。それでも、尙ほ世上の浮名を逃れたいと思つて居る位だから、どうして之を圖軸に上せて、特に畫いて貰ふことを爲さうか。

李白謫仙詩

我居青空裏。君隱紅埃中。
聲形不相弔。心事難形容。
欲乘明月光。訪君開素懷。
天盃飲清露。展翼登蓬萊。
佳人持玉尺。度君多少才。
玉尺不可盡。君才無時休。

われは青空の裏に居り、君は紅埃の中に隱る。
聲形、相弔はず、心事、形容し難し。
明月の光に乘じ、君を訪うて、素懷を開かむと欲す。
天盃、清露を飲み、翼を展べて、蓬萊に登る。
佳人、玉尺を持し、君が多少の才を度る。
玉尺、盡すべからず、君の才、時として休むなし。

對面一笑語。共躡金鼇頭。　對面、一笑語、共に躡む金鼇の頭。
絳宮樓閣百千仞。　絳宮の樓閣、百千仞、
霞衣誰與雲煙浮。　霞衣、誰か雲煙と浮ぶ。

【題義】 査初白は「愼、案ずるに、東觀餘論に云ふ、我居清空表、君處紅埃中、仙人持玉尺、度君多少才、玉尺不可盡、君才無時休、と。これ上清寶典李太白の詩なり、云云。黃伯思、但だこの六句を摘んで全篇を載せず、太白集を檢するに、乃ち此詩なし、今東觀餘論に據る」とある。そこで、東觀餘論を確實とすれば、この詩は、李白の舊句に補足して一篇を成したものである。

【詩意】 われは高く靑天の裏に居り、君は低く紅塵の中に隱れ、上下隔絕、音容相弔ふことなく、心に思ふことがあつても、顯はして示すことが出來ない。そこで、明月の光に乘じて君を訪ひ、この胸を披いて、篤と御話を爲し、やがて、天上の盃を以て淸露を飮み、翼を展べて蓬萊山に登りたいと思つて居る。佳人は尺を持つて來て、どれ程、君の才があるといつて度つた處が、尺で量り盡すことも出來ず、君の才は、決して休止する時がない。もし君に逢うたならば、一たび笑語しつつ、ともに金鼇の頭を踏まへて、海中に乘り出さう。すると、仙家の樓閣、高さ百千仞もあるのが、眼前に聳えて見えるだらうが、その時、誰が霞の衣を著て、雲煙と共に浮游するであらうか。

飮酒四首　酒を飮む　四首

我觀人間世。無如醉中眞。　われ人間の世を觀るに、醉中の眞なるに如くはなし。
虛空爲銷殞。況乃百憂身。　虛空、爲に銷殞、況んや、乃ち百憂の身をや。
惜哉知此晚。坐令華髮新。　惜しいかな此を知ること晚く、坐に華髮をして新ならしむ。
聖人驟難得。日且致賢人。　聖人は驟に得難し、日に且つ賢人を致さむ。

【字解】 【一】銷殞　楞嚴經に「阿難、汝、世間作すべきの法を觀るに、誰か不變となす。然れども、終に虛空を銷壞するを聞かず。又わが此無常變壞の身、未だ曾て滅びずと雖も、われ現前を觀るに、念念遷謝、新新住まらず、火の灰を成すが如く、漸漸銷殞す」とある。【二】華髮　白髮。【三】聖人　淸酒。【四】賢人　濁酒、徐邈の事、前に贈三華老一の七絕中に注して置いた。

【題義】 査初白は「愼、案ずるに、この四首、亦た秦少游が雷州に謫せられし時の詩、淮海集第四卷中に載す」といつて居る。

【詩意】 われ人間の世を觀るに、醉中こそ、一番眞である。無常の世界では、虛空と雖も、爲に銷殞するを免れず、まして、百憂を去りあへぬ人の身に於ては、猶更の事である。惜しいかな、これを悟ること遲く、白髮が、新に生えて來た。かくの如く、醉中に於て、はじめて眞を全うすべく、しかも、聖人と稱せらるる淸酒は、一寸求められぬ故に、日ごとに、我慢して、賢人といふ濁酒で濟まして置

くといふ始末である。

左手持蟹螯。舉觴矚雲漢。　左手に蟹螯を持し、觴を舉げて雲漢を矚る。
天生此神物。爲我洗憂患。　天、この神物を生じ、わが爲に憂患を洗ふ。
山川同恍惚。魚鳥共蕭散。　山川、同じく恍惚、魚鳥、共に蕭散。
客至壺自傾。欲去不得閒。　客、至つて、壺、自ら傾く、去らむと欲して閒を得ず。

【字解】【一】螯螯　晏卓の故事、前に莫笑銀杯小の詩中に注して置いた。【二】洗憂患　漢の武帝の短歌に何以解憂、惟有杜康とある。

【詩意】左の手に蟹を持ち、右の手に觴を擧げて、遙に雲井を眺めて居る。天は、酒てふ此神物を生じ、わが爲に憂患を一洗して呉れる。山川は、同じく恍惚として居るし、魚鳥は、共に靜に暢氣である。そこで、客が來ると、自然、壺を傾けるので、去らうと思つても、その暇だにない。

【餘論】紀昀は「この首、致あり」といつて居る。

有客遠方來。酌我一盃茗。　客あり、遠方より來り、われに一盃の茗を酌ましむ。
我醉方不啜。强啜忽復醒。　われ醉うて方に啜らず、强ひて啜るも、忽ち復た醒む。
既鑿渾沌氏。遂遠華胥境。　すでに渾沌氏を鑿ち、遂に華胥の境に遠ざかる。
操戈逐儒生。舉觴還酩酊。　戈を操つて儒生を逐ひ、觴を擧げて還た酩酊。

【字解】【一】渾沌氏　氏、一に竅に作る。鑿と忽とが、渾沌氏に七竅を鑿ちて死せしめしこと、莊子に見え、前に次三韓奉太虛耳鼓の詩中に注して置いた。【二】華胥　列子に「黃帝晝寢れ、夢に華胥に游ぶ、その國、水に入つて溺れず、火に入つて熱せず、空に乘じて實を履むが如く、虛に寢て牀に處るが若し、すでに寤め、怡然として自得す。その後、天下、大に治まり、幾んど、華胥の若し」とある。【三】逐儒生　列子に「宋の閭里華子、中年、忘を病む。魯に儒生あり、自ら謀して能く之を治す。華子の妻子、居産の半を以て其方を請ふ。儒生、ひとり興に居ること七日にして、積年の病、一朝、ともに除く。華子、すでに悟り、乃ち大に怒り、妻を黥け、子を刖し、戈を操つて儒生を逐うて曰く、さきに、われ忘るるや、蕩蕩然として、天地の有無を覺えず。今頓に既往數十年來の存亡得失を識り、哀樂好惡、擾擾として萬緒起る、須臾の忘、復た得べけむや」とある。

【詩意】客あり、遠方より來り、われに一盃の茶を酌んでよこした。その時、われは醉つて居て、茶を飲みたくなかつたが、折角の事だから、强ひて飲むと、酒の醉が、けろりと醒めて仕舞つた。たとへば、渾沌氏の胸に七竅を鑿つが如く、遂に華胥の理想境に遠ざかつた。そこで、大に腹を立て、戈を操つて儒生を逐うた樣に、客を追ッ拂ひ、杯を擧げて、又ぞろ酩酊した。

【餘論】紀昀は「この首、粗野」といつて居る。

雷觴[一]淡於水。經年不濡脣。　雷觴、水よりも淡く、年を經て、脣を濡さず。
爰有[二]擾龍裔。爲造[三]英靈春。　ここに擾龍の裔あり、爲に英靈春を造る。
英靈韻甚高。蒲萄難與鄰。　英靈、韻甚だ高く、蒲萄、與に鄰たり難し。
他年血食汝。當配[四]杜康神。　他年、汝を血食し、當に杜康の神に配すべし。

【字解】【一】雷觴　諸家の注を缺いて居るが、雷州に產する酒杯であらう。【二】淡於水　莊子に「君子の交、淡、水の若し」とある。【三】擾龍　龍を飼ひ馴らす、左傳に「劉累あり、龍を擾らすことを豢龍氏に學ぶ」とある。【四】英靈春　酒の名、山公註に洛陽伽藍記を引いてあるが、それは河東の人劉白墮が善く酒を釀したことである。そこで、馬應榴の案に「山公註、これを引く、上に擾龍裔の句あるに因るなり。然れども、白墮酒と英靈春とは涉るなし、再考を俟つ」とあり、查註に「名勝志、雷州海康縣城の北五里、英靈同あり、雷種陳氏、世、ここに居る。按ずるに、英靈春は酒の名、當に此に必ず釀造の者あつて、善く釀すを以てすべし。故に云ふ、爰有擾龍裔、爲造英靈春」と。少游、この地に謫居すること年餘、故に經年不濡脣の句あり」と見ゆ。【五】杜康　世本に「杜康、秫酒を作る」とあり、晉の江統の酒誥に「酒の興るところ、上皇より肇まる、或は曰く儀狄、或は曰く杜康」とあり、唐書王績傳に「大樂署史焦革の家、善く釀すを聞き、復た大樂丞たらむことを求む、革死す、妻、酒を遂つて絕えず、歲餘又死す、乃ち官を棄てて去る。居るところの東南に磐石あり、杜康の祠を立て、焦革を以て配す」とある。

【詩意】雷州產の杯に對する吾が交は、淡きこと水の如く、年を經ても、酒で脣を濡したことがない。ここに劉氏の人があつて、吾が爲に、英靈春といふ酒を釀造して與れた。その英靈春は、非常に風味がよく、葡萄酒などは、とても比較にならぬ位。そこで、他年、汝を祀つて杜康の神位に配する樣にして遣らう。

【餘論】紀昀は「この首、淺拙」といつて居る。

游山呈通判承議寫寄參寥師

山に游ぶ、通判承議に呈し、寫して參寥師に寄す

煌煌世胄餘。夫子非碌碌。　煌煌たる世胄の餘、夫子、碌碌に非ず。
由來有詩書。所以能絕俗。　由來、詩書あり、能く俗を絕つ所以。
得官本河朔。瓜期未易促。　官を得る、本と河朔、瓜期、未だ促し易からず。
扁舟下南來。逸駕追鳴鵠。　扁舟、南に下つて來り、逸駕、鳴鵠を追ふ。
遇勝卽徜徉。風餐兼露宿。　勝に遇へば卽ち徜徉、風餐と露宿と。
嗟余偶傾蓋。一笑外羈束。　嗟す、余が偶ま傾蓋、一笑、羈束を外にす。
杖策每過從。相攜訪山谷。　杖策、每に過從、相攜へて、山谷を訪ふ。
東風披鮮雲。繡錯出林麓。　東風、鮮雲を披き、繡錯、林麓を出す。

松門有時盡。幽景無斷續。
崖轉聞鐘聲。林疎見華屋。
銜山餘落景。歸跡猶躑躅。
誰云鄴下歡。往事不可復。
吾曹二三子。取樂亦云足。
願公寄新詩。一一能見錄。
船頭行北歸。囊橐有美玉。
塵埃京洛人。亦與洗心目。

松門、時あつて盡くるも、幽景、斷續なし。
崖轉じて鐘聲を聞き、林疎にして華屋を見る。
山に銜まれて落景を餘し、歸跡、なほ躑躅。
誰か云ふ、鄴下の歡、往事、復すべからずと。
吾が曹の二三子、樂を取る、亦た云に足れり。
願はくは、公、新詩を寄せ、一一能く錄せられよ。
船頭、行く〻、北に歸る、囊橐に美玉あり。
塵埃、京洛の人、亦た與に心目を洗ふ。

【字解】【一】碌碌　史記平原君傳に「公等碌碌、謂はゆる人に因つて事を成すものなり」とある。【二】瓜期　交代の時。左傳に「齊侯、連稱管至父を使して葵邱を戍せしめ、瓜時にして往く。曰く、瓜に及んで代らむと。期戍、公の問至らず」とある。【三】傾蓋　家語に「孔子、剡に之き、程子に途に遭ひ、蓋を傾けて語り、終日甚だ相親む。顧みて、子路に謂つて曰く、東帛を取つて以て先生に贈れ」とある。【四】繡錯　ぬひ取の絲の如くに交錯する。【五】鄴下　文選に謝靈運の擬二魏太子鄴中詩序一の一文がある。

【題義】承議は承議郎の略。查初白は「愼、案するに、この一首、亦た參寥子集に見え、題して、與二曾仲錫通判一同游二天竺諸山一と云ふ。先生の集を以て之を考ふるに、定州に在る時、かつて通判たり。次二韻曾仲錫承議荔支詩一あり、又、送二仲錫通判如二京師一の詩あり。今、この詩を觀るに、云ふ、瓜期未レ易レ促、扁舟下レ南來、逸駕追二鳴鵠一、と。おもふに、仲錫は、定州を離れてより、未だ京師に至らず、杭を過ぎて參寥子と游ぶ、計るに、東坡先生、時に已に嶺南に貶せらる。この詩、斷じて、先生の作に非ず」とある。

【詩意】君は、煌煌たる名門の後で、もとより碌碌たる人物ではない。元來、詩書を講習すれば、能く世俗と絕つことが出來る。君は、はじめ、河朔地方に出仕したが、交代の期限は催促することも出來ず、隨分長くかかつて、やがて、扁舟に乘じて南に下つて來られた。著任の後は、車に乘つて、鳴く鴻鵠を追ひ、勝地に遇へば逍遙し、風露の中に野宿さへもする。予は偶ま車蓋を傾けて君と交り、世の羈束を外にしたのは、まことに快適の極。杖をついて毎毎過從し、互に相攜へて、山谷の間に分け入つた。すると、東風は鮮雲を吹き拂ひ、林巒は、殘りなく露はれて、さながら、繡の交錯するが如く、松門は、時あつて盡くるも、幽景は、決して斷續することがない。崖が轉ずれば、鐘聲俄に聞こえ、林の疎なる處には、立派な家が見える。夕日は、山に銜まれて、なほ殘り、歸らうとしても、尙ほ去りがてにして居る。むかし、魏の太子が、鄴都に會し、當時の詞人輩を集めて、朝游夕醼、懽愉の極を究めたといふが、往事すでに再びすべからずといふ勿れ、吾が曹の二三子は、樂を取つて、亦た足れりとなすべきである。願はくは、君よ、新作の詩を寄せて、一一、その事を書いて吳れろ。

今しも、君は船首を北にして、行く〻都に歸られるが、旅囊中には、美玉に比すべき詩文が澤山あるから、塵埃の中に困臥して居る都人は、これを見て、定めて、心目を一洗するであらう。

轆轤歌

轆轤の歌

新繫青絲百尺繩。
心在君家轆轤上。
我心皎潔君不知。
轆轤一轉一惆悵。
何處春風吹曉幕。
江南綠水通珠閣。
美人二八顏如花。
泣向花前畏花落。
臨春風。聽春鳥。

新に繫ぐ、青絲、百尺の繩、
心は、君が家の轆轤の上に在り。
わが心皎潔、君、知らず、
轆轤一轉、一惆悵。
何の處の春風か、曉幕を吹き、
江南の綠水、珠閣に通ず。
美人二八、顏、花の如く、
泣いて、花前に向つて花の落つるを畏る。
春風に臨み、春鳥を聽く、

別時多。見時少。
愁人一夜不得眠。
瑤井玉繩相對曉。

別るる時は多く、見る時は少し。
愁人一夜、眠るを得ず、
瑤井・玉繩、相對して曉なり。

【字解】〔一〕轆轤　車井戸、前に正月九日、及び留題石經院の詩中に注して置いた。

〔二〕瑤井・玉繩　ともに星の名。

【題義】轆轤は車井戸、この詩は、これに託して、豔情を抒べたのである。査初白は「愼、案ずるに、唐の顧況集に悲歌四首あり、新繫青絲百尺繩の四句は、その第三首なり、何處春風吹曉幕の四句は、その第四首なり、惟だ臨春風以下六句は、未だ作者の姓名を詳にせず、要するに、東坡先生の詩に非ざるなり」といひ、馮應榴は「全唐詩内、載するところ、顧況の詩、悲歌六首、その第五首は卽ち臨春風以下の六句なり、又三四五の三首、別本合して一首となし、題して、遠思曲となす、亦た全唐詩の註に見ゆ、卽ち此全篇なり」とあつて、これを聯綴したのは、必ずしも東坡ではない。又紀昀は韋穀の才調集に據り「悲歌六首、新繫の四句は是れ第五首、何處の四句は是れ第六首、春風の六句は是れ第一首」といつて居る。

【詩意】新に青い絲を綯つた百尺の繩を車井戸にかけたが、それに隨つて、わが心も、君が家の轆轤の上に在る。わが心は、皎潔なれども、君は察して呉れず、そこで、轆轤の一轉する毎に、一たび惆悵することを禁じ得られぬ。春風は、何處から來て、曉早く、簾幕を吹くか、今しも、江南の綠水は、

珠閣を通じて、その下を廻流して居る。その簾幕の中には、芳紀二八の美人が居て、その顔は、花の如く、泣いて花前に向つて、花の落つることを心配して居る。春風に臨み、春の鳥の鳴くのを聞きつつ、情緒紛紛、おもふ人と別るる時は多けれども、相見る時は少く、その爲に、夜もすがら、眠を爲さず、名は車井戸に由緣ある瑤井と玉繩と、二つの星が相對し、やがて、夜の明ける頃ともなつた。

【餘論】紀昀は「却つて、聯綴し得て好し」といつて居る。

白鶴吟、留鍾山覺海

白鶴聲可憐。紅鶴聲可惡。
白鶴招不來。紅鶴揮不去。
長松受穢死。乃以紅鶴故。
北山道人曰美者自美吾
何爲而喜。
惡者自惡吾何爲而怒。
去自去耳吾何駛而追。

白鶴吟、鍾山覺海に留む

白鶴、聲憐むべく、紅鶴、聲惡むべし。
白鶴、招けども來らず、紅鶴、揮へども去らず。
長松、穢を受けて死す、乃ち紅鶴の故を以てす。
北山の道人曰く、美者は自ら美、吾、何すれぞして喜ばむ。
惡者は自ら惡、吾、何すれぞして怒らむ。
去るは自ら去るのみ、吾、何ぞ駛せて追はむ。

來自來耳吾何妨而拒。
吾豈厭喧而求靜。
吾豈好丹而非素。
汝謂松死吾無依耶。
吾方捨陰而坐露。

【題義】査初白は「愼、案ずるに、この一首、王半山集第三卷中に見え、題を白鶴吟、示二鍾山覺海元老一と云ふ。首二句の下、なほ白鶴靜無レ四、紅鶴喧無レ數の二句あり、知らず、何を以て脫落し、又復た訛して先生の集中に入るか」といつて居る。それから、李雁湖の王荆公詩註に「僧行詳、善辯を以て名となし、禪宗の先師を毀訾す。普覺は奄化して、覺海は孤立す、詳、益す驕傲、公、詳を逐ひ、師を留めて、この詩を作る。白鶴は覺海に譬ふるなり、紅鶴は行詳なり、長松は普覺なり」とある。

【詩意】白鶴の聲は、しをらしいが、紅鶴の聲は、憎むべく、白鶴は招いても來ぬが、紅鶴は、拂ひ退けても立ち去らない。長松には、汚い糞などが掛つて枯死したが、それは、紅鶴の爲したことである。ここに、北山の道人が云ふには、美者は自ら美とすれども、われ之を美とせぬが故に、どうして喜ばうか。惡者は自ら惡とすれども、われ之を惡とせぬが故に、どうして怒らうか。去るものは自ら

來るは自ら來るのみ、吾、何ぞ妨げて拒まむ。
吾、豈に喧を厭うて靜を求めむや、
吾、豈に丹を好んで素を非とせむや。
汝、松死して吾依るなしといふか、
吾、方に陰を捨てて露に坐せむ。

去るべく、われ、いかで馳せて之を追ふべき。來るものは自ら來るべく、われ、いかで妨げて之を拒ぐべき。われ、豈に騷がしきを厭うて、靜かなるを求むべきか。われ、豈に赤きを好んで、白きを斥くべきか。汝は、松が枯死して、われも依るところなく、困まつて居るといふが、われは、今しも、松の陰を捨て、露に坐して、ぬれても拘はぬ積り、唯だ紅鶴だけは、何分好かぬから、仕方がない。

【餘論】紀昀は「この首、野調」といつて居る。

次韻張甥棠美述志　張甥棠美の述志に次韻す

仲子甘心織履避　仲子、甘心、履を織つて萬鍾を避け、
萬鍾。
淵明不肯折腰爲　淵明、肯て腰を折つて五斗の爲にせず。
五斗。
一年鴻雁識來往。　一年、鴻雁、來往を識り、
終日沐猴誰去取。　終日、沐猴、誰か去取す。

【字解】【一】仲子　高士傳に、「陳仲子は、齊の人、楚に適き、自ら屨を織り、以て衣食に易ふ。王、以て相と爲さむと欲す。妻曰く、夫子、琴を左にし、書を右にし、樂、その中に在り、と。乃ち使者に謝す」とある。【二】淵明　前に和「蔡準」の詩中に注して置いた。【三】沐猴　前に答「章傳道」の詩中に注して置いた。

知甥詩意慕兩君。　知る、甥の詩意、兩君を慕ふを、
讀書要在存心久。　讀書、要は存心の久しきに在り。
平生所談性命奥。　平生、談ずるところは性命の奥、
長棄不憂金石朽。　長く棄てて憂へず、金石の朽つるを。
我今已習鶩子定。　われ今、すでに習ふ、鶩子の定、
猶復晨朝怖頭走。　猶ほ復た晨朝、頭を怖れて走る。
刳心先擬射聲名。　心を刳つて、先づ聲名を射むと擬す、
不作羊鄒悲峴首。　羊鄒の峴首を悲むを作さず。
雲梯雨矢集無方。　雲梯雨矢、集まる方なく、
我已中灰同墨守。　われ已に中灰、墨守に同じ。
恐甥自是禹門鱗。　恐る、甥が自ら是れ禹門の鱗、
未可潛逃入吾藪。　未だ潛に逃れて吾が藪に入るべからず。
琢磨晚覺孟光賢。　琢磨、晚に覺ゆ孟光の賢、

【字解】【一】鶩子定　心經註に「舍利子は卽ち舍利弗、ここに鶩子といふ。小乘十大弟子に于て、智慧第一、すでに空定を得たり」とある。【二】怖頭走　楞嚴經に「佛、富樓那に告ぐ、汝、豈に室羅城中演若達多を聞かずや、忽ち晨朝に于て、鏡を以て面を照らし、鏡中の頭を愛す、眉目見るべし。已の頭を嗔責して、面目を見ず、以て魑魅となし、無狀狂走す」とある。【三】射聲名　射は謝の誤らしい。【四】羊鄒　前に峴山の詩中に注して置いた。【五】墨守　墨子に「公輸般、雲梯の械を爲り、將に宋を攻めむとす。墨子、これを見て乃ち帶を解いて城となし、標を以て械となす。公輸般、九たび攻城の機變を設く、墨子、九たび之を拒ぐ。公輸般攻械盡き、墨子守禦餘あり」

畏我放言時被肘。わが放言を畏れて、時に肘せらる。
甥能鉏我青門瓜。甥、能くわが青門の瓜を鉏き、
正午時來休老手。正午、時に來つて、老手を休ませよ。

と見ゆ。【九】禹門鱗　辛氏三秦記に「河津、一名龍門。大魚、門下に集まる數千、上るを得ず、上るものは龍となり、上らざるものは魚、故に鄒を龍門に曝すといふ」とある。

【一〇】孟光　梁鴻の妻、前に明日重九の詩中に注して置いた。【一一】被肘　說苑に「魏宣子、韓康子を肘し、康子、魏宣子の足を履み、肘足、車上に接し、而して、智氏分る」とある。【一二】青門瓜　東陵侯召平の事、前に蔡州道上の詩中に注して置いた。【一三】正午時來　傳燈錄に「龐居士、女あり、靈照といふ、居士、將に入滅せむとし、女靈照なして出でて日を視せしめ、早晩、午に及べば以て報ぜしむ。照、遽に報じて曰く、日、すでに中す、しかも、餘あるなり、と。居士、戶を出でて次を觀る、靈照、卽ち父の座に登り、合掌して坐亡す。後七日、士、亦た化して去る。龐婆、田中に走り、子龐大に謂つて曰く、汝の父死す。龐大笑つて曰く、嘆、と。鋤に倚つて亦た脫し去る」とある。

【題義】查初白は「愼、案するに、この一首、亦た晁无咎の雞肋集に見ゆ、題中、張甥の二字なし」といつて居る。

【詩意】陳仲子は、自ら滿足しつつ、屨を織つて萬鍾の祿を避け、陶淵明は、五斗米の爲に腰を折ることを肯んじなかつた。一年の中、雁の去來に因つて、春秋を知るものもあるし、終日沐猴を眞似て、去取を爲すものもある。わが甥の詩意は、陳陶二君を慕つて居るが、讀書の要は、いつまでも本心を存することである。平生性命の奧儀を談じ、長く棄てられて、金石さへ朽つることを憂へない。われは、今、積習の後、舍利弗の如くなつたが、それでも、晨朝鏡に映ずる己の頭を見て、魑魅と思つて走り出すことがある。心を刻つて聲名を謝し、羊鄒二人の如く、峴山の碑を見て羊祜を悲むことをしない。雲梯雨矢が、どこといふことなく、集まつて來ても、われは、中心灰の如く、墨翟の守禦を盡して居る。わが甥は、龍門に登る魚の如く、前途の望があるから、決して、潛に逃れて、吾が藪中に入るにも及ばない。その德を琢磨して後にこそ、晩年、はじめて孟光の賢を覺るべく、わが放言を畏れて、時時、それとなく肱で注意して吳れる。わが甥は、われに代つて、青門の瓜を鋤いて世話をして吳れるから、丁度、龐居士が正午の時に入滅して老手を休める樣に、わが手助けになることは、云ふまでもないことである。

蘇東坡詩集　卷四十八　他集互見詩

古今體詩　五十二首

觀開西湖、次吳左丞韻

西湖を開くを觀る、吳左丞の韻に次す

偉人謀議不求多。　偉人の謀議、多きを求めず、
事定紛紛自唯阿。　事定まつて、紛紛、自ら唯阿。
盡放龜魚還綠浦。　盡く龜魚を放つて綠浦に還らしめ、
肯容蕭葦障前坡。　肯て容さむや、蕭葦の前坡を障るを。
一朝美事誰能紀。　一朝美事、誰か能く紀せむ、
百尺蒼崖尚可磨。　百尺の蒼崖、尚ほ磨すべし。
天上列星當亦喜。　天上の列星、當に亦た喜ぶべし、
月明時下浴晴波。　月明、時に下つて晴波に浴す。

【字解】〔一〕唯阿　老子に「唯の阿と、相去る幾何ぞ」とあつて、二字ともに應諾の辭。〔二〕蕭葦　蕭はよもぎ。

【題義】　査初白は「愼、案するに、參寥子集に見え、題して次二韻吳丞老推官一、觀レ開二西湖一と云ふ。

又、按ずるに、潛說友の咸淳臨安志、この詩を紀文の條下に載せ、亦た以て道潛の作となす。細に詩中を玩ぶに稱頌の詞多く、斷じて、東坡先生の作に非ず」といつて居る。

【詩意】偉人が相談するには、言葉の多きを求めず、事が決定すれば、紛紛として、唯といひ、阿といひ、誰でも、その旨を受けるだけである。そこで、盡く龜魚を放つて、綠水滿ふる深浦に還らしめ、よもぎや葦をして、前坡を遮らしめず、盡く之を取り拂つて仕舞つた。一朝の美事、何人の筆か能く之を紀すべき、先づ百尺の蒼崖を磨して、その功德を勒するが善からうと思ふ。天上の列星も、亦た湖水の淺治されたことを喜ぶに相違なく、月明かなる折から、時時天上から降つて來ても、晴波に浴することが出來る。

戲題巫山縣、用杜子美韻

戲に巫山縣に題す、杜子美の韻を用ふ

巴俗深留客。吳儂但憶歸。巴俗、深く客を留め、吳儂、但だ歸るを憶ふ。
直知難共語。不是故相違。直に知る、共に語り難きを、これ故らに相違ふならず。
東縣聞銅臭。江陵換袂衣。東縣、銅臭を聞き、江陵、袂衣を換ふ。
丁寧巫峽雨。愼莫暗朝暉。丁寧、巫峽の雨、愼んで、朝暉を暗くする莫れ。

【字解】【一】巴俗　巴地の風俗。【二】吳儂　方言に「吳人自ら謂うて儂といふ」とあつて、吳人に同じ。【三】銅臭　査註に「任彥の山谷集註、舊と山谷の殿を見るに云ふ、銅臭は、乃ち昌黎の照ル壁寫見ル蝎の意、蓋し巫山を過ぐれば、銅錢を用ふるなり。按ずるに、巫山江上、二石あり、俗これを銅錢錢堆といふ。荆蠻、これより分界。滇奎律髓に云ふ、蜀人鐵錢を用ふ、巫山を過ぐれば、はじめて、銅錢を用ふ」とある。【四】袂衣　袷衣。

【題義】査初白は「按ずるに、杜集巫山題壁の詩、云ふところ、臥病巴東久、今年强作ル歸、卽ち此韻なり。又愼、案ずるに、方回の瀛奎律髓に云ふ、山谷、紹聖二年を以て黔州に謫せられ、元符戊寅、戎州に移る。庚辰正月、徽宗登極、戎州を離る。建中靖國元年辛巳、峽州に至る。蓋し、流離跋涉八年、未だ嘗て一詩の遷謫に及ぶあらず。この出峽の詩の起句、石本あり、巴俗難レ親レ我、吳儂但憶レ歸に作る。細味すれば、改本佳となす。任淵の山谷詩註に云ふ、篇中、江陵換二袂衣一の句あり、山谷巫山より度つて此に至る、すでに、初夏云云と、この詩、山谷集に載す」とある。

【詩意】巴地の風俗として、懇に遠客を引き止めるが、吳人は、それにも拘はらず、歸りたいとのみ思つて居る。共に語り難きは、すぐにも分かることで、何も故意に相違うて、よそよそするのではない。東縣に至れば、通貨も銅錢に改まつて、その臭を聞くべく、江陵に著すれば、時候も大分暑くなつて、袷衣に換へねばならぬ。巫峽の雨は、丁寧に予を留めるのであらうが、晴天を妨げぬ樣に、どうか注意して欲しいものである。

答晁以道索書

晁以道の書を索むるに答ふ

閔世眞難記。如公自不忘。　世を閔す、眞に記し難く、公の如き、自ら忘れず。
其於書太簡。正以懶相妨。　その書に於ける、太だ簡、正に懶を以て相妨ぐ。

【字解】〔一〕閔世　陸機の歎逝賦に川閔水以成川、水滔滔而日度、世閔人而爲世、人再再而行莫、人何世而弗新、世何人之能故とある。〔二〕懶相妨　嵇康の與山濤絶交書に「性復たこの懶、筋驚にして肉緩く、又縱逸し來ること久し。情意微散、簡、禮と相背き、嫌、慢と相成る」とある。

【題義】査初白は「愼、案ずるに、五言四句、陳後山集に見え、寄晁以道五言律詩の前半首なり。その後の四句に云ふ、共有還家樂、終無却老方、莫須憂潦倒、未許細商量」といつて居る。

【詩意】世を閔することは、いかにも忙しいので、まことに、記憶も出來ないが、君は、自然忘れもせずに、よく覺えて居られる。その書に於けるは、太だ簡便で、もとより手數のかかることもないが、まさしく、疎懶の爲に妨げられて、つい延び延びに成つたので、まことに、失禮の至、謹んで御詫をする次第である。

陳伯比和回字、復次韻

陳伯比、回字に和す、復た次韻す

田里馮生寧屑去。　田里の馮生、むしろ去るを屑しとせむや、
湖海陳侯猶肯來。　湖海の陳侯、猶ほ肯て來る。
詩書好在家四壁。　詩書好在、家四壁、
蒲柳蓊然城一隈。　蒲柳蓊然たり、城の一隈。
騎上下山亦疎矣。　騎して山を上下する、亦た疎なり、
艅從容出何爲哉。　艅從容として出づるは、何すれぞや。
市橋十步卽塵土。　市橋十步、卽ち塵土、
晚雨瀟瀟殊未回。　晚雨瀟瀟として殊に未だ回らず。

【字解】〔一〕馮生　卽ち馮衍、字は敬通、前に數ば見ゆ、江淹の恨賦に敬通見レ抵、罷歸。田里」とある。〔二〕陳侯　陳君といふに同じ、陳登、字は元龍、前に次韻答李邦直の詩中に注して置いた。〔三〕好在　差なしの意、前に子由初到陳州次韻宿法喜寺の詩中に注して置いた。〔四〕四壁　前に謝鄭人獻花の詩中に注して置いた。〔五〕騎上下山　漢書伍被傳に「騎して山を上下すること飛ぶが如し」とある。〔六〕艅從容出　莊子に「艅魚出でて游んで從容たり、これ魚樂むなり」とある。

【題義】査初白は「陳伯比、名は琦、初の字は元老、後、伯比と改む。晁補之、陳琦伯比字說あり。愼、案ずるに、晁補之の雞肋集、家池雨中二首あり、又次韻陳伯比二首、これは其第一首なり。晁集中、伯比と往還の詩牘、甚だ多し。この首と上卷池上の二首と、格調自ら別、斷じて東坡の作に非ず」といつて居る。

【詩意】田里に放ち還された馮敬通は、去ることを屑しとせざれども、湖海に豪を稱する陳元龍は、矢張遣つて來る。詩書は差なけれども、家は四壁山立、あたりには、蒲柳蓊然として、城中の片隅に

嘗つて居る。騎して山を上下することは、亦た疎で、自分には出來ないが、鱸魚の從容として出でて樂むは、果して何に由るか。市橋は、十歩の外に在つて、卽ち塵土の俗境であるのに、暮雨蕭蕭の折しも、歸り來らざるは、如何したことかと、聊か心配しつつ待つて居る。

【餘論】紀昀は「三四は、江西派の工なるもの、五六は江西派の野なるもの」といつて居る。

與道源游西莊、遇齊道人、同往草堂、爲齊書此

道源と西莊に游び、齊道人に遇ひ、同じく草堂に往き、齊の爲に此を書す

桑麻已零落。藻荇復消沈。
桑麻、すでに零落、藻荇、復た消沈。

園宅在人境。歲時傷我心。
園宅、人境に在り、歲時、わが心を傷ましむ。

强穿南埭路。遙望北山岑。
强ひて南埭の路を穿ち、遙に望む北山の岑。

欲與道人語。跨鞍聊一尋。
道人と語らむと欲す、鞍に跨つて聊か一尋。

【字解】〔一〕藻荇　荇は花蓴菜、前に數ば見ゆ。〔二〕在人境　陶淵明の結廬在人境を用ひたのであらう。〔三〕南埭　埭は隄。

【題義】査初白は「道源、姓は沈、その名を失ふ。王介甫と金陵に在つて、往還游好、甚だ密、愼、案するに、この五言律一首、王半山集に見え、題して、元豐四年十月二十四日、與道源過西庵、遂至草堂寶乘寺二首といひ、これは、その第一首なり、中間三字同じからず」といひ、馮應榕の案に「李厖湖の王荆公詩題註、按するに、建康志に云ふ、寶乘寺は、本と齊の草堂寺、周顒隱居の所、城北十一里に在り、西庵、疑ふらくは卽ち白雲菴、又半山集、與道源游西莊過寶乘の絶句一首あり」と記してある。

【詩意】時しも秋の末、桑麻は、すでに零落し、藻荇も、亦た消沈して、滿目蕭條、園宅は、人境に在るが、折折につれて、わが心を傷ましめることがある。そこで、强ひて南の隄の路を通りぬけて、遙に北山の高嶺を望んだ。やがて、道人に遇つて話でも致さうと思ひ、鞍に跨つて、一寸尋ねて見ることにした。

答子勉三首

子勉に答ふ　三首

君不登郎省。還應上諫坡。
君は郎省に登らず、還た應に諫坡に上るべし。

才高殊未識。歲晚喜無他。
才高くして殊に未だ識らず、歲晚、他なきを喜ぶ。

櫪馬羸難出。鄰雞凍不歌。
櫪馬、羸れて出で難く、鄰雞、凍えて歌はず。

寒爐餘幾火。灰裏撥陰何。
寒爐、幾火を餘す、灰裏、陰何を撥す。

【字解】〔一〕郎省　唐書百官志に「隋、尚書省諸司郎、及び承務郎、各一人、武德三年、諸司郎を改めて郎中となし、承務郎を員外郎となす」とあり、宋史職官志に「門下省に起居郎あり、天子の言動を掌記し、起居舍人と殿下螭首の側に對立す、これを左右史といふ」とある。すると、郎省は、宋では、主として門下省を指したのであらう。〔二〕諫坡　雍錄に「今世通じて諫議を呼んで諫坡となす、蓋し、因話錄、上坡下坡の說に起る。坡は、舍元殿前の龍尾道、陂陀にして高きなり。唐制、兩省の供奉、常に人主の左右に在り、侍奉宣傳、故に舍元に御する毎に、すなはち、宰相及び兩省官、未だ扇を索めざる前に於て、備補の內に立ち、扇開くに及びて、便ち香案の前に侍立し、その先に上るを取つて供奉に備ふ、その班を立つる、皆坡上に在る所以なり、上坡下坡は、卽ち班列の高下を以て言となす」とある。〔三〕無他　恙なしといふ意、說文繫傳に「它は虫なり。上古草居、它を患ふ、故に相問うて它なきかといふ」とある。〔四〕羸顯出　羸は疲れる。〔五〕撥除何　除經何逕。傳燈錄に「百丈、溈山に謂つて曰く、汝、爐中を撥して火ありや否や。師、撥して云ふ、火なし。百丈、躬づから起ち、深く撥して火を得たり、舉げて以て之に示して曰く、これは是れ火ならずや」とある。

【題義】查註に「瀛奎律髓に云ふ、高荷子勉は、江陵の人、五言律三十韻を以て贄として山谷に見ゆ。山谷、これを賞し、遂に名を知らる。後、涿州に知として卒す。詩、江西派に入る、著すところ適適集と名づくと。石林詩話に云ふ。高子勉は、荊南の人、杜詩を學んで、頗る句法を得たり、晩に童貫の客となり、蘭州通判を得たり、すでに、時論の與するところとならず、その詩、亦た傳はらず。雪浪齋日記、その詩を載せ、沙軟綠頭相並鴨、水深紅尾自跳魚の句あり、亦た殊に思致あるなり」とあり。鳳鷄の宋詩紀事に「荷、自ら還還先生と號す」とある。なほ、查初白は「憤、案ずるに、黃山谷集、次韻答高子勉の五言律詩、凡そ十首あり、君不レ居二郎省一云云は、その第四首、人得二佳句一云云は、その第六首なり」とある。歐倩腰支の七絕一首も、山谷の作であるが、その議論は後に述べることにする。

【詩意】君はまだ門下省に出仕せぬか、やがて、諫議大夫に任官されるであらう。才高くして、殊に未だ知られざるは、殘念であるが、歲晩の寒い時分、恙なきは喜ぶべきことである。今しも、羸の馬は疲れて、外に出し難く、鄰家の雞も凍えて、花やかには歌はぬ折から、爐中には、どれだけの火種を殘して居るか、その灰をほじくつて居る內に、天晴、陰何に匹敵すべき佳句を撥し出すことであらう。

驚人得佳句。或以傲王公。
人を驚かして、佳句を得たり、或は以て王公に傲る。

處士還清節。滑稽安足雄。
處士、還た清節、滑稽、安んぞ雄とするに足らむ。

深沈似康樂。簡遠到安豐。
深沈、康樂に似たり、簡遠、安豐に到る。

一點無俗氣。相期林下風。
一點、俗氣なし、相期す林下の風。

【字解】〔一〕滑稽　屈原の卜居に「寧ろ突梯滑稽、如レ脂如レ韋、以繫極乎とあつて、漢書傳註に「師古曰く、滑稽は、圓轉綴揆、無窮の狀」とある。〔二〕康樂　南史謝靈運傳に「文章の美、江左第一たり、縱橫俊發、延之に過ぐ、深害は如かざるなり」とある。〔三〕安豐　晉書に「王戎、安豐侯に封ぜらる、善く談論を發して、その要會を賞ず」とある。

【詩意】人を驚かす樣な佳句を得て、君は、或時、王公に傲られる。處士は、清節を旨とすべく、滑

稽は、雄とするに足らぬものである。君の詩句の深沈なることは、謝康樂に似て居るし、談話の簡遠なることは、王戎にも匹敵する。「點俗氣なきが故に、相期して、林下高踏の風を旨としたいと思つて居る。

歐倩腰支柳一渦。　歐倩の腰支、柳一渦、
小梅催拍大梅歌。　小梅は催拍して大梅は歌ふ。
舞餘片片梨花落。　舞餘片片として梨花落つ、
爭奈當塗風物何。　爭でか當塗の風物を奈何。

【字解】〔一〕歐倩　當塗の妓の名。〔二〕小梅　史容の山谷詩註に「大小梅、皆太平州の官妓」とある。〔三〕當塗　查註に「山谷年譜、建中靖國元年、戎州より放たれて還り、辭して吏部員外郎を免じ、乞うて太平州に知たり。崇寧元年壬午、州事を領し、九日にして罷む。按ずるに、當塗縣は、晉の成帝の時、はじめて置き、宋には、太平州に屬す」とある。

【詩意】歐倩の腰肢は、柳の一かたまりの如くして、舞を爲すに適し、小梅は、拍板を催し、大梅は、その調子に合せて歌を唱へて居る。やがて、舞が畢ると、梨の花が、片片として落ち來り、當塗の風物、人を惱ますを如何にすべきかと思はれた。

【餘論】査初白は「愼、案ずるに、右七言絕、亦た黃山谷集に見え、太平州二絕句の一なり。能改齋漫錄に云ふ、豫章、請うて當塗に守たるを得たり、七日にして罷む、又數日にして乃ち去る。その詩に云ふ、歐倩腰支柳一渦、云云と。又木蘭花詞あり、結句に云ふ、歐舞梅歌君更酌、と。自ら批して云ふ、歐梅は當塗の二妓なり。これに據れば、この詩、山谷の作たること疑なし」とあり。

和子由次王鞏韻如囊之句可爲一噱

子由が王鞏の韻、囊の如しの句に次するに和す、一噱と爲すべし

平生未省爲人忙。　平生、未だ省みず人の爲に忙はしきを、
貧賤安閒氣味長。　貧賤、安閒、氣味長し。
粗免趨時頭似葆。　粗ぼ免る、時に趨つて頭、葆に似たるを、
稍能忍事腹如囊。　稍や能く、事を忍んで、腹、囊の如し。
簡書見迫身今老。　簡書迫られて、身、今老い、
尊酒聞呼首一昂。　尊酒呼ぶを聞いて、首一昂。
欲挹天河聊自洗。　天河を挹んで、聊か自ら洗はむと欲す、
塵埃滿面鬢眉黃。　塵埃、面に滿ちて、鬢眉黃なり。

【字解】〔一〕頭似葆　漢書燕王旦傳に「頭は蓬葆の如し」とある。葆は草木の茂りたるを云ふ。〔二〕簡書　詩經に見る此簡書とある。

【題義】この詩は、子由が王鞏の韻、如囊といふ句の詩に次韻したから、それに和したのであるが、

宜しく、一笑を發すべきものであるといふ義。査初白は「亦た欒城集第八卷中に見え、題して、次韻王鞏自詠」乃客二徐州一時與二定國一唱和之作上と云ふ」とある。

【詩意】平生人の爲に忙しく立ち廻ることに氣が付かず、貧賤に甘んじ、安閑として、氣味の長きを覺える。時俗に隨つて、頭を蓬の茂る如くすることだけは、ざッと免れて居るが、稍や事を忍ぶことが出來て、腹は囊の如くである。日日、文書を以て迫まられ、身、今すでに老い、時に尊酒を以て呼ばられるを聞いて、一たび首を昂げることもある。そこで、天の河の流を汲んで、聊か自ら洗はうと思ふので、塵埃、面に滿ちて、鬢も、眉も、黃色に染まつて居る。

元祐癸酉八月二十七日、於建隆章淨館書、贈王觀

元祐癸酉八月二十七日、建隆章淨館に於て書し、王觀に贈る

海上東風犯雪來。
臘前先折鏡湖梅。
遙思禁苑青春夜。
坐待宮人畫詔回。

【字解】〔一〕鏡湖　卽ち鑑湖、前に敍べ見ゆ。〔二〕畫詔　詔勅を裁可されること。

海上の東風、雪を犯して來り、
臘前、先づ折る鏡湖の梅。
遙に思ふ、禁苑青春の夜、
坐して待つ宮人が詔を畫して回るを。

【題義】汴宮遺跡志に「太清觀は大梁門外の西北に在り、周の世宗建つるところ、宋の太祖、建隆を以て改元す。遂に名を更めて建隆觀といふ」とある。但し査初白は「愼、案ずるに、この七言絕句一首、會昌一品集中に見ゆ、乃ち李文饒の京國を憶ふの詩なり。萬首唐人絕句、この詩を載せ、以て李德裕の作となす。題中、明かに書贈二王觀一といふ、すなはち東坡の詩に非ざること知るべし」といつて居る。すると、元祐癸酉……章淨館までは、東坡の詩題であるとすると、書贈二王觀一及び其詩は、唐人の作で、後人が編輯の際、誤つて入れたのであらう。

【詩意】海邊の東風は、雪を犯して吹き來り、ここも、流石に春が催して、臘前に先づ鏡湖の梅花を折ることが出來た。遙に思へば、宮苑春酣なる夜、君は、臺省に當直して、御裁可に成つた詔勅を宮人が下げて來て渡すのを待つて居ることであらう。

東園

岑寂東園可散愁。
膠膠擾擾夢神州。
萬竿苦竹旌旗卷。

【字解】〔一〕岑寂　物さびしい貌。〔二〕膠膠擾擾　莊子に「然らば、すなはち膠膠擾擾たるか」とあつて、膠膠は固にして解けず、擾擾は紛

一部鳴蛙鼓吹收。
雨後月前天欲冷。
身閒心遠地偏幽。
杜門謝客恐生謗。
且作人間鵬鷃游。

一部の鳴蛙、鼓吹收む。
雨後月前、天冷かならむと欲し、
身閒に、心遠く、地偏に幽なり。
門を杜ぢ、客を謝して、謗を生せむこ
且つ人間鵬鷃の游を作す。

[とを恐る、

た飛ぶの至なり」とある。

【題義】 査初白は「この詩、黄山谷詩集に見え、次韻黄斌老晩游池亭二首の一なり。山谷、斌老と唱和甚だ多く、集中、又答斌老獨游東園の五言古詩六首あり。東園は必ず斌老の居るところ、山谷、かつて、之に従つて游ぶものなり」といつて居る。

【詩意】 東園は、寂しきまでに静にして愁を散ずべく、膠膠擾擾として、都の方を夢みることがある。萬竿の苦竹は、旌旗を巻くが如く、一部の鳴蛙は、鼓吹の樂をなして居る。雨の後、月の前には、天も澄みて冷かならむとし、身閒に、心遠くして、地の偏に静なるを覺える。門を閉ぢて、客を謝絶すると、動もすれば、人づき合をせぬものだといふ様な譏を生せむことを恐るるが故に、大鵬と斥鷃と、その各〻異なるに拘はらず、矢張、人並に浮世に立ち交つて居る。

として事からざる鷃。【三】心遠地偏幽　陶淵明の詩を用ふ、前に常潤道中の詩中に注して置いた。【四】鵬鷃游　莊子に「鳥あり、その名を鵬となす……斥鷃、これを笑うて曰く、彼、且さに奚に適かむとするや、われ騰躍して上る、數仞に過ぎずして下り、蓬蒿の間に翱翔す、これ亦

藏春塢

朱閣前頭露井多。
碧桃花下美人過。
寒泉未必能勝此。
奈有銀缾素綆何。

藏春塢

朱閣前頭、露井多く、
碧桃花下、美人過ぐ。
寒泉、未だ必ずしも能く此に勝らず、
銀缾素綆あるを奈何。

【題義】 査初白は「憤、案ずるに、この詩、亦た陸龜蒙の集に見え、題を野井といふ。又淮海集に見ゆ」といつて居る。但し、馮應榴の案に「宋板淮海集、この詩を載せず」とあるが、後世の刻本には有るのであらう。

【詩意】 紅閣の前には、屋根の無い井戸が二三あつて、井邊には、白桃の花が咲き出で、その花の下を美人が通過して居る。この井戸よりも、冷たい寒泉は、外にも有るが、銀缾と素綆とを備へたるに至りては、もとより、他に其匹なきものである。

【字解】 【一】露井　屋根の無い井戸。【二】碧桃　白桃。

次韻參寥寄少游

巖棲木石已皤然。

參寥の少游に寄するに次韻す

巖棲木石、すでに皤然、

【字解】 【一】木石　一に木食に

交舊何人慰眼前。
素與畫公心印合。
每思秦子意珠圓。
當年步月來幽谷。
拄杖穿雲冒夕煙。
臺閣山林本無異。
故應文字不離禪。

交舊く、何人か眼前を慰めむ。
もとより畫公と心印合し、
秦子を思ふ毎に意珠圓なり。
當年、月に歩して幽谷に來り、
杖を拄へ、雲を穿つて、夕煙を冒す。
臺閣山林、本と異なるなし、
故と應に文字、禪を離れざるべし。

作る、その方が穩當であらう。【三】畫公　唐の詩僧皎然、姓は謝、字は清晝、湖州の人、高僧傳に「皎然、逸才あり、然れども、文章を以て世に名あるを恥ぢ、將に杼山に入らむとするや、著すところの詩文を焚めて、之を火す、後人、これが爲に稱して曰く、畫の晝、能く清秀」とある。【三】心印　前に去杭州二十五年の詩中に注して置いた。【四】秦子　即ち秦少游。【五】意珠　前に次韻潍師放魚の詩中に注して置いた。【六】當年步月　淮海集の龍井題名記に「元豐二年中秋後一日、余、吳興より杭を過ぎ、東、會稽に遊る。龍井の辨才法師、書を以て余を邀へて山に入る。郭を出づる比、日、すでに夕、湖を航して菩寧に至り、道人參寥に遇ふ。この夕、天宇開霽、林間月明かにして、毛髮を數ふべし。遂に參寥に從ひ、策に杖つき、湖に泝んで行き、靈峰を出で、南屏を度り、雷石塢に入つて支徑を得、風篁嶺に上り、行くこと二鼓、はじめて壽聖院に至り、辨才に謝音堂に謁す、云云と。詩中、當年步月來幽谷、拄杖穿雲冒夕煙の二句、正に題名と相合ふ」とある。【七】文字不離禪　即ち文字禪、前に維摩像の詩中に注して置いた。

【題義】　查初白は「愼、案ずるに、七言律一首、乃ち辨才法師の詩、本集、先生自ら此詩を書し、その後に題して云ふ、辨才、詩を作る、時に年八十二、平生、初めより詩を作ることを學ばず、風の水を吹くが如く、自ら文理を成す。參寥と吾輩との詩の如きは、乃ち巧人の織絹の如きのみと。又按ずるに、咸淳臨安志、辨才の此詩を龍井の條下に載せ、幷せて、少游・參寥の和詩を附す。淮海集、詩題に云ふ、辨才師以レ詩見レ寄、繼聞二示寂一、追次二其韻一云云と。即ち此首の韻、又その一證なり」といつて居る。

【詩意】　身は巖棲木食、頭も既に白くなり、舊交中の何人が來て、眼前の寂寞を慰めて呉れるか。もとより、古しへの詩僧皎然とは心印相合し、そして、毎毎、秦少游を思うて、その爲に、意珠も圓かである。前年、少游と共に月に歩して幽谷に來り、そして杖に縋つて雲を穿ち、又夕煙を冒して、溪山の間を逍遙したことがある。臺閣と山林と、本來異なるなく、唯だ文字禪てふ眞義を離れぬ樣にすれば宜しいのである。

贈仲勉子文

雨昏南浦曾相對。
雪滿荆州喜再逢。
有子才如不羈馬。

仲勉子文に贈る

雨は南浦に昏くして、かつて相對し、
雪は荆州に滿ちて、再び逢ふを喜ぶ。
子の才、不羈の馬の如きあり、

【字解】【一】南浦　後に萬州の題下に注することにする。【二】相　助　さし付ける。

知君心似後凋松。
閒看書冊應多味。
老傍人門想更慵。
何日晴軒觀筆硯。
一杯相屬更從容。

【題義】 査初白は「愼、案ずるに、亦た山谷集に見え、題して、和高仲本喜相見といふ。按ずるに仲本、名は宿、山谷の萬州を過ぐるとき、高、太守たり、與萬安太守高宿、游岑公洞、夜雨連明の絶句あり。亦た訛して東坡集中に入る。萬州は、唐に南浦郡たり、この詩の起句と正に合ふ。その黃の作たること疑なし」とある。

【詩意】 南浦の萬州に雨昏き時、君と對晤したことがあつて、今日、雪の荆州に滿つる折しも、再び相逢ふを得たるは、まことに喜ばしい。君の才は、不羈の馬の如く、そして、心は後凋の松に似て居る。閒なる折から、書冊を看れば、味多かるべく、年を取つてから、他人の門に伺候するのは、一層慵いことである。晴軒の下に筆硯を觀つつ、一杯を差しつけて、ともに從容歡話するのは何日であらうかと、唯だそれのみを心待ちにして居る。

知る、君の心は後凋の松に似たるを。
閒に書冊を看て、應に味多かるべし、
老いて、人の門に傍うて、想ふ更に慵し。
何の日か、晴軒に筆硯を觀、
一杯相屬して更に從容たらむ。

講武臺南有感

山城九月冒朝寒、
講武臺南路屈盤。
騶子雨中乘馬去。
村童煙外倚牆看。
鴉啼冢木秋風急。
鷺立漁船野水乾。
花似去年堪折贈。
插花人去淚闌干。

【題義】 査初白は「愼、案ずるに、七言律一首、亦た黃山谷集に見え、中間同じからざるもの十一字」とある。

【詩意】 山城九月、秋の末、朝の寒さを冒して、講武臺南の曲折したる路をたどつて行くと、馬飼共は馬に乘つて雨中に去り、村童は、牆に倚つて大閲の光景を眺めて居る。鴉は、墓邊の木に啼いて、

講武臺南、感あり

山城九月、朝寒を冒し、
講武臺南、路屈盤。
騶子、雨中、馬に乘じて去り、
村童、煙外、牆に倚つて看る。
鴉は冢木に啼いて秋風急、
鷺は漁船に立つて野水乾く。
花は去年に似て、折つて贈るに堪へたり、
花を插むの人は去つて淚闌干。

【字解】 〔一〕講武臺　査註に、「元和郡縣志、晉陽に講武臺あり、縣の西北十五里に在り、顯慶五年置く。宋史太宗紀に、興平二年九月、講武臺に幸して大閲す」とあるが、山谷外集の點註に、元豐二年、北京の作とあるから、晉陽とは關係がない。〔二〕騶子　うまかひ。〔三〕闌干　淚の流るる貌。

折から、秋の風すさまじく、鷺は、漁船の上に立つて、野水が乾いて居る。花は去年の如く、折つて贈るに堪へたれども、その花を頭上に挿んだ人の已に亡せしことを思へば、涙闌干として流るるを禁じ得ぬ。

移合浦郭功甫見寄

合浦に移る、郭功甫、寄せらる

君恩浩蕩似陽春。　君恩浩蕩として陽春に似たり、
合浦何如在海濱。　合浦、何如ぞ海濱に在る。
莫趁明珠弄明月。　明珠を趁うて明月を弄する莫れ、
夜深無數採珠人。　夜は深く、無數、珠を採るの人。

【字解】〔一〕採珠　査註に「南越志、珠母海は合浦縣南に在り、中に七珠池あり、珠は九品あり、大なるものは璫珠と名づく、次は、走珠、又次は滑珠、又次は碌碡珠、又次は官兩珠、又次は稅珠、又次は芯符珠。裴閭雜記、蜑人、珠を采るもの、大船を以て池を環り、石を以て大絙に懸け、別に小繩を以て、これを蜑腰に繫ぎ、水に沒し蚌を拾うて竹籃中に置き、繩を振へば、船人汲取し、蜑は大絙に縁つて上る。不幸にして、惡魚に遇ひ、一綫の血あつて水面に浮べば、魚腹中に葬るし とある。

【題義】査初白は「愼、案ずるに、王應麟の困學紀聞に云ふ、東坡の文章、譏刺を好む、文與可、戒むるに詩を以てして云ふ、北客若來休問事、西湖雖好莫吟詩と。晚年、郭功甫、詩を寄せて云ふ、莫向沙邊弄明月、夜深無數采珠人云云、これに據れば、この詩は、乃ち郭功甫の作るところ」といつて居る。

【詩意】聖上の恩は、浩蕩として陽春に似て居るのに、その差遣された合浦は、どうして、遠く隔つて、海濱に在るのか、明珠を探がして明月を弄することは爲さずもあれ、夜深き時でも、珠を採る人は、無數に來るので、これ等と其功を爭ふのは、まことに大人氣もないことである。

題懷素草帖

懷素の草帖に題す

人人送酒不曾沽。　人人酒を送つて、かつて沽はず、
終日松間挂一壺。　終日松間、一壺を挂く。
草聖無成狂飲發。　草聖成るなく狂飲發す、
眞堪畫作醉僧圖。　眞に畫いて醉僧の圖と作すに堪へたり。

【字解】〔一〕草聖　張旭の事、前に授經臺の詩中に注して置いた。唐書に「張旭、草書を善くす、性、飲を好み、醉後輒ち頭を以て墨を濡して書す、醒めて之を觀、以て神助あるが若しと爲す」とある。〔三〕醉僧圖　「夾註に、宣和書譜、御府に懷素の草帖一百餘種を藏す、內に醉僧圖の詩あり、又劉餗の隋唐佳話、張僧繇、醉僧の圖を作る、道士每に此を以て僧を嘲る、羣僧、ここに於て錢數十萬を集め、圖立本醉道士の圖を買ひ、今并せて傳ふ」とある。

【題義】査初白は「石刻、先生自ら題して云ふ、これ懷素の詩なり、僕、好んで之を臨す、人間、當に數百本あるべきなりと。後人、深考を加へず、遂に訛して、この詩を以て編して集中に入るるのみ。

又按ずるに、萬首唐人絶句、この詩を載せ、亦た以て懷素の作となす」とある。

【詩意】人人が酒を送つて呉れるから、つひぞ酒を買つたこともなく、そして、終日、松の木の間に一壺を挂けてある。われは、自ら草聖に成らうと思つて居るが、それが出來ないにつけて、狂飲の興、勃然として發したので、これを畫けば、卽ち醉僧の圖になるであらう。

僕年三十九、在潤州道上、過除夜、作此詩、又二十年、在惠州、追錄之、以付過、二首

僕、年三十九、潤州道上に在り、除夜を過ごして此詩を作る。又二十年、惠州に在り、之を追錄して、以て過に付す　二首

寺官官小未朝參。
紅日半窗春睡酣。
爲報鄰雞莫驚覺。
更容殘夢到江南。

寺官、官小にして未だ朝參せず、
紅日半窗、春睡酣なり。
爲に報ず、鄰雞、驚覺する莫れ、
更に容せ殘夢の江南に到るを。

【字解】〔一〕寺官　宋史職官志に「太常・宗正・光祿・衛尉・太僕・大理・鴻臚・司農・太府、ともに九寺、正卿少卿よりして下、太常には協律郎・奉禮郎あり、太祝・大理には司直・評事あり、この七寺の丞皆七品、主簿は皆八品、統べて寺官と名づく」とある、つまり評省の屬官。

【題義】査初白は「愼、案ずるに、何薳の春渚紀聞に云ふ、錢唐の關氏、詩律精深妍妙、世一家法を守る。子東の二兄、子容・子開、皆作者と稱す、釣艇歸時蒲葉雨、寺官官小未二朝參一云云、この子容の詩、世、傳へて以て東坡先生の作となすは非なり。今年譜を以て之を考ふるに、熙寧七年甲寅、先生年三十九、この冬、杭倅より移つて密州に知とし、密に在つて歲を度る、除夜答二段屯田一の詩あり、起句に云ふ、龍鍾三十九、勞生已强半と。何ぞ曾て潤州に在つて除夜を過ごさむや。向に、この二絶句、先生の作に非ざるを疑ふ。謂はざりき、古人われに先つて之を言ふものあらむとは」といつて居るが、馮應榴の案に「紀年錄、熙寧六年、除夜、常一州城外に宿して詩を作る、蓋し卽ち前卷十一中の七律二篇、先生時に年三十八、檄を奉じて常潤の飢民を賑濟するを以て、常州に在つて歲を度るなり、除夕の詩、新年に交はる、卽ち三十九、これを以て、七律の第一首。先生の題跋、亦た云ふ、僕、時に年三十九歲、潤州道中、除夜に値うて作る、後二十年、惠州に在つて歲を守り、錄して、過に付す、と。正にこの絶句の詩題と證すべし。査氏、この兩絶句は、先生の詩に非ざるを疑ひ、遂に除夜野二宿常州一七律の題跋を併せて、亦た採錄せず、非なり。姚巖の東坡續紀に至つては云ふ、先生、奉常博士を以て杭に倅たり、すなはち、この詩云ふところの寺官官小は、蓋し自ら謂ふなり。但だ、釣艇の二句は、是れ春深の景物、除夕と合はず、然れども、詩意を玩ぶに、これに前つて舟行楚を過ぐるの情景を指すに似たり、故に下に云ふ、長江昔日經游地と。蓋し、潤州江側に在つて、卽景懷

舊の意、且つ常州舟中は、卽ち以て潤州道上と云ふべし。又嶺南に在つて追錄するに係る。安んぞ、年遠くして、訛記するに非ざるを知らむや、これ皆必ずしも拘看せざるなり」とあつて、この方が議論が精當である。すると、この題は、東坡老年の筆に係つて訛誤を免れずとするも、この詩は、先づ東坡の手筆といつても宜しいものである。

【詩意】臺省の屬官は、下役であつて、まだ朝參することが出來ぬから、紅日、半窓に滿つるまでも、春睡なほ酣にて、なかなか起きない。そこで、鄰の家の雞に報ずるが、しばらく、予を驚き覺ましさず、更に殘夢をして江南に到らしめることを許して貰ひたい。

【餘論】紀昀は「この首、餘致あり」といつて居る。

釣艇歸時菖葉雨。
繰車鳴處楝花風。
長江昔日經游地。
盡在如今夢寐中。

釣艇歸る時、菖葉の雨、
繰車鳴る處、楝花の風。
長江昔日經游の地、
盡く在り如今夢寐の中。

【字解】〔一〕楝花　楝はあふち、一種の木、高さ丈餘に達し、葉は槐の如くして端尖り、春、紅紫の花を開く、實の形、小にして鈴の如く、秋熟して黃となる。二十四番の最終。歲時記に「小寒より穀雨に至る、四月、八氣、二十四義。每候五日、一花の風信を以て之に應ず、穀雨一候、牡丹二候、酴醾三候、楝花竟れば立夏」とあり、東皐雜錄に「二十四番の風信、楝花の風、最も後る」とある。

【詩意】釣舟の歸る時は、菖蒲の葉に雨降りそそぎ、絲を繰る車の鳴る時は、楝の花に風が吹き度つて居る。これ等は、むかし、長江附近を經行した時に見た景色で、今日夢寐の中に、顯然として、なほ殘つて居る。

【餘論】紀昀は「この首蛇足」といつて居る。

萬州太守高公宿、約游岑公洞、而夜雨連明、戲贈二小詩

萬州太守高公宿、約して岑公洞に游ぶ。而して夜雨、明に連る、戲に二小詩を贈る

肩輿欲到岑公洞。
正怯衝泥傍險行。
定是岑公閟清境。
春江一夜雨連明。

肩輿、到らむと欲す岑公洞、
正に怯る、泥を衝き險に傍うて行くを。
定めて是れ、岑公、清境を閟す、
春江一夜、雨、明に連る。

【字解】〔一〕肩輿　前に、過雲龍山人の詩中に注して置いた。
〔二〕岑公洞　一統志に「岑公巖は、萬州大江の南に在り、石巖盤結して華蓋の若く、左右方池、泉あり、巖下に噴薄して簾の如く、松篁蓊鬱、蒼蔚蒼翠、記に神仙の窟と稱するなり」とある。

【題義】查註に「輿地廣記、萬州は、秦漢、巴郡に屬す。後周、安鄉・南都の二郡を立て、後、安鄉を改めて萬州といひ、唐、浦州を立て、天寶中、南浦郡となす。太平寰宇記、山南東道萬州は、舊と朐䏰

縣の地、安郷及び萬川郡となる。貞觀八年、改めて萬州となす。名勝志、萬縣の西山に岑公洞あり、大江の南に在り、廣さ六十餘丈、深さ四十餘丈、圖經に云ふ、岑公、名は道願、江陵の人、隋末ここに隱る。唐宋の間、封ずるに沖妙大師虛靈眞人の號を以てす。輿地碑目、萬州石刻、岑公洞の記あり、元和八年、段文昌撰、又黃魯直の題名あり、岑公洞下の巖寺に在り」とあり、又「愼、按するに、二首、黃山谷集に見え、題して、萬州太守高仲本宿、約レ游ニ岑公洞一、而夜雨連レ明、戲作と云ふ。按ずるに、山谷年譜、建中靖國辛巳、戎州より赦されて還り、三月、峽州に至り、萬州太守高仲本、約レ游ニ岑公洞一の詩を作り、同時に、又萬州下巖の二首あり。任淵の註に云ふ、山谷に磨崖の題名あり、高仲本酒を置く事を載す。年月、歷歷として考ふべく、その黃の作たること疑なし」といつて居る。

【詩意】肩輿を儀うて、岑公洞に往かうと思ふが、泥濘を衝き、險阻に傍うて、たどり行くのは、隨分難儀だと思はれる。これは、古しへの岑公が清境を鎖すが爲に、ことさらに、夜もすがら、春江の邊に雨を降り續かしめたのであらう。

篷窗高レ枕雨如レ繩。　篷窗、枕を高うして、雨、繩の如し、
恰似糟牀壓レ酒聲。　恰も似たり、糟牀、酒を壓するの聲。
今日岑公不レ能レ飲。　今日、岑公、飲む能はず、
吾儕猶健可レ頻傾。　吾儕、猶ほ健にして、頻りに傾くべし。

【詩意】篷窓の底に、枕を高くして寐て居ると、雨は繩の如く降つて來て、その音は、酒倉の棚で酒の搾られる聲の樣である。岑公、すでに示寂し、もとより、飲むこと能はざるべきも、吾輩は、猶ほ壯健にして、頻りに傾くべく、つまり、雨を聞くにつけて、酒を思ふ次第である。

送レ柳宜歸

柳宜の歸るを送る

折脚鐺中煨淡粥。　折脚鐺中、淡粥を煨り、
曲枝桑下飲離盃。　曲枝桑下、離盃を飲む。
書生不レ是南遷客。　書生、是れ南遷の客ならず、
魑魅無情須早回。　魑魅、無情、須らく早く回るべし。

【字解】〔一〕鐺中　鐺は鍋。
〔二〕曲枝　山谷集には、曲脛に作る。

【題義】柳は姓、宜は名、この詩は、柳宜といふ人の歸郷を送つたので、査初白が柳宜歸を送るとしたのは、まさしく誤讀である。なほ初白は「愼、案ずるに、黃山谷外集に見え、青紳史容の註に云ふ、崇寧二年、宜州に謫せられ、三年二月、洞庭を過ぎ、潭衡永桂を歷て、夏、貶所長沙に至る、卽ち潭州なり」とあつて、この詩は、山谷が長沙で作つたものであらうが、柳宜は、如何なる人か分

からぬ。

【詩意】脚の折れた鍋の中で薄い粥を暖め、枝の曲つた桑樹の下で、別れの盃を傾ける。君は、書生であるが、何も罪を得て南に貶謫される人ではないから、無情の魑魅も、禍害を加へずして、さッさと早く歸つたら善からう。

謝都事惠米

平生忍欲今忍貧。　平生、欲を忍び、今は貧を忍ぶ、
閉口逢人不少陳。　口を閉ぢ、人に逢ふも少しも陳べず。
俸薄身輕趙都事。　俸は薄く、身は輕し趙都事、
也能作意向詩人。　また能く意を作して詩人に向ふ。

【題義】査初白は「憤、案ずるに、亦た陳後山集に見え、題して、謝二憲臺趙史惠一米といひ、第三句、俸薄身清趙都史に作る」とある。すると、これは、都事か、都史か、はッきり分からぬが、兎に角、姓を趙といつた人である。

【詩意】平生、欲を忍んで居たが、今は貧を忍び、口を堅く閉ぢたまま、人に逢つても、少しも窮境を述べない。ここに趙都事は、俸給も少く、身分も輕いのに拘はらず、隨分氣を配つて、詩人たる予に向つて、米を惠まれたのは、まことに有り難いことである。

絶句三首

松柏蕭森溪水南。　松柏蕭森たり溪水の南、
道人只作兩團菴。　道人、只だ作る兩團菴。
市區收罷豚魚稅。　市區、豚魚の稅を收め罷め、
來與彌陀共一龕。　來つて彌陀と一龕を共にす。

【題義】この三首も、矢張、東坡の作でないが、それは、餘論の項中で述べることにする。

【詩意】松柏、蕭森として茂れる溪水の南に於て、道人は、二つの圓い菴を造つた。職務ある予は、毎日、市區に出て、豚魚の稅を徵收し、一日の仕事が濟むと、ここに來て、彌陀佛と一龕を共にして、ひとり行ひ澄まして居る。

【餘論】紀昀は「三首、氣韻ともに佳」といつて居る。

此身分付一蒲團。　この身、分付す一蒲團、

靜對蕭蕭竹數竿。　靜に對す蕭蕭竹數竿。
偶爲老僧煮茗粥。　偶ま老僧の爲に茗粥を煮むとし、
自攜修綆汲清泉。　自ら修綆を攜へて清泉を汲む。

【詩意】この身は、一つの蒲團に任かせて、兀然晏坐、靜に蕭蕭たる數竿の竹に對して、ぢッと眺めて居る。ここに、偶然、老僧に敬意を表して、茶粥を煮て進せやうと思ひ、自ら長い繩を攜へて清泉を汲みに出かけた。

【餘論】査初白は「愼、案するに、以上二首、淮海集第十一卷中に見ゆ。蓋し、少游、紹興の初に於て、黨籍に坐し、國史編修官より出でて杭州に通判たり。御史劉拯、復たその神宗實錄を增損せしを論じ、貶せられて處州の酒稅を監す。使者、風旨を承望し、過失を伺候するも、得べからず、謁告して佛書を寫すを以て罪となし、職を削つて、郴州に徙す。この二首、正に處州に貶せられし時の作、故に市區收稅、一龐蒲團の句あり」といつて居る。

天風吹月入欄干。　天風、月を吹いて欄干に入り、
烏鵲無聲夜向闌。　烏鵲、聲なく、夜、闌に向ふ。

織女明星來枕上。　織女明星、枕上に來り、
乃知身不在人間。　乃ち知る身の人間に在らざるを。

【詩意】天つ風は、月を吹いて欄干に入り、烏鵲は、聲だにせずして、夜は闌ならむとして居る。やがて織女と明星とが、近く枕上に來りしに因り、この身が浮世を脫出したことを知つた。

【餘論】査初白は「愼、案するに、右一首、亦た淮海集第十一卷中に見え、題して、四時四首、贈二道流一といひ、これ、その第二首なり、趙德麟の侯鯖錄、亦た天風吹レ月入二欄干一云云を以て、乃ち秦少游游仙詞四首の一とす」といつて居る。

睡起

柿葉鋪庭紅(一)顆秋。　柿葉、庭に鋪いて、紅顆秋なり、
薰爐(二)沈水度衣篝(三)。　薰爐、沈水、衣篝を度る。
松風夢與故人遇。　松風、夢に故人と遇ふ、
同駕飛鴻跨九州。　同じく飛鴻に駕して九州に跨る。

【題義】この詩は、睡醒めし後に作つたので、査初白は「愼、案ずるに、亦た黃山谷外集に見ゆ」

【字解】(一) 紅顆　柿の實を云ふ。(二) 薰爐　卽ち香爐。(三) 沈水　名香の名、前に沈香石の詩中に注して置いた。(四) 衣篝　說文に「篝は笭なり、衣を熏すべし」とあり、廣韻に「篝は籠なり」とある。

といつて居る。

【詩意】柿の霜葉は、落ちて庭に滿ち、柿の實は秋を送つて、赤く熟して居る。香爐には、沈水の名香をくゆらし、衣裳に焚きこめて居る。松風颯として吹き度る處、夢中に故人と遇ひ、飛ぶ雁に驚して、九州に跨づたのは、如何にも壯絶快絶の事であつた。

秋思、寄子由

秋思、子由に寄す

黄葉山川知晩秋。　黄葉山川、晩秋を知り、
小蟲催女獻功裘。　小蟲、女を催して功裘を獻ぜしむ。
老松閲世臥雲壑。　老松、世を閲して雲壑に臥し、
挽著滄江無萬牛。　滄江を挽著して萬牛なし。

【題義】査初白は「愼、案ずるに、亦た黄山谷内集に見ゆ」といつて居る。

【詩意】黄葉、山川に滿ちて、今しも、晩秋の季節、小蟲は、頻りにすだいて、早く衣を調製する樣にといつて、女どもを急き立てる樣である。老松は幾世をか閲して、雲立ち籠むる深谷に横はつて居る、しかし滄江の水を挽き上げやうとしても、萬牛の力がないから仕方がない。

【字解】〔一〕功裘　周禮の司裘に「季秋、功裘を獻じ、以て絅賜を待つ」とあつて、その註に「功裘は、卿大夫の服するところ」とある。

侯灘

侯灘

江邊皎皎過侯灘。　江邊皎皎、侯灘を過ぐ、
更上山腰看打盤。　更に山腰に上つて、打盤を看る。
百歲老人親擊鼓。　百歲の老人、親ら鼓を擊ち、
城中憂患不相干。　城中の憂患、相干せず。

【題義】水經に「漢水、又東して猴徑灘を逕す」とあつて、その註に「山に猿猴多く、危きに乘じて綴飲す、故に、灘、この名を受く」とあり、題に侯灘とある侯の字は、宜しく猴に作るべきであらう。又名勝志に「陝西漢中府鳳縣嘉陵江、縣北に在り、而して、東の斜谷河・紫金水、西の小峪河・紅崖河、南の東溝河・野羊河、ともに流れて之に注ぐ。その灘たる、羊乳といふ、又猴逕あり、又稍や遠くして石門灘あり」と見ゆ。次に、査初白は「愼、案ずるに、沈遼の雲巢集に見ゆ。按ずるに、遼、字は睿達、集中、贈二別子瞻一の詩あり、兩公同時の游好、故に沈の詩、訛して公の集に入る」とある。

【詩意】江邊の水皎皎たる處を經て、舟は猴灘を溯つて來たから、どこに碇泊するか、よく見屆けやうと思つて、山腰に登つた。すると、百歲の老人までが、太鼓を敲いて、勢をつけて居るので、こ

【字解】〔一〕打盤　諸家の註を缺いて何明さぬが、大方、俚語で、碇泊の義であらう。〔二〕擊鼓　轡流を上る時勢をつける爲にするものである。

こ峽中は、全くの別天地、城中の憂患とは、何等の交渉も無い處であるといふことが分かつた。

火星巖　火星巖

火星巖下石凌壁。　火星巖下、石、壁を凌ぎ、
殿上相忘止一僧。　殿上相忘る、止だ一僧。
莫問人間興廢事。　問ふ莫れ、人間興廢の事、
門前流水几前燈。　門前の流水、几前の燈。

【題義】宋の盧藏の永州三巖記に「永の東南、三巖相望む、火星巖は、亂石怪聳、後に山腹を瞰る。往時、黃冠師あり、その側に宅し、火星の像を塑し、人の爲に福を祈る、因つて名づく」とあり、査初白は「愼、案ずるに、亦た沈遼の雲巢集に見ゆ」といつて居る。

【詩意】火星巖下、亂石兀立して絕壁を凌ぎ、殿上には、唯だ一人の老僧が引き籠り、長しへに、世と相忘れて居る。人間興廢の事などは、問はずもあれ、門前には流水あり、几前には燈火あり、ここは、長しへに物外の別境である。

謝惠貓兒頭筍

長沙一日煨籧筍。　長沙、一日、籧筍を煨る、
鸚鵡洲前人未知。　鸚鵡洲前、人、未だ知らず。
走送煩公助湯餅。　走り送り、公を煩はして湯餅を助けしむ。
貓頭突兀鼠穿籬。　貓頭突兀として、鼠、籬を穿つ。

陳述古の詩中に注して置いた。

【題義】韓子蒼の陵陽集に「湖南に大竹あり、世に貓頭と號す」とあり、任淵の陳後山詩註に「潭州に貓頭兒筍あり」と見ゆ。又、査初白は「愼、案ずるに、黃山谷集に見え、本詩と同じからざる、凡そ三字、黃集較や勝れるを覺ゆ」といつて居る。

【詩意】長沙では、今しも皿に盛つた筍を燒いて食ふ時分に成つたが、黃姓の人たる予は、まだ知らずに居た。その筍を今日貰つたから、丁度善い折から、子供の生まれた祝の肴にすることが出來たので、貓頭の突兀たるは、鼠が籬を穿つて頭を出した位、まだ稚くて、至つて小さいものである。

【字解】〔一〕鸚鵡洲前人　黃祖を云ふ、山谷が同姓の故を以て用ひたのである。〔二〕煩公　この公は自ら指したので、杜牧の十歲青春不負公の公に同じであらう。〔三〕湯餅　子供の生まれた祝ひ、前に賀す

題淨因壁

淨因の壁に題す

瞑倚蒲團挂鉢囊。　瞑、蒲團に倚つて、鉢囊を挂け、
半窗疎箔度微涼。　半窗の疎箔、微涼を度る。
蕉心不展待時雨。　蕉心、展びずして時雨を待ち、
葵葉爲誰傾夕陽。　葵葉、誰が爲にか夕陽に傾く。

【題義】 査初白は「愼、按ずるに、山谷內集に見え、淨因の壁に題す、二首の一なり」とある。淨因は、高僧の名であらう。

【詩意】 日暮には、蒲團に倚りかかり、勸化に出て行く時に用ふる鉢囊を壁に懸け、半窓の簾は、疎にして、微涼が吹き度つて居る。芭蕉の心は、まだ展びずして時雨を待つて居るが、葵の葉は、常に日に向ひ、誰が爲に、夕陽に傾いて居るのであるか。

【字解】 〔一〕疎箔　箔は簾。

題淨因院

門外黃塵不見山。　門外の黃塵、山を見ず、
箇中草木亦常閒。　この中の草木、亦た常に閒なり。
履聲如渡薄冰過。　履聲、薄冰を渡つて過ぐるが如し、
催粥華鯨吼夜闌。　粥を催すの華鯨、夜闌に吼ゆ。

【題義】 査初白は「愼、案ずるに、前の一首を合せて、乃ち山谷の題淨因壁二絕句なり」とある。

【詩意】 門前には、黃塵が立ちこめて山を見ず、その中なる草木も亦た常に忘れられて居る。履の聲は、とぼとぼとして、薄氷を渡つて行くが如く、食時を報ずる鐘の聲は、眞夜中に鳴り響いて居る。

【字解】 〔一〕華鯨　山公註に、「東都賦、發鯨魚、鱉華鯨、薛綜の註、海島に大獸あり、蒲牢と名づく、蒲牢、鯨魚を畏る。鯨魚一擊、蒲牢輒ち大に吼ゆ。凡そ、鐘は聲なして大ならしめむと欲す、故に蒲牢を上に作り、これを擊つところのものを以て、鯨魚の狀となし、鐘に兼則の文あり、故に華鐘といふ」とある。

同景文詠蓮塘

塘上鉤簾對晚香。　景文と同じく蓮塘を詠ず
不知斜日已侵牀。　塘上、簾を鉤して晚香に對す、
江妃自惜凌波韈。　知らず、斜日の已に牀を侵すを。
長在高荷扇影涼。　江妃、自ら惜む凌波の韈、
長く高荷に在つて、扇影涼し。

【字解】 〔二〕江妃　郭璞の江賦に、江妃含嚬而擊節とあつて、その註に列仙傳を引いて「江斐の二女、出でて江濱に游ぶ、鄭交甫の挑むところのもの」とある。なほ、前に甘露寺彈琴の詩中に注して置いた。

〔三〕凌波韈　曹植の洛神賦に凌波微步、羅襪生塵とあつて、說文に「韈は足衣なり」とある。

【題義】 査初白は「愼、案ずるに、亦た黃山谷外集に見ゆ」といつて居る。

【詩意】塘上の小亭なる簾を卷き上げて、遲く咲き出た蓮花に對し、夕日斜に吟牀を侵すをも忘れて居る。江妃は凌波の襪を大切にすると見えて、いつまでも高い蓮葉の中に在つて、扇の影ばかり涼しげに見え、こちらへは歩み寄つて來ない。

【餘論】紀昀は「小巧にして俗に入らず」といつて居る。

竹枝詞

竹枝の詞

自過鬼門關外天。　鬼門關外の天を過ぎてより、
命同人鮓甕頭船。　命は同じ、人鮓甕頭の船。
北人墮淚南人笑。　北人、淚を墮して南人笑ふ、
青嶂無梯聞杜鵑。　青嶂、梯なく杜鵑を聞く。

【題義】査初白は「愼、按ずるに、一たび黃山谷集に見え、再び秦少游集に見ゆ」といひ、侯鯖錄にも少游の詩に作つてある。竹枝詞の意義及び其變遷に就いては、前に卷一に見えて居るから、ここには述べぬことにする。

【詩意】一たび鬼門關外の天を過ぎてより、船が人鮓甕に差しかかれば、生命さへ危い位。北方から來た人は、涙を落して居るが、南人は、流石に慣れて至つて平氣である。仰ぎ見れば、百丈の青嶂、梯なくして登るべからざる處を杜鵑の鳴き度るのが聞こえて居る。

【字解】〔一〕鬼門關　輿地廣記に「容州北流縣、句扇山あり、縣南三十里に在り、兩石相對して中闊きこと三十步、俗に鬼門關と號す」とある。〔二〕人鮓甕　名勝志に「巫峽の下に在り、蜀江の最も險なる處」とある。

寄歐叔弼

歐叔弼に寄す

昔葬衣冠今在否。　むかし衣冠を葬り、今在りや否や、
近來消息不須疑。　近來消息、疑ふを須ひず。
曾聞坦上逢黃石。　かつて聞く、坦上に黃石に逢ひしを、
久矣留侯不見欺。　久し、留侯の欺かれざる。

【題義】歐叔弼の歐は歐陽の略。歐陽叔弼、名は棐、修の第三子で、その小傳は、前に復次韻、彖寄二歐陽一の詩中に見えて居る。査註に「愼、案ずるに、四句は乃ち欒城集中、贈二蔡州壺公觀劉道士一の七言律の後半首なり。今、子由の集に據つて、左に全錄す。詩引に云ふ、元祐八年、曹煥、安陸より至り、予の爲に言ふ、淮西を過ぎて、壺公觀に入り、懸壺の木を觀るに、老死久し、環生孫棗無數、聞

【字解】〔一〕昔葬衣冠　史記封禪書に「黃帝の冢を橋山に祭る、兵を釋てて須ちく如くべし。上曰く、吾聞く、黃帝死せずと、今冢あるは何ぞや。或は對へて曰く、黃帝、すでに仙して天に上り、羣臣、その衣冠を葬る」とある。〔二〕坦上　前に和二蘇郎中一及び回先生過二湖州一の詩中に注して置いた。〔三〕留侯　卽ち張良、前に正輔既見和の詩中に注して置いた。

く、老道士劉道淵あり、年八十七、凡人に非ざるなりと。これに謁するに、神氣甚だ清く、能く言語す、細布の單衣を服し、縫補、殆んど遍ねし。煥、その意を問ふ。道淵悵然として曰く、これ故の潍西の守歐陽永叔の贈るところなり、世人、永叔が文詞に工に、辨論を善くし、忠信篤學なるを知るのみ。君、この人竟に何くより來るを知るか。われ公と夙契あり、且つ年を齊しうするなり。むかし、將に吾が州を去らむとするや、これを留めて以て別る、吾、これを服すること三十年、かつて破れて之を補ふ、未だ嘗て垢つくも浣はざるなり。比ろ嘗て其訊を得たり、吾、亦た此を去ること久しからずと。煥、これを聞いて、愕然測るなし、徐に其故を問ふ、皆答へずと。予、少にして兄子瞻と皆公に從つて游び、平生を究觀し、もとより嘗て公が神仙中の人、世俗の士に非ざるを疑ふなり。公、亦た嘗て自ら言ふ、むかし、謝希深・尹師魯・梅聖俞の諸人と同じく嵩高に游び、蘇書四大字を蒼崖絶澗の上に見る。曰く、神清之洞と、同游者に問へば、唯だ師魯、これを見るのみ。これを以て、亦た頗る自ら本と世外の人なるを疑ふ。今、道淵の言を聞くに、曩の意と合ふ。因つて、詩を作つて、以て公子柴叔弼に示す。その詩に曰く、

思レ潁求レ歸今幾時。布衣猶在二老劉詩一。龍章舊有二世人識一。蟬蛻惟應二野老知一。昔葬二衣冠一今在否。近傳音問不レ須レ疑。曾聞圯上逢二黃石一。久矣留侯不レ見レ欺。

云云と。この事の本末、かくの如し。今、序文及び前半首を截去し、人をして、これを讀んで、茫然解せざらしむ。謂はゆる此種の謬訛、向來註家の刻本、從つて、未だ勘正するものあらず、余に至つて、始めて之を發す、覽者亦た其苦心を識るべし」とある。しかし、ここでは、この儘で、兎に角、一通り、解釋して置くことにする。

【詩意】むかし、歐陽公の死後に於て衣冠を葬つたが、今でも殘つて居るか如何。近ごろの消息は、疑ふまでもなく、もとより實事である。圯上に於て、黃石公に逢つたといふは、かつて聞いたことで、張良は、決して欺かれず、現に其後穀城山下に於て黃石を拾つた。して見れば、歐公不死の說の如きも、決して浮泛の虛言ではあるまい。

和二黃龍清老一三首

黃龍の清老に和す　三首

萬山不レ隔中秋月。　萬山、隔てず中秋の月、
一雁能傳寄二遠書一。　一雁、能く傳へて遠書を寄す。
深密伽陀枯(二)戰筆。　深密伽陀、枯戰の筆、
眞誠相見問何如。　眞誠相見て、問ふ何如。

【題義】查註に「名勝志、黃龍山は、寧州の西一百八十里に在り、上に黃龍崇恩院あり、唐の乾寧中、

【字解】〔一〕深密伽陀　深密は解深密經の略、伽陀は諷誦の義。
〔二〕枯戰筆　戰筆は禿へたる筆蹟。

晦機禪師、法を元泉彥に得たり。かつて、神僧に遇ひ、謂つて曰く、ここを去つて東北し、洪に遇はば卽ち止まれ、龍に逢はば住まるべし、と。後、黃龍山に住し、禪侶雲集す。按ずるに、五燈會元、同時に黃龍に二淸あり、皆晦堂の法嗣、一は靈源の惟淸たり、一は草堂の善淸たりと。釋氏稽古略に云ふ、元祐六年、黃山谷、家艱に丁りて、黃龍山に館し、晦堂禪師祖心に從つて游び、草堂惟淸と尤も方外の契に篤し、云云と。草堂は、乃ち善淸、惟淸に非ざるなり」とあり、又「愼、案ずるに、三首、黃山谷集第二十卷に見え、釋氏稽古略を以て之を考ふるに確に是れ山谷の作」とある。

【詩意】萬山駢立すれども、中秋の月を遮らず、一雁能く傳へて、遠地よりの手紙を寄せて來る。しかし、深密經を諷誦する人の乾びた樣な震へた筆蹟では、十分に意志が通ぜず、本當に相見たならば、篤と問うて見たいと思つて居る。

風前橄欖星宿落。　風前の橄欖、星宿落ち、
月下桄榔羽扇開。　月下の桄榔、羽扇開く。
靜默堂中有相憶。　靜默堂中、相憶ふあり、
淸秋或遣化人來。　淸秋、或は化人をして來らしめむ。

【字解】〔一〕桄榔　廣志に「桄榔は、樹の大さ四五圍、長さ五六丈、その顚に葉を生ず、その子、穗を作し、その皮、綆を作すべく、水を得れば柔韌、皮下層ありて鞋の如し」とある。〔二〕化人　仙人に同じ。

【詩意】風前の橄欖の實は、星宿の如く落ち、月下の桄榔の葉は、羽扇の樣に開いて居る。この南徹の景色を眺めつつ、靜默堂下に於て、淸老を懷つて居るが、淸江の水は、ひよつと、化人に比すべき此僧を遣して來らしめることが有りはしまいかと思はれる。

騎驢覓驢眞可笑。　驢に騎して驢を覓む、眞に笑ふべし、
以馬喩馬亦成癡。　馬を以て馬に喩ふ、亦た癡を成す。
一天月色爲誰好。　一天の月色、誰が爲にか好き、
二老風流各自知。　二老の風流、各〻自ら知る。

「馬を以て馬の馬に非ざるに喩ふるは、馬に非ざるを以て馬の馬に非ざるを喩ふるに若かざるなり」とある。【三】二老　山谷と淸老とを併稱す。

【詩意】驢に乘つて居りながら、驢を覓むるは、卽心是れ佛なるを知らざるもので、眞に笑ふべく、馬を以て馬の馬に非ざるに喩ふるも、亦た癡愚の至である。一天の明色は、誰が爲に、さやけく澄んで居るか、二老は、もとより風流の人で、各自に之を知つて居る。

【字解】〔一〕騎驢覓驢　傳燈錄に「參禪に二病あり、一は是れ驢に騎して驢を覓む、一は驢に騎して下らず。卽心是れ佛を解せざれば、眞に是れ驢に騎して驢を覓むるなり」とある。〔二〕以馬喩馬　莊子に、

過土山寨

南風日日縱篙撐。　南風、日日、篙を縱にして撐へ、
時喜北風將我行。　時に喜ぶ、北風、われを將つて行くを。
湯餅一杯銀線亂。　湯餅一杯、銀線亂れ、
蕎麥如筯玉簪橫。　蕎麥は筯の如く、玉簪は橫ふ。

【題義】 査註に「南宋の人陳克の東南防守利便に云ふ、土山寨は、上元縣の東南三十里に在り、周圍四里、高さ二十丈。石季龍、將に海道に寇せむとす。蔡謨、統ぶるところの七千人、東、土山に至り、西、江乘に至り、八所を鎮守し、城壘凡そ十一と。又名勝志に云ふ、半山寺に近く、康樂坊に太傅の土山あり、史に云ふ、謝安、會稽東山に隱れ、因つて、此を築いて之に擬す、巖石なし、故に土山といふと。二說未だ孰れか是なるを知らず。愼、案ずるに、亦た山谷集第十九卷中に見ゆ」といつて居る。

【詩意】 南風は、日日篙を縱にして、舟を行らしめるが、北風が吹くと、吾を引き連れて都の方に歸ることが出來るかと思つて、時時喜ばしく思ふ。椀の餅餅の中に、銀線の亂るるは何であるかといへば、白よもぎは箸の如く、玉簪は橫はつて居て、この二つが、さう見えたのである。

【字解】 〔一〕 縱篙撐　篙に任かせて舟を行る。〔二〕 蕎麥　白よもぎ。〔三〕 玉簪　玉簪花の略、その蕾を指したのであらう。

跋姜君弼課冊

姜君弼の課冊に跋す

雲興天際。欻若車蓋。　雲は天際に興り、欻として車蓋の若し。
凝瞻未瞬。瀰漫霏雰。　瞻を凝らして未だ瞬かず、瀰漫して霏雰。
驚雷出火。喬木麋碎。　驚雷、火を出し、喬木、麋碎。
殷地熱空。萬夫皆廢。　地に殷し、空を蒸き、萬夫皆廢す。
霤綆四墜。日中見昧。　霤綆、四に墜ち、日中に昧きを見る。
移晷而收。野無完塊。　晷を移して收まれば、野に完塊なし。

【字解】 〔一〕 欻　忽ち。〔二〕 瀰漫　瀰は、廣韻に「目の童子なり」とあつて、卽ち眼睛。〔三〕 霏雰　晴き霧。〔四〕 麋碎　麋ぎ碎ける。〔五〕 霤綆　霤は水滴、それが繩の如く續く。〔六〕 移晷　晷は日影、時を移すに同じ。

【題義】 東坡の自註に「姜君は瓊州の人、己卯閏九月、來つて東坡に從學して儋耳に至り、庚辰三月方に瓊に還る」とあり、査註に「姜弼、字は唐佐、本集に見ゆ。詩話總龜、李德裕の文章論に云ふ、文章は當に千兵萬馬の如くなるべし、風恬に、雨霽れ、寂として人聲なし、と。黃夢升、兄の子庠の文に題して云ふ、子の文章、電擊雷震、雨雹忽ち止み、閃然泯滅、と。歐陽公の蘇子美を祭る文に云ふ、風雲變化、雨雹交も加はり、忽然揮斥、霹靂轟車、須臾にして霽止す。而して回顧すれば、山川草木、

萌芽を開發す、と。東坡、姜君弼の課冊に題して云云、亦た同一機括なり、と。愼、按ずるに、葛立方の韻語陽秋に云ふ、瓊州の進士姜唐佐、東坡、極めて之を愛し、贈るに詩を以てして曰く、滄海何曾斷二地脈一、白袍端合レ破二天荒一と。且つ之に告げて曰く、子、異日登科すれば、當に子の爲に此篇を成すべし、と。唐佐が廣州の計偕に預るに及び、汝陽を過ぎ、子由を見る。時に、東坡、すでに下世す。子由、因つて其篇を足成して曰く、

生二長茅間一有二異芳一。風流稷下古諸姜。適從二瓊管魚龍窟一。秀出二羊城翰墨場一。滄海何曾斷二地脈一。白袍端合レ破二天荒一。錦衣他日千人看。始信東坡眼力長。

唐佐、この年、省闈利あらず、錦衣の祝に負くあり。東坡、又かつて、唐佐の課冊に書して、雲興天際、欻若二車蓋一云云と、今、亦た集中に刻す。乃ち戯に劉夢得、楚望賦中の語を書す。按ずるに、楚望賦の全篇は、文苑英華第二百二十七巻中に載す」とあつて、もとより東坡の手筆ではない。

【詩意】雲が天際に起ると、忽ちにして、車の天蓋の如く、晴を凝らして、まだ瞬もせぬ内に、廣がつて、暗くなり、やがて、けたたましい雷の聲につれて、火が迸出し、喬木は粉微塵に碎け、地に響き、空を炙り、萬夫のいづれもが、へこたれて仕舞つた。雨垂れの繩は、四方に落ち、眞晝中でも暗い位。時を移さずして、雨が止めば、野には、全き土塊なく、すべて奇麗に均されて仕舞つた。姜君の文章は、丁度この雨の如きものである。

惠崇蘆雁

惠崇の蘆雁

惠崇煙雨蘆雁、
坐二我瀟湘洞庭一。
欲買扁舟歸去。
故人云是丹青。

惠崇の煙雨蘆雁、
われを瀟湘洞庭に坐せしむ。
扁舟を買うて歸り去らむと欲すれば、
故人云ふ是れ丹青と。

【題義】惠崇は詩僧で、兼ねて畫を善くし、前に春江晩景の題下に注して置いた。査初白は「愼、案ずるに、黄山谷集に見えて、題二鄭防禦畫夾一五首の一なり、宋文鑑第二十六巻、選詩中に入れ、亦た以て黄の作となす」とある。

【詩意】惠崇の畫いた煙雨蘆雁を觀ると、われをして、恍然、瀟湘洞庭の間に坐せしめる樣な想がする。そこで扁舟を買うて、歸り去らうとすると、故人は、大に驚いて、それは、畫に過ぎないのに、どうして、かばかり心を動かしたのかといつた。

【餘論】紀昀は「意、王季友の詩に本づき、しかも、韻高く、語簡に、青、藍より出づ」といつて居る。

和陶擬古九首

客居遠林薄。依牆種楊柳。
歸期未可必。成陰定非久。
邑中有佳士。忠信可與友。
相逢話禪寂。落日共杯酒。
艱難本何求。緩急肯相負。
故人在萬里。不復爲薄厚。
未盡鬻衣衾。時勞問無有。

【題義】 馮應榴の案に「蘇籀の雙溪集に云ふ、和陶詩擬古九首、亦た坡、公に代つて作る、と。公とは、卽ち子由を指すなり。籀は、子由の孫なり。言ふところ、當に妄ならざるべし。然れども、欒城後集は、子由の自ら編定するものに係り、而して、亦た此九首を載す。査氏、先生の集卷四十二に於て、すでに採附を經たり。今、彼を刪つて他集互見詩卷の末に附し、以て參考に備ふ」といつて居る。この卷中、これ以下の者は、王註・施註などにも見えなかつた者で、査初白、乃至馮應榴が合註を作るとき、その博洽を競うて、或本に見えたのを、その儘、ここに附載したので、純然たる東坡の手筆でないことは、辯を俟たず、且つ諸家の註を缺いて居るから、解釋は見合せて、唯だ訓讀だけを付けて置くことにする。

〔一〕

閉門不復出。茲焉若將終。
蕭然環堵間。乃復有爲戎。
我師柱下史。久以雌守雄。
金刀雖云利。未聞能斫風。
世人欲困我。我已長安窮。
窮甚當辟穀。徐觀百年中。

〔二〕

蕭蕭髮垂素。晡日迫西隅。
道人閔我老。元氣時卷舒。

門を閉ぢて復た出でず、茲に將に終らむとするが若し。
蕭然たり環堵の間、乃ち復た戎の爲にするあり。
わが師は柱下の史、久しく、雌を以て雄を守る。
金刀、利と云ふと雖も、未だ能く風を斫るを聞かず。
世人、われを困しめむと欲す、われ已に長く窮に安んず。
窮甚しく、當に穀を辟くべし、徐に觀る百年の中。

〔二〕

蕭蕭として、髮、素を垂れ、晡日、西隅に迫る。
道人、わが老を閔み、元氣、時に卷舒。

歲晚風雨交。何不完子廬。
萬法滅無際。方寸可久居。
將掃道上塵。先拔庭中蕪。
一淨百亦淨。物我皆如如。

〔四〕

夜夢披髮翁。騎麟下大荒。
獨行無與游。闊然入我堂。
高論何崢嶸。微言何渺茫。
我徐聽其說。未離翰墨場。
平生氣如虹。宜不葬北邙。
少年慕遺文。奇姿損昂昂。
衰罷百無用。漸以圓斲方。
隱約就所安。老退還自傷。

〔五〕

佛法行中原。儒者恥論茲。
功施冥冥中。亦何負當時。
此方舊雜染。渾渾無名緇。
治生守家室。坐使斯人疑。
未知酒肉非。能與生死辭。
熾哉吳閩間。佛事不可思。
生子多穎悟。德報豈吾欺。
時俾正法眼。一出照曜之。
誰爲邑中豪。勤誦我此詩。

〔六〕

憂來感人心。悒悒久未和。

歲晩くして風雨交はり、何ぞ子の廬を完うせざる。
萬法、滅して際なく、方寸、久しく居るべし。
將に道上の塵を掃はむとすれば、先づ庭中の蕪を拔け。
一淨、百も亦た淨、物我皆如如たり。

〔四〕

夜夢む披髮の翁、麟に騎して大荒より下る。
獨行、與に游ぶなく、闊然として、わが堂に入る。
高論、何ぞ崢嶸、微言、何ぞ渺茫。
われ徐に其說を聽くに、未だ離れず翰墨場。
平生、氣、虹の如く、宜なり、北邙に葬らず。
少年、遺文を慕ひ、奇姿、昂昂を損ず。
衰罷、百も無用、漸く圓を以て方を斲る。
隱約、安んずるところに就き、老退、還た自ら傷む。

〔五〕

佛法、中原に行はれ、儒者、これを論ずるを恥づ。
功は施す冥冥の中、亦た何ぞ當時に負かむ。
此方舊と雜染、渾渾として緇と名づくるなし。
生を治めて家室を守り、坐に斯人をして疑はしむ。
未だ知らず酒肉の非なるを、能く生死と辭す。
熾なるかな吳閩の間、佛事、思ふべからず。
子を生んで穎悟多く、德報、豈に吾を欺かむや。
時に正法眼をして、一たび出でて之を照曜せしむ。
誰か邑中の豪たる、勤めて我が此詩を誦せよ。

〔六〕

憂來つて、人心を感せしめ、悒悒久しうして、未だ和せず。

呼兒具濁酒。酒酣起長歌。
歌罷還獨舞。黍麥力誠多。
憂長酒易消。脫去如風花。
不悟萬法空。子如此心何。

〔七〕

杜門人笑我。不知有天游。
光明徧十方。咫尺陋九州。
此觀一日成。袞袞通法流。
竿木常自隨。何必返故邱。
老聃白髮年。青牛去西周。
不遇關尹喜。履跡誰能求。

〔八〕

粗田種紫芝。有根未堪採。
逡巡歲月度。太息毛髮改。
晨朝玉露下。滴瀝投滄海。
須芽忽長茂。枝葉行可待。
夜燒沈水香。持戒勿中悔。

〔九〕

海康雜蠻蜑。禮俗久未完。
我居近閭閻。願先化衣冠。
衣冠一有恥。其下胡爲顏。
東鄰有一士。讀書寄賢關。
歸來奉親友。跬步行必端。
慨然顧流俗。歎息未敢彈。
提提烏鳶中。見此孤翔鸞。
漸能衣裘褐。袒裼如惡寒。

兒を呼んで濁酒を具へ、酒酣にして長歌を起す。
歌罷んで、還た獨り舞ひ、黍麥、力まことに多し。
憂長くして、酒消え易く、脫去して、風花の如し。
萬法の空なるを悟らず、子、此心を如何。

〔七〕

門を杜ぢて、人、われを笑ふ、知らず、天游あるを。
光明、十方に徧ねく、咫尺、九州を陋とす。
ここに一日の成を觀れば、袞袞として法流を通ず。
竿木、常に自ら隨ひ、何ぞ必ずしも故邱に返らむ。
老聃、白髮の年、青牛、西周を去る。
關尹喜に遇はずんば、履跡、誰か能く求めむ。

〔八〕

田を粗いて紫芝を種ゑ、根あるも、未だ採るに堪へず。
逡巡として歲月度り、太息す毛髮の改まるを。
晨朝、玉露下り、滴瀝、滄海に投ず。
須芽、忽ち長茂、枝葉、行く〻待つべし。
夜燒く沈水の香、戒を持して、中ごろ悔ゆる勿れ。

〔九〕

海康は蠻蜑に雜はり、禮俗、久しうして未だ完からず。
わが居、閭閻に近く、願はくは、先づ衣冠に化せむ。
衣冠、一に恥あり、その下、胡する顏ぞ。
東鄰に一士あり、讀書、賢關に寄す。
歸來、親友に奉じ、跬步、行くこと必ず端。
慨然として流俗を顧み、歎息、未だ敢て彈せず。
提提たる烏鳶の中、この孤翔の鸞を見る。
漸く能く裘褐を衣、袒裼、寒を惡むが如し。

次晁无咎韻、閻子常攜琴入村

晁无咎の韻に次す。閻子常に琴を攜へて村に入る

士寒餓。
古猶今。
向來亦有子桑琴。
倚楹嘯歌非寓淫。
伯牙山高水深深。
萬世二壟一知音。
閻君七絃抱幽獨。
晁子爲之梁父吟。
天寒絡緯悲向壁。
秋高風露聲入林。
冷絲枯木拂蛛網。

士の寒餓、
古、猶ほ今のごとし。
向來、亦た子桑の琴あり、
楹に倚つて嘯歌、淫を寓するに非ず。
伯牙、山高くして水深深、
萬世二壟、一知音。
閻君、七絃、幽獨を抱き、
晁子、これが爲に梁父吟す。
天寒くして、絡緯、悲んで壁に向ひ、
秋高くして、風露、聲、林に入る。
冷絲枯木、蛛網を拂ひ、

十指巧能寫人心。
村村擊鼓如鳴鼉。
豆田見角穀成螺。
歲豐寒士亦把酒。
滿眼飣餖梨棗多。
晁家公子屢經過。
笑談與世殊臼科。
文章落落映晁董。
詩句往往如陰何。
閻夫子。
勿謂知人難。
使琴抑怨天不和。
明光晝開九門肅。

十指、巧に能く人心を寫す。
村村の擊鼓、鳴鼉の如く、
豆田には角を見、穀は螺を成す。
歲豐にして、寒士、亦た酒を把り、
滿眼飣餖、梨棗多し。
晁家の公子、屢ば經過、
笑談、世と臼科を殊にす。
文章落落、晁董に映じ、
詩句往往、陰何の如し。
閻夫子、
謂ふ勿れ、知人難しと、
琴をして抑怨せしめ、天和せず。
明光晝開いて、九門肅たり、

不レ令二高才牛下歌一。　高才をして牛下に歌はしめず。

【題義】馮應榴の案に「この詩、黄山谷集に見え、先生の作に非ず。但し、坡門酬唱集、この詩を載せ、以て東坡の次韻となす。今他集互見卷末に附入す」といひ、篇中缺字が八つばかりあつたが、山谷集に據つて塡補して置いた。

蘇東坡詩集　卷四十九　補編詩

古今體詩　七十首

戲足二柳公權聯句一　戲に柳公權の聯句に足す

宋玉對二楚王一、此獨大王之雄風也、庶人安得而共レ之、譏二楚王知レ己而不レ知レ人也、柳公權小子、與二文宗一聯句、有レ美而無レ箴、故爲足二成其篇一云。

【訓讀】宋玉、楚王に對ふ、これ獨り大王の雄風なり、庶人、安んぞ得て之を共にせむと。楚王の己を知つて人を知らざるを譏るなり。柳公權は小子、文宗と聯句す、美あつて箴なし、故に爲に其篇を足成すといふ。

人皆苦二炎熱一。我愛夏日長。　人、皆、炎熱に苦む、われは愛す夏日の長きを。
薰風自レ南來。殿閣生二微涼一。　薰風、南より來り、殿閣、微涼を生ず。
一爲二居所一移。苦樂永相忘。　一たび居の移すところとなり、苦樂、永く相忘る。
願言均二此施一。清陰分二四方一。　願はくは、言に此施を均しうし、清陰、四方に分たむ。

【題義】小序の意味は――むかし、宋玉が楚王に對へて、これは、獨り大王の雄風であつて、庶人は決して之を共にすることが出來ぬといつたが、それは、楚王が己のみを知つて人を知らず、全く同情を缺いて居たのを譏つたのである。唐の柳公權は、小倅の身分でありながら、文宗皇帝と聯句をして、四句の詩を作つたが、それを見ると、頗美のみあつて、箴規の意味がない、そこで、更に四句を足して一篇を成したといふのである。査初白は「愼、案するに、この詩、施氏原本、遺詩卷中に載するも、時地考ふるなく、以て詮次し難く、しばらく、その舊に仍る」といつて居る。元來この四十九、五十の兩卷は、補編詩と題し、いづれも、東坡の手筆には相違ないが、その年代等が分からず、編年の詩卷中に編入することの出來ぬものを一まとめにしたのである。なほ、査註に「按ずるに、藝苑雌黃に云ふ、文宗、柳公權と聯句す、東坡以爲へらく、美あつて箴なしと。因つて四句を續ぐ。然れども、洪駒父以爲へらく、公權、すでに箴規の意を含む、必ずしも續がずと雖も可なり、と。愚謂ふ、人臣その君に忠愛、自ら當に事に隨つて納誨し、以て主心を啓いて、下情に達せしむべし。凡そ隱躍含糊の語をなして、幸に一悟せむことを冀ふものは、皆諂諛の徒なり。先生の此詩、特に此一流の爲に發し、偶ま公權を借りて質的となすのみ。嚴氏の說、取るに足らざるなり」とあり、馮應榴の案に「淳南詩話に載す、呂希哲曰く、公權の詩、蓋し、文宗、廣厦の下に居て、路に喝死あるを知らざるを謂ふなり、と。洪駒父・嚴有翼、皆以て然りと爲す」といつて居る。

【詩意】人は皆炎熱に苦んで、弱り切つて居るが、われは、夏日の長きを愛する。薰風が南から來て、宮殿の中に微涼を生ずるのは、まことに心持の善いものである。しかし、居は氣を移すといふ通り、九重の尊位に居れば、いつしか、その氣になつて、從前の苦樂は、すッかり忘れて仕舞ふ。願はくは、この微涼を偏頗なく人人に施し、清き木陰を四方に分ち、人も、亦た我と同じく、快き樣に、涼しくして遣りたいものである。

【餘論】紀昀は「この一段の道理を存するは可、詩は則ち未だし」といつて居る。

送別

鴨頭春水濃如染。
水面桃花弄春臉。
衰翁送客水邊行。
沙襯馬蹄烏帽點。
昂頭問客幾時歸。
客道秋風黃葉飛。

送別

鴨頭の春水、濃かにして染むるが如く、
水面の桃花は、春臉を弄す。
衰翁、客を送つて水邊に行く、
沙は馬蹄に襯して、烏帽に點ず。
頭を昂げて、客に問ふ、幾時か歸る、
客は道ふ、秋風、黃葉飛ぶと。

繫馬綠楊開口笑。　馬を綠楊に繫いで、口を開いて笑ふ、
傍山依約見斜暉。　山に傍うて、依約、斜暉を見る。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】鴨の頭の色なせる春の水は、濃かにして染むるが如く、水面の桃花は、咲き矜つて、春の色香を弄して居る。この時、老翁は、客を送らむが爲に、水邊を歩すると、沙は馬蹄に黏著し、飛び上ると、烏帽にも振りかかる。頭を昂げて、舟中に居る客に向ひ、何時歸つて來るかといふと、客が答へて、いづれ、秋風吹きすさんで、黄葉の飛ぶ頃であらうといつた。そこで、乘つて來た馬を綠の柳に繫ぎ、口を開いて快げに笑ひつつ、山に傍うて薄れゆく夕日を眺めて居た。

【餘論】紀昀は「前四句は是れ詩餘」といつて、その調の輕浮なることを譏つて居る。

寄周安孺茶

大哉天宇內。植物知幾族。
靈品獨標奇。迥超凡草木。
名從姬旦始。漸播桐君錄。
賦咏誰最先。厥傳惟杜育。
唐人未知好。論著始於陸。
常李亦清流。當年慕高躅。
遂使天下士。嗜此偶于俗。
豈但中土珍。兼之異邦鬻。
鹿門有佳士。博覽無不矚。
邂逅天隨翁。篇章互賡續。
開園頤山下。屏跡松江曲。
有興卽揮毫。粲然存簡牘。
伊予素寡愛。嗜好本不篤。
粤自少年時。低徊客京轂。
雖非曳裾者。庇蔭或華屋。
頗見紈綺中。齒牙厭粱肉。

周安孺に茶を寄す

大なるかな天宇の內、植物、知る幾族。
靈品、ひとり奇を標し、迥かに超ゆ凡草木。
名は姬旦より始まり、漸く播く桐君の錄。
賦咏、誰か最も先なる、厥傳は唯だ杜育。
唐人、未だ好むを知らず、論著、陸に始まる。
常李、亦た清流、當年、高躅を慕ふ。
遂に天下の士をして、これを嗜みて、俗に偶せしむ。
豈に但だ中土の珍たるのみならむや、これに兼ねて異邦に鬻ぐ。
鹿門に佳士あり、博覽、矚せざるなし。
天隨翁に邂逅し、篇章、互に賡續。
園を開く頤山の下、跡を屏く松江の曲。
興あれば、卽ち毫を揮ひ、粲然として、簡牘を存す。
伊れ、予、素より愛寡く、嗜好、本と篤からず。
ここに少年の時より、低徊、京轂に客たり。
裾を曳くものに非ずと雖も、庇蔭、或は華屋。
頗る見る紈綺の中、齒牙、粱肉を厭ふ。

小龍得屢試。糞土視珠玉。
團鳳與葵花。碔砆雜魚目。
貴人自矜惜。捧玩且緘櫝。
未數日注卑。定知雙井辱。
于茲事研討。至味識五六。
自爾入江湖。尋僧訪幽獨。
高人固多暇。探究亦頗熟。
聞道早春時。攜籯赴初旭。
驚雷未破蕾。采采不盈掬。
旋洗玉泉蒸。芳馨豈停宿。
須臾布輕縷。火候謹盈縮。
不憚頃間勞。經時廢藏蓄。
糅筒淨無染。箬籠勻且複。

小龍、屢ば試みるを得、糞土、珠玉を視る。
團鳳と葵花と、碔砆、魚目に雜はる。
貴人、自ら矜惜、捧玩、且つ櫝を緘す。
未だ數へず日注の卑しきを、定めて知る雙井の辱。
ここに、研討を事とし、至味、識る五六。
爾かく江湖に入つてより、僧を尋ねて幽獨を訪ふ。
高人、もとより多暇、探究、亦た頗る熟す。
聞くならく、早春の時、籯を攜へて、初旭に赴く。
驚雷、未だ蕾を破らず、采采、掬に盈たず。
旋つて、玉泉に洗うて蒸し、芳馨、豈に停宿。
須臾にして、布、縷を輕くし、火候、謹んで盈縮。
憚らず、頃間の勞、時を經て藏蓄を廢す。
糅筒、淨、染むなく、箬籠、勻、且つ複。

苦畏梅潤侵。暖須人氣燠。
有如剛耿性。不受纖芥觸。
又若廉夫心。難將微穢瀆。
晴天敞虛府。石碾破輕綠。
永日遇閒賓。乳泉發新馥。
香濃奪蘭露。色嫩欺秋菊。
閩俗競傳誇。豐腴面如粥。
自云葉家白。頗勝中山醁。
好是一杯深。午窗春睡足。
清風擊兩腋。去欲凌鴻鵠。
嗟我樂何深。水經亦屢讀。
子咤中泠泉。次乃康王谷。
蟆培頃曾嘗。餅罌走僮僕。

苦に畏る、梅潤の侵すを、暖は須らく人氣燠すべし。
剛耿の性の如きあり、受けず、纖芥の觸るるを。
又、廉夫の心の若く、微穢を將て瀆し難し。
晴天、虛府敞たり、石碾、輕綠を破る。
永日、閒賓に遇ひ、乳泉、新馥を發す。
香、濃かにして蘭露を奪ひ、色、嫩にして秋菊を欺く。
閩俗、競うて傳誇し、豐腴、面、粥の如し。
自ら云ふ葉家の白、頗る勝る中山の醁。
好し是れ、一杯深く、午窗、春睡足れり。
清風、兩腋を擊ち、去つて鴻鵠を凌がむと欲す。
嗟す、我、樂、何ぞ深き、水經、亦た屢ば讀む。
子は咤す、中泠の泉、次は乃ち康王谷。
蟆培、頃ろ曾て嘗む、餅罌、僮僕を走らす。

如今老且嬾。細事百不欲。
美惡兩俱忘。誰能强追逐。
薑鹽拌白土。稍稍從吾蜀。
尙欲外形骸。安能徇口腹。
由來薄滋味。日飯止脫粟。
外慕既已矣。胡爲此羈束。
昨日散幽步。偶上天峯麓。
山圃正春風。蒙茸萬旂簇。
呼兒爲招客。采製聊亦復。
地僻誰我從。包藏置廚簏。
何嘗較優劣。但喜破睡速。
況此夏日長。人間正炎毒。
幽人無一事。午飯飽蔬菽。

今の如き、老且つ嬾、細事、百、欲せず。
美惡、兩つながら俱に忘る、誰か能く强ひて追逐。
薑鹽、白土を拌し、稍稍、吾が蜀よりす。
尙ほ形骸を外にせむと欲す、安んぞ、能く口腹に徇はむ。
由來、滋味を薄しとし、日飯、止だ脫粟。
外慕、すでに止む、胡すれぞ此に羈束。
昨日、幽步を散じ、偶ま上る天峯の麓。
山圃、正に春風、蒙茸、萬旂簇る。
兒を呼んで、爲に客を招く、采製、聊か亦た復す。
地僻にして、誰か我に從はむ、包藏、廚簏に置く。
何ぞ嘗て優劣を較べむや、但だ喜ぶ、睡を破るの速なるを。
況んや、此夏日の長き、人間、正に炎毒。
幽人、一事なく、午飯、蔬菽に飽く。

困臥北窗風。風微動窗竹。
乳甌十分滿。人世眞局促。
意爽飄欲仙。頭輕快如沐。
昔人固多癖。我癖良可贖。
爲問劉伯倫。胡然枕糟麴。

困臥す北窗の風、風、微にして窗竹を動かす。
乳甌、十分滿つ、人世、眞に局促。
意爽に、飄として仙せむと欲す、頭輕くして、快、沐す「るが如し。」
昔人、もとより癖多し、わが癖、良に贖ふべし。
爲に問ふ、劉伯倫、胡ぞ然かく糟麴に枕せむ。

【字解】【一】天字内　世界の中。【二】幾族　幾種に同じ。【三】絕且　茶は初めて爾雅に見え「槚、苦茶」とある、爾雅は周公の著作と稱せられ、絕且は周公の姓名。【四】桐君　桐君藥錄に「巴東に眞香者茶あり、煎飲すれば、人をして眠らざらしむ」とある。【五】杜育　育は當に毓に作るべし、晉の杜毓の荈賦に、煥如＝積雪＝、燁若＝春敷＝とある。【六】始於陸　雲溪友議に「陸羽、字は鴻漸、唐の人、茶經三卷を著し、茶具二十四事を造る。時に茶を煑ぐもの、陸羽を以て茶神となす」とある。【七】常李　蘇註に「唐書陸羽傳、羽、茶を嗜み、經三篇を著す。常伯熊といふものあり、羽の論に因つて、復た茶の功を著す。御史大夫李季卿、江南に宣慰たり、伯熊の善く茶を煮るを知り、これを召す。伯熊、器を執つて前む。季卿、爲に再び杯を舉ぐといふ、と。按ずるに、先生の詩、云ふところ、常李亦清淡、正に陸羽傳中の事を用ふ、施氏新本、補註、妄りに常袞・李德裕・李約の事を引く、殊に支離に屬す、特に最正を爲す」とある。【八】偶子俗　俗に從ふの意。【九】異邦霜　國史補に「常魯公、西蕃に使し、茶を帳中に煮る。書賛、何物かと問ふ。魯公曰く、烦を滌ひ、湯を滌す、謂はゆる茶なり。書賛曰く、われ此にも亦た之ありと。命じて之を出さしめ、以て指示して曰く、これは蒙州の者、これは舒州の者、これは顧渚の者、これは蘄門のもの、これは昌明のもの、これは過湖のもの」とある。【一〇】鹿門有佳士　唐書に「皮日休、字は襲美、襄陽の人、詩文を以て著はる、鹿門山中に隱れ、自ら間氣布衣と號し、華亭の陸龜蒙と友とし善し、陸、天隨子と號す」とあり、山公註に「松陵集、皮日休、茶人の詩あり、云ふ、生＝于顧渚山＝、老＝于浸石塢＝、陸龜蒙の詩に云ふ、且共瀹＝草

盧仝「何勞頻〻斟酒」とあり、套註に「按するに、松陵集、皮日休、詠〻茶十首、寄〻陸魯望〻あり、魯望亦た和詩あり」と見ゆ。【二】 頃山　名勝志に「宜興縣の東南に在り、靈洞諸峰に連つて蜀山に屬す」とある。【三】 松江曲　唐書陸龜蒙傳に「松江の甫里に居る」と見ゆ。【三】 京鋌　京師鋌鋌の下。【四】 曳裾者　漢書都陽傳に「何王の門か、長裾を曳くべからざらむや」とある。【五】 小龍團茶の名。【六】 團鳳　同上。【七】 蘂花　北苑貢茶錄に「蜀蘂・花樹等の名あり」と見ゆ。【八】 硎硅雜魚目　韓詩外傳に「魚目、珠に似たり」とあり、論衡に「珠樹魚目は、眞珠に非ざるなり」とある。【九】 目注　下の雙井と共に、名茶の產地、前に和〻錢安道〻の詩中に注して置いた。【一〇】 揃瓢　瓢は茶摘の籠。【一一】 趙初旭　東溪試茶錄に「凡そ茶を採る、必ず晨興を以てし、日出を以てせず。日出で、露晞けば、茶鮮明ならず」とある。【一二】 鷺雪　茶譜に「蒙山の中頂を上淸峰といふ、茶、最も得るに艱む、實の厚を發するを俟つて之を採る」とあり、若溪漁隱叢話に「北苑の官焙、茶を造る、常に驚蟄後一二日に在り、工を興して採摘す、この時、茶芽すでに將に一槍ならむとす、蓋し、關中地暖かなること、かくの如し」とあり、東溪試茶錄に「建溪の茶、歲多暖なれば、驚蟄十日、即ち芽ぐむ。歲多寒なれば、驚蟄五日、はじめて發す」とある。【一三】 不盈抱　前に周敦授索〻枸杞〻の詩中に注して置いた。【一四】 玉泉蕊　東溪試茶錄に「これを漂へば必ず潔、これを蒸せば、必ず香しく、これを火せば必ず良、一たび、その度を失へば、ともに茶病たり」とある。【一五】 絮筒　漆塗の筒。【一六】 箬籠　竹籠、茶錄に「茶を藏する、翦葉に宜しくして溫燥を喜ぶ、故に敎藏の家、翦葉を以て封裹し、焙中に入る、兩三日、一次、火を用ひ、常に人體の如く溫溫、然れども、以て潤を禦ぐ」とある。【一七】 梅潤　梅雨中の潤氣。【一八】 虛府　府は屋敷。【一九】 石碾　石臼。【二〇】 乳泉　建寧志に「鳳凰山に龍焙泉あり、宋時、茶を貢す、この水を取つて之を瀹ふ、その蕊は、卽ち北苑」とある。【二一】 面如粥　東溪試茶錄に「壓源茶は、山陰に生ず、その味甘香、その色青白、水を受くるに及んで、淳淳光澤、これを冷粥面と云ふ、その面を視れば、煥散して粟の如し」とある。【二二】 葉家白　學林新編に「茶の佳品、その色白、もしくは碧綠の者、皆常品なり」とあり、東溪試茶錄に「建茶の名、七あり、一を白葉茶といふ。近歲に出づ、芽葉、紙の如し、民間以て茶瑞となす。壓源の火窠に出づるもの六、葉仲元・葉世萬・葉世榮・葉勇・葉世積・葉相、壓源嶺下に出づるもの一、葉務滋・西頭に出づるもの二、葉剛・葉監。壓源の後坑に出づるもの一、葉久。壓源嶺根に出づるもの三、葉公・葉品・葉居。皆葉家を以て名を著はす」とある。【二三】 子陀中泠泉　陀は詫と通ず、ほこる。中朝政事に「李德裕、廊廊に居るの日、親知あり、使を京口に奉ず。李曰く、還る日、金山の下、揚子江中泠の水一壺を取り置いて來れ、と。その人、これを忘る。舟、石頭城を上つて、方に憶及し、一瓶を汲み、京に歸つて之を獻ず。李飲んで後、異常を歎評して曰く、江南の水味、頃歲に異なるあり、これ頗る建業石頭城下の水に似たり、と。その人、過を謝して敢て隱さず」とある。【二四】 康王谷　南康記に「谷簾泉は、府城の西に在り、泉、水簾の如し。巖に布いて下るもの、三十餘淵。陸羽、その茶を品して、天下第一となす」とあり、廬山記に「康王谷、楚の康王照、秦の王翦に窮められて此に匿る」とあり、桑喬山の磵に「康王谷中に在り、故に谷簾と名づく」とある。【二五】 蝦蟆口腹　口腹の食慾の爲に苦勞する。【二六】 脫粟　上の殼だけを搗き取つた米、前に人日題〻城南〻及び和〻陶飲酒〻の詩中に注して置いた。【二七】 天華　馮應檜の案に「未だ何の地なるかを知らず」とある。【二八】 萬旗　旗は卽ち旗、張文新の煎茶記に「槍を粉とし、旗を末とし、蔡蘭薪桂」とあり、茶譜に「蘄州の團黃茶、一旗二槍の說あり、一葉二芽を云ふなり」とある。【二九】 厨盦　臺所に在る竹製の容器。【三〇】 劉伯倫　名は伶、酒德頌を作る。【三一】 枕糟麴　酒德頌に「奮〻糟丘、枕〻麴糵〻、無〻思無〻慮、其樂陶陶」とある。

【題義】 周安孺は失考。この詩は、茶を其人に寄せるに就いて、爲に賦して添へたのである。

【詩意】 大なるかな、この廣き世界の中に於て、植物は、幾種あるか知らぬが、茶は靈品として、ひとり、その奇を標し、はるかに、凡庸の草木を超絕して居る。茶の名は、はじめて、周公旦の作つた爾雅に見え、その後、桐君の藥錄に播布したが、これを賦詠したものは、誰が第一であるかといへば、相傳へて、晉の杜毓だといつて居る。唐人は未だ茶を好むことを知らなかつたが、これを論著したるは、陸羽の茶經に始まり、常伯熊・李季卿等、これを愛好せしものは、皆一代の淸流であつて、その當時、陸羽の高躅を慕ふものであつた。そこで、天下の士をして、これを嗜んで、世俗に從はしむる

樣になり、ただ中土の珍として、大切にしたのみならず、併せて、遠き異境にも鬻いだことがある。ここに鹿門山中に、佳士の皮日休といふものがあつて、博覽にして、見ざるところなく、偶然、天隨と號する陸龜蒙に邂逅し、篇章を以て互に唱和した。その皮日休は、園を頤山の下に開き、陸龜蒙は、跡を松江の邊に屏け、興動けば、筆を揮ひ、その文字は、粲然として、簡牘に殘つて居る。予は、もとより愛するところ少く、嗜好も本と篤くはなく、ここに少年の時から、低徊して京師輦轂の下に客となつて居たので、裾を王門に曳くものではないが、往往にして、華屋に居る公卿の庇蔭を得たことがある。そこで、紈綺を著かざれる人人の中に、自己を發見することもあつて、齒牙は、粲肉の美味に飽き、小龍團の如き名茶も、數ば試用したから、世間では珠玉の如く珍重するものをも、糞土視したことがあるし、團鳳と葵花との如きも、魚目の中に、瓴砆が交つて居る位にしか思はない。抑も茶の名品に就いては、貴人輩が、自然大切にして、捧玩の後は櫃の中に入れ、堅く封をして置く位、日注の產は、下賤にして算するに足らず、雙井のは、唯だ其名を辱むるに過ぎぬ。ここに於て、久しく研究探討した爲に、茶の至味に就いて、十の五六を識別する樣になつた。それから、都を出でて、江湖に入つてより、僧を尋ねて、幽獨の境を訪ひ、又高尙の人士は、もとより、閒暇多く、從つて、その探究も、餘程熟して居るとのことで、さういふ人からも、色色聞き傳へたことがある。その話に據ると、早春の候、茶かごを攜へて、朝日の出る前に、茶の葉を摘みに出かける。折から、驚雷、未だ芽を破らざるが故に、これを摘んでも、なかなか兩手に一ぱいといふ程に成らぬ。その摘んだばかりの若い芽を奇麗な清泉を以て洗つた上に、一蒸し蒸すと、芳ばしき匂は、決して無くならない。しばらくして、荒い布で、これを吸ひ取ることにし、火の加減を注意し盈縮して之を焙じ、そこで、暫時の骨折を憚らず、やがて、すッかり出來上るので、時を經れば、特に蓄藏するにも及ばぬ樣になる。ただ漆の筒は、淨潔にして汚染せざるを要し、竹籠は新らしくして且つ二重になつて居らねばならぬ。最も畏るるは、梅雨時分、濕氣の侵すことで、その時は、人工を以て之を暖めねばならぬ。茶の性たるや、剛耿にして、すこしも、外氣の接觸することを許さず、又廉夫の心の如く、すこしの汚穢を以ても瀆してはならぬ。晴天の日、からりとした屋敷の中に在つて、石臼で、綠色なせる其葉を搗り潰し、日長の折から、ゆッくりして居る客でもあると、新鮮なる水を以て之を煮て、新しい芳香を發せしめる。その香氣は、濃かにして、蘭の花をも奪ふべく、色は若若しくて、秋菊をも壓倒する位。閩中の風俗として、競うて、茶の佳品を傳へ誇り、その豐腴なるものは、水を受けると、淳淳たる光澤を發し、その面は粥の如くである。葉家の白と稱するものは、佳品中の最上なもので、中山の酴酒にも勝つて居るといはれ、午窓春睡、方に足れる時、試に一杯を飲むと、清風習習として、兩腋の間に吹き起り、去つて、鴻鵠を凌いで、天上を飛び度る樣な心持がする。あゝ、我が樂は、茶を飲むに至つて、殊に深く、茶の爲に、水を吟味する處から、水經も、數ば讀んだことがある。君は、中泠

の泉を誇るが、なる程、御尤もで、次は卽ち康王谷。蝦蟆培の水も、ある時、試みたことがあつて、童僕を走らし、わざわざ瓶を與へて、汲んで來させた。頃ろ、予は、年を取つて、萬事疎懶なる爲め、こまごました事は、決して欲せず、美惡兩つながら忘れ、何人か能く强ひて追逐すべき。そこで、生薑と鹽とを白土に攪きませて、漸漸、わが獨中でする樣にし、到底、眞味を盡さぬけれども、兎に角、茶を沸かし、もと形骸を外にせむと欲するのが主であつて、いかで、口腹に徇づて、その味を兎や角いふべき。由來、滋味を薄しとし、日ごとに食ふのは、荒搗の米ばかり。すでに、外慕の念を絕つた上は、どうして、その爲に纏束を受くべきか。昨日は、散歩の序に、偶然、天峰の麓に差しかかると、山邊の畑地には、春の風吹き度り、茶の芽が、もやもやとして簇生して居た。そこで、兒を呼んで、客を招かしめ、その茶を摘んで、早速調製して試飲した。何分、邊鄙の地で、誰も予の爲に世話をして臭れるものなく、その作つた茶は、しかと包んで臺所の戸棚の中に仕舞つて置くだけのこと、如何にして、その優劣を較ぶべきか、但だ睡を破ることの速なることを喜ぶだけである。況んや夏の日の長きに際し、この世には、炎毒の氣、漲るものから、幽人は一事なく、晝の飯には、野菜に飽き、食ふものは、すべて、あッさりしたものばかり、それから、北窓の下に困臥すると、微風時に來つて、窓外の竹を搖すつて居る。その時、茶瓶は、丁度一ぱいで、折よく沸えたぎつて居て、人世の眞に局促せるに似もやらず、これを飲むと、心意爽然、飄飄として將に仙せむとするが如く、頭は輕く、その快きことは、髮を洗つた時のやうである。むかしの人は、もとより癖が多いが、わが茶を好む癖の如きは、まことに赦すべきものであらう。かの劉伯倫は、酒を好んだが、何が故に麴に枕し、糟に藉するとまで云つたか、これに較べると、もとより、物の數でもない。

【餘論】紀昀は「これ東坡第一の長篇、佳作に非ずと雖も、然れども、一氣滔滔、冗ならず、雜ならず、自ら是れ難事」といつて居る。

顏闔

顏闔古有道。躬耕自衣食。
區區魯小邦。不足隱明德。
軺車來我門。聘幣繼金璧。
出門應使者。耕稼不謀國。
但疑誤將命。非敢憚行役。
使者反錫命。戶庭空履跡。
薄俗徇世榮。截趾履之適。

顏闔は、古しへの有道、躬耕、自ら衣食す。
區區たる魯の小邦、明德を隱すに足らず。
軺車、わが門に來り、聘幣、金璧に繼ぐ。
門を出でて、使者に應じ、耕稼、國を謀らず。
但だ疑ふらくは、誤つて命を將ゆ、敢て行役を憚るに非ず。
使者、反つて命を錫ふ、戶庭、空しく履跡。
薄俗、世榮に徇ひ、趾を截つは履の適。

所重易所輕。隋珠彈飛翼。重んずるところ、輕んずるところに易ふ、隋珠、飛翼を彈ず。
伊人畏照影。獨往就陰息。伊人、影を照らすを畏る、ひとり往いて陰に就いて息ふ。
鼎俎薦忠賢。誰能死燔炙。鼎俎、忠賢を薦め、誰か能く燔炙に死せむ。
念彼藏皮冠。安知獲堯客。念ふ、彼が皮冠を藏するを、安んぞ知らむ堯客を獲たるを。

【字解】〔一〕狐圉　題義の項に注して置く。〔二〕軺車　小車、又四方遠望の車ともいふ。〔三〕聘幣　招聘の幣物。〔四〕截趾　趾を切る、らくに還入ること。〔五〕隋珠　莊子に「今且つ此に人あり、隋侯の珠を以て千仞の雀を彈すれば、世必ず之を笑はむ。これ何ぞや、その用ふるところのもの重くして、要するところのもの輕ければなり」とある。〔六〕照影　莊子に「人、影を畏れ、跡を惡んで、これを去つて走るものあり。足を舉ぐること、愈よ數ばにして、跡、愈よ多し。陰に處つて、以て影を休め、靜に處つて跡を息むるを知らず、愚も亦た甚し」とある。〔七〕燔炙　介子推が燔死せしことをいふ。〔八〕堯客　南史明僧紹傳に「禮徵すれども至らず、江乘の攝山に住す。高帝、慶符に謂つて曰く、卿の兄、その事を高尚にす、亦た堯の外臣、朕、幽人を夢想す、もとより、すでに勤む、謂はゆる桎梏絶え、風雲通ず、と。仍つて、竹根如意、菊籜冠を賜ふ」とある。

【題義】顏闔の事は、莊子に見え「魯君、顏闔は得道の人たるを聞くや、人をして、幣を以て先んぜしむ。顏闔、陋閭を守り、苴布の衣にして、自ら牛を飯す。魯君の使者至る、顏闔自ら之に對ふ。使者曰く、これ顏闔の家か。顏闔對へて曰く、然り、と。使者、幣を致す。顏闔曰く、聽く者、謬つて使者の罪を還さむことを恐る。これを審にするに若かず、と。使者、還つて之を反審し、復た來つて之を求むれば、得ざるのみ」とある。なほ、この詩に就いては、馮應榴の案に「山谷外集、亦た顏闔の詩あり、前十二句、先生の詩と大略同じ、今全錄して以て考證に資す。

顏闔無事人。躬耕自衣食。翩翩許公子。要我從事役。輕軒來在門。驅馬先拱璧。出門應使者。
隱上不謀國。心知誤將命。非敢憚行役。使人返錫命。戶庭空履跡。中隨衛侯書。起作太子
客。誰能明吾心。君子蘧伯玉。

【詩意】顏闔は、古しへの有道の者であつて、躬ら耕作して衣食して居た。區區たる魯の如き小邦では、その明德を隱すことが出來ず、その名は、いつしか世に聞こえ、やがて、魯君から招聘せられ、小車が其門に來て、黃金白璧に次いで、聘幣を贈つた。すると、顏闔は、門に出でて使者に答へ、自分は、耕稼を以て活を爲すものであつて、國家の御相談に與るべきものではない。もしかすると、間違つて、命を傳へられたのかも知れない。自分は、決して、行役を忌み嫌ふものではないといつた。そこで、使者は、一先づ還り、君命を確めてから、出直して見ると、顏闔は、すでに何處かへ逃れ去つて、戶庭の間には、唯だ履の跡が殘つて居るだけであつた。澆季の薄俗では、世上の榮華に從ふを旨として居て、足を忘れることが、履の適であることを知らず、又重んずべきものを以て輕んずべきものに換へ、たとへば、隋侯の珠を以て飛ぶ雀を彈き落さうとして居る樣なものである。ここに、人あ

つて、その影を照らされることを畏るるならば、ひとり往つて、物かげに就いて休息して居れば善いのである。無殘にも、忠賢の人を以て、鼎俎の間に薦める世の中で、誰か耿守の節を守つて、山中に燔死するものがあらうか。かの皮冠に身を匿して居れば、如何にして、堯の外臣たることを知るべき。總じて、この世に在つて、その生を全うせむとならば、韜晦して人に知られぬ樣にするのが、第一に肝要である。

【餘論】紀昀は「語意凡近」といつて居る。又堯客に就いて「堯、當に逃に作るべし」といつて居るが、註釋の通りで、意義は大抵疏通する樣である。

夢雪

殘杯失春溫。破被生夜悄。
開門萬山白。俯仰同一照。
雖時出圭角。固自絕瑕竅。
兒童勿驚怪。調汝得一笑。

雪を夢む

殘杯、春溫を失ひ、破被、夜悄を生ず。
門を開けば、萬山白く、俯仰、同一に照らす。
時に圭角を出すと雖も、もとより、自ら瑕竅を絕つ。
兒童、驚怪する勿れ、汝に調して一笑を得たり。

【字解】〔一〕夜悄　夜の寂しさ。〔二〕圭角　韓愈の詩に南山過冬轉清瘦、剗二盡圭角一出二崖竅一とある。

【題義】設明に及ばぬ。

【詩意】殘杯は、春の溫味を失ひ、破れたる夜具は、夜の寂しさを生ずる。この時しも、門を開けば、萬山、雪を帶びて白く、俯仰すれば、天地は、同一に照り輝いて居る。時に、崖壁等の爲に、圭角を出した樣に見えるが、もとより、一點の瑕もない。兒童は、この詩を見て、驚き怪まずとも善いので、われは、夢中に見たことを敍し、汝に戲れて一笑せむと欲しただけである。

戲贈田辨之琴姬

流水隨絃滑。清風入指寒。
坐中有狂客。莫近繡簾彈。

戲に田辨之の琴姬に贈る

流水、絃に隨つて滑かに、清風、指に入つて寒し。
坐中、狂客あり、繡簾に近づいて彈ずる莫れ。

【字解】〔一〕流水　呂氏春秋に「伯牙、善く琴を鼓し、鍾子期、善く聽く。伯牙、方に琴を鼓す、志、高山に在り、子期曰く、善いかな、巍巍乎として泰山の若し、と。俄にして、志、流水に在り。子期曰く、善いかな、湯湯乎として江河の若し」とある。〔二〕清風　琴歷に「琴曲、風入松、石上流泉あり」と見ゆ。〔三〕繡簾　王註に「これ暗に、司馬相如、琴心、卓文君を挑むの事を用ふ」とあるが、辨音集に「李商隱、岐王の宅に在つて、繡簾内に琴を彈ずるを聞いて曰く、これ秦聲、と。良や久しうして、又曰く、これ楚聲と。主人、これを問へば、前の彈者は、隴西の沈妍、後の彈者は、揚州の薛瀟なり、二妓驚服す」とある。

【題義】查註に「田辨之、爵里失考」とあるが、馮應榴の案に「浣溪紗の詞あり、席上、楚守田待問

の小囊に贈る、當に卽ち此人なるべし」とある。

【詩意】流水の曲を彈ずれば、その音、絃に隨つて滑かに、風入松・石上流泉等の曲を彈ずれば、清風が指の下に入つて、寒い樣な心地がする。座中には、狂客が居て、どんな事を言つて、からかふか分からぬから、忘れても繡襠に近づいて彈ぜぬ方が善からうと思はれる。

書黃筌畫翎毛花蝶圖二首　黃筌の畫、翎毛花蝶圖に書す　二首

短翎長喙喜喧卑。　短翎長喙、喧卑を喜ぶ、
曳練雙翔亦自奇。　練を曳いて、雙翔、亦た自ら奇なり。
賴有黃鸝鬬嬛好。　賴に、黃鸝の嬛好を鬬はすあり、
獨依蘇石立多時。　ひとり、蘇石に依つて、立つこと多時。

【題義】畫鑑に「五代の時、黃筌、子居寀と並に花卉を善くし、これを寫生といふ。妙は傳色に在り、墨筆を用ひず、但だ輕色を以て染め成し、これを沒骨圖といふ。郭若虛云ふ、諺に稱す、黃筌は富貴、徐熙は野逸と。蓋し、筌は待詔に居り、寫すところ、皆禁籞の珍禽瑞鳥・奇花怪石、又翎毛は骨氣豐を尙ぶ。徐熙は、江南の處士、志節高邁、多く汀花野竹・小鳥淵魚を狀す。二者、皆春蘭秋菊、各〻重名を擅にす」とあり、皇朝事實類苑に「國初、翰林待詔黃筌、畫を以て名を著し、尤も花竹に長ず、二子居寀・居寶、弟惟亮を併せて、皆翰林院に隸す。諸黃の畫花、妙は賦色に在り、用筆極めて新細、殆んど墨跡を見ず、但だ輕色を以て染め成し、これを寫生といふ」とあり、劉道醇の名畫評に「筌、字は叔要、蜀人。丹青を善くし、尤も花竹翎毛を好む」とある。

【詩意】短い羽、長い嘴の小鳥は、騷がしく且つ卑きを喜ぶものであるが、練り絹で繰り廣げて見ると、たツた二羽、竝び飛んで居るものも、亦た一奇となすべきである。幸に、黃鸝が居て、嬛好を鬬はすが如く、ひとり、苦むす石に依つて、しばらく立つて居る樣に見える。

綠陰青子已愁人。　綠陰青子、已に人を愁へしむ、
忍見中庭燕麥新。　見るに忍びむや、中庭、燕麥の新なるを。
怊悵劉郎今白首。　怊悵、劉郎、今白首、
時來看卷覓餘春。　時に來つて、卷を看て餘春を覓む。

【詩意】春すぐれば、綠陰青子、人を愁へしめ、中庭に燕麥の實のるは、まことに見るに忍びない。これは、さながら荒涼後の玄都觀の景色に似て居るから、白髮頭の劉郎は、怊悵の思に堪へず、時

【字解】【一】曳練　畫絹を引き伸ばして見る。【二】嬛好　その姿の輕げに且つ見めよきをいふ。

【字解】【一】青子　青い實。【二】燕麥　爾雅に「薦は雀麥」とあつて、註に「卽ち燕麥なり」とある。【三】劉郎　劉禹錫、前に送劉攽この詩中に注して置いた。【四】餘春　殘春に同じ。

時来ては、この畫卷を繰り廣げて、行く春の景色を眺めつつ、ひとり、歎息を禁ぜられぬことと思はれる。

【餘論】紀昀は「この首、特に情致あり」といつて居る。

寒食夜

漏聲透入碧窗紗。　漏聲、透り入る碧窗紗、
人靜鞦韆影半斜。　人は靜かに、鞦韆、影半ば斜なり。
沈麝不燒金鴨冷。　沈麝燒かず、金鴨冷かに、
淡雲籠月照梨花。　淡雲、月を籠めて梨花を照らす。

【字解】〔一〕漏聲　水時計の音。
〔二〕碧窗紗　碧色の青い窓かけ。
〔三〕鞦韆　ブランコ、少女の遊戯。
〔四〕沈麝　水沈と麝香、ともに香料。唐本草に「麝香は中臺の川谷に生ず、雍州・益州皆之あり。陶隱居曰く、形、麞に似たり、柏葉を嘗め食ひ、及び蛇を噉ふ。或は五月に於て得るものは、往往にして、蛇の皮骨あり、邪を辟け、鬼精を殺すを主る」とある。〔四〕金鴨　鴨の形せる銅製の香爐。記事珠に「金猊・寶鴨、皆香を焚くの器」とある。

【題義】寒食は、前に數ば見えて居た。寒食の夜といへば晩春の夜、殊に煙火を禁ぜられた折からの寂しげな景色を詠出したのである。

【詩意】水時計の音は、碧色の窓かけを透して、響き渡り、庭上には、人のけはひ靜にして、ブランコの影が半ば斜に見える。垂れこめた室中には、香も焚かずして、金鴨いとも冷かに、唯だ淡い雲が月を籠めて、ぼんやりと白い梨の花を照らすのみである。

【餘論】紀昀は「これ東坡の筆墨に似ず、酣熱の氣あるが故なり」といつて居る。

和寄天選長官

寓形宇宙間。佚我方以老。　形を宇宙の間に寓し、我を佚するに、方に老を以てす。
流光安足恃。百歲同過鳥。　流光、安んぞ恃むに足らむ、百歲、過鳥に同じ。
頃予縈網羅。文采緣自表。　頃ろ、予、網羅に縈らされ、文采、自ら表するに緣る。
自古山林人。何曾識機巧。　古しへより、山林の人、何ぞ曾て機巧を識らむ。
但記寒巖翁。論心秋月皎。　但だ記す寒巖の翁、心を論ずる、秋月皎たり。
黃香十年舊。禪學參衆妙。　黃香、十年舊く、禪學、衆妙に參す。
虛懷養天和。肯狗奔走閙。　虛懷、天和を養ひ、肯て奔走の閙しきに狗はむや。
官居職事理。晨起何用早。　官に居て、職事理まり、晨起、何ぞ早きを用ひむ。
桐陰滿西齋。叱吏供灑掃。　桐陰、西齋に滿ち、吏を叱して灑掃に供す。

天選長官に寄するに和す

眷予東南來。野飯煮芹蔘。
葆光既清尚。令尹亦高蹈。
相將古寺行。軟語頹晩照。
公家有畸人。虛緣能自保。
卜築嵩山陽。何當從結好。
中山饒勝景。一覽未易了。
何時命巾車。共陟雲外嶠。
翻思筋力疲。不復追踊跳。
公詩擬南山。雄拔千丈峭。
形容逼天眞。邂逅識其要。
籥籬吾未窺。敢議窮閫奥。

【字解】【一】寓形宇宙間　陶淵明の歸去來辭に寓形宇内とあるに本づく、前に西齋の詩中に注して置いた。【二】佚我方以老　莊子の語に本づく、前に李憲仲哀詞の詩中に注して置いた。【三】葆光　歳月をいふ。【四】蘜蘭羅　金樣子に「楚の猶舍、初めて楚王に隨つて朝し、未央宮に宿す。赤蜘蛛の大さ栗の如きを見る、四面、羅網を垂らし、蟲の、これに觸れて死するものあり、遊めば出づる能はず。舍乃ち歎じて曰く、吾が生、亦た是の如し、仕宦は、人の羅網なり、豈に歳を淹すべけむや、と。ここに於て、冠を挂けて退く、時人、これを蜘蛛隱といふ」とある。【五】寒巖霜　寒山子を指したのであらう。【六】論心秋月皎　寒山子の詩に吾心似ニ秋月一とある。【七】黃香　同姓に因みて黃魯直、卽ち山谷を指す。【八】芹蔘　せりとたべ。【九】葆光　莊子に見ゆ、光を包む。【一〇】時人　自註に「公、族人あり、嵩山に隱る」とある。【一一】中山　山中に同じ。【一二】巾車　前に張庖民挽詞の詩中に注して置いた、轅を卸した車。【一三】南山　韓愈の南山詩を指す。凡そ一百二韻、卽ち一千二十字の長さである。【一四】閫奥　閫は敷居の内、奥は、爾雅に西南隅とある。卽ち室奥の義。

【題義】　査初白は「愼、案ずるに、天選長官は失考。詩中、黃香十年舊は、當に山谷を指すなるべし。先生、山谷と唱和し、往往にして江夏無雙の事を用ふ。疑ふらくは、この詩、亦た是れ黃の作に和す、而して、黃山谷集中、原作を檢するも、復た得ず」とあるが、馮應榴、之を駁し「參寥集に、次ニ韻陽翟尉黃天選見ヲ寄の詩あり、卽ち此篇なり、これに據れば、先生の詩に非ず」といひ、又「詩中、頃予蘜ニ網羅一の句、當に是れ參寥自ら還俗の事を言ふなるべし、黃香は、すなはち天選を言ふなり」といつて居て、この方が、はるかに確實切當である。

【詩意】　この身を宇宙の間に寓して居ること、すでに久しく、やがて、天は、老年を以て、われを逸して、すこしく樂にして呉れた。歳月は恃むべからず、百歳の久しきも、過ぎ行く鳥に同じである。頃ろ、予は、世の網羅に引ッかかり、止むを得ず、還俗することになつたが、それは、文彩が自然、

外に表出して居て、人の目に付いたからである。古しへより、山林に住む人は、世上の機巧などは、丸で識別せず、重巖の中に住んで居る寒山子は、わが心、秋月の皎たるに似たりといつて居た。君は、十年の久しき、禪學を研究して衆妙に參し、懷抱を空虛にして、自然の和氣を養ひ、決して、奔走に關がしき中に、その身を任かすことなく、官に居ても、職事が善く片づくから、朝起きるのも、決して早くするに及ばぬ。桐の木かげの西の書齋に滿つる折から、小吏を叱りつけて、掃除をさせ、予が態態東南から來たといふので、下にも置かず待遇し、芹や蓼を煮て、野飯を薦められたが、その光を包んで、衆俗に混じて居る有樣は、清淨にして且つ高尚である。上役の令尹も、亦た高踏の人であつて、相率ゐて古寺に出かけ、靜に話をしつつ、夕日のかぎらふ頃に及んだ。君の家には、畸人と稱すべき人が居て、能く塵外の虛緣を自ら保ち、頃ろ、嵩山の南に住居を卜築したといふが、この人に從つて、交際を結ぶことは出來まいか。山中には勝景多かるべく、到底、一度で見盡すことは出來ぬ。何時、巾車を命じて、ともに雲井に拔んづる高嶺に登るべきか。おもへば、筋力疲れて、とても、その人の踊り跳ねるのに追ッ付いて往くことは出來まいと思ふ。黃君の詩は、韓愈の南山に擬し、峭立千丈の趣があるから、形容、天眞に逼るべく、めぐり合つた景色の要領を識別するに相違ない。予は、その景色に對し、まだ外がこひの籌離だに窺はぬ位であるから、どうして、堂奧を窮めたなど云ふことが出來やう。

【餘論】紀昀は「語は平漫と雖も、確として是れ東坡の風格」といひ、大體ほめて居るが「肯狗の句は俚」といひ「類晩照」は、晩に至るを謂ふのみ、然れども、語、明了ならず」といひ「踊跳は俗」といひ「結び得て草草、通篇を收め住めず」といつて居る。

次韻張甥棠美晝眠

張甥棠美の晝眠に次韻す

炎歊六月北窗涼。
更覺甘如飯稻粱。
宰我糞牆譏敢避。
孝先經笥謔兼忘。
憂虞心謝知時雁。
安穩身同挂角羊。
要識熙熙不爭競。
華胥別是一仙鄉。

炎歊六月、北窗涼しく、
更に覺ゆ、甘きこと稻粱を飯するが如し。
宰我の糞牆、譏、敢て避けむや、「きを。
孝先の經笥、謔、兼ねて忘る。
憂虞の心は謝す、時を知るの雁、
安穩の身は同じ、角を挂くるの羊。
識るを要す、熙熙として爭競せざるを、
華胥、別に是れ一仙鄉。

【字解】〔一〕炎歊　說文に「歊は氣を出す貌」とあり、班固の賦に「吐金景兮歊浮雲」とある。〔二〕宰我　孔子の弟子、晝寢をして、孔子から、糞土の牆は杇るべからざるなりといはれたことが、論語に見えて居る。〔三〕孝先　姓は邊、晝寢をして門人から惡口を言はれたことが後漢書に見え、前に費山晝睡、及び醉眠亭の詩中に注して置いた。〔四〕華胥　前に和蘇州太守」及び飲酒四首の詩中に注して置いた。

【題巻】 設明に及ばぬ。査初白は「愼、案ずるに、先生の甥柳閎、字は展如、黄山谷詩集に見ゆ。張棠美は、考ふべきなし。晁无咎集、和張棠美述志の詩あり、先生集中に互見す、卽ち其人なり」とあり、馮應榴の案に「この詩、亦た晁无咎集に見ゆ、すなはち先生の詩に非ざるなり。査氏、すでに和述志の詩を以て他集に列し、卷中に互見し、又この詩を以て補編卷中に列す、豈に未だ詳に晁集を閱さざるか」といつて居る。

【詩意】 六月の暑い盛りでも、北窓の下は、流石に涼しく、その甘きこと、稻粱の美穀を食ふ樣な氣がする。宰我は、糞土の牆といはれたが、譏を避くるに暇あらず、邊孝先は、經笥腹便便と惡口をいはれたが、その惡洒落も、一處に忘れて仕舞ふ位で、すやすや午睡に陷つて仕舞つた。憂虞の心は、時を知る雁に任かせて、自分は毫も關知せず、安穩なる身は、角を挂けた羊に同じである。熙熙として、全く競爭といふものがない處から、夢裏の華胥は、取りも直さず一仙鄕であるといふことが、初めて分かつた。

【餘論】 紀昀は「前四句、凡鄙の至」といつて居る。

陸蓮菴

何妨紅粉唱迎仙。

陸蓮菴

何ぞ妨げむ、紅粉の迎仙を唱ふるを、〔【字解】〔一〕火中蓮　維摩經に

來伴山僧到處禪。
陸地生花安足怪。
而今更有火中蓮。〔一〕

來つて山僧に伴うて、到る處に禪す。
陸地、花を生ずる、安んぞ怪むに足らむ、
而今、更に火中の蓮あり。

花寺の詩に樓殿總隨煙焰起、火中何處生蓮花とある。

【題義】 草木狀に「陸に生ずるものを旱蓮といふ」とあり、維摩經に「たとへば、高原陸地、蓮花を生ずるが如し」とあるが、普曜經に「太子、產に臨むの時、陸地に青蓮華を生ず」とあり、咸淳臨安志に「陸蓮菴は、錢忠懿王の時、禪師、蓮經を水心寺に誦す、方に冬、忽ち蓮花七本あり、庭陛に生ず」とある。

【詩意】 紅粉の裝なせる女が來て、仙人を迎ふる歌を唱へた處で、何の妨げにも成らず、山僧に伴ひ、どこにでも往つて禪を試みる。陸地に蓮花を生じたのを希有の事だといつて、不思議に考へるにも當らないので、今や火中に、蓮花を生じたのを實際に見たのである。

「火中、蓮花を生ず、これ希有といふべし、欲に在つて禪を行ふ、希有、亦た是の如し」とあり、永嘉禪師の證道歌に、在欲行禪知見力、火中生蓮終不壞とあり、唐の張謂の蓮

書寄韻

寄韻を書す

已將鏡鑷投諸地。

すでに、鏡鑷を將て、これを地に投ず、〔【字解】〔一〕鑷鑷　前に無題の

喜見蒼顏白髮新。　喜び見る、蒼顏、白髮の新なるを。
歷數三朝軒冕客。　歷數す、三朝、軒冕の客、
色聲誰是獨完人。　色聲、誰か是れ獨り完人。

【題義】この題は、極めて不完全で、外集に偶書とあるさうだが、寄せられたる韻を用ひて偶書したといふ義であらうか。

【詩意】すでに、鋭や鏑を地に投げ去り、碌碌生きては居られぬと思つた身が、蒼顏ながら、白髮の新なるを見るに至つては、先づ喜ばしい。顧みて、三代の間の大官輩を一わたり見わたした處で、實際の力量と名譽と相稱うて、ひとり完人と稱すべきものは、誰であらうか、さういふ人は、滅多にない樣である。

詩中に注して置いた。【二】軒冕　前に數ば見ゆ、大官の車と禮冠。

謁敦詩先生、因留一絕

敦詩先生に謁す、因つて一絕を留む

凜凜人言君似雪。　凜凜、人は言ふ、君は雪に似たりと、
我言凜凜雪如君。　われは言ふ、凜凜、雪は君の如しと
時人盡怪蘇司業。　時人、盡く怪む、蘇司業、

【字解】【一】蘇司業　名は源明、司業は大學の總長といつた樣な役。廣文は、廣文館博士の略、大學教授、卽ち鄭虔を指す。蘇源明は、鄭虔の

不解將錢與廣文。　解せず、錢を將て廣文に與ふるを。

詩中にも注して置いた。

【題義】查註に「敦詩先生失考」とある。

【詩意】人は、專ら評判して、凜凜然たる君は、雪に似て居るといふが、われは、反對に、凜凜然たる雪が、君の如くであるといふのである。ここは、蘇司業に比すべき長官が、鄭廣文に相當する君に對して、酒錢を贈らぬのは、如何したことか、時人は、すべて之を怪んで居る。

貧を憫んで、時時、酒錢を贈つたので、杜甫の詩にも見え、前に小見の

絕句二首

絕句　二首

峩峩疊石立何孤。　峩峩たる疊石、立つて何ぞ孤なる、
賴有蕭蕭翠竹俱。　賴に、蕭蕭、翠竹の俱にするあり。
日暮無人鷗鳥散。　日暮、人なくして、鷗鳥散じ、
空留野水伴寒蘆。　空しく野水を留めて、寒蘆に伴ふ。

【字解】【一】疊石　積み重なつた石。

【題義】絕句とは、普通、特に題を設けるに及ばざる樣な場合の率作に就いて、假りに塡めて置くの

である。

【詩意】 峩峩として積み重つた樣な大石は、ひとりで孑然として立ち、幸にも、その窪みには、蕭蕭たる翠竹が生えて居る。日暮、人なくして、鳴鳥、すでに散ずるの時、一道の野水は、その下を繞り、そして、寒蘆に伴うて、秋の末、愈よ寂しげに見える。

漠漠秋高露氣清。　漠漠、秋高くして露氣清く、
新蒲倚石近溪生。　新蒲、石に倚り、溪に近づいて生ず。
夜來雨後西風急。　夜來、雨後、西風急に、
靜向窗前似有聲。　靜に、窗前に向つて、聲あるに似たり。

【詩意】 漠漠たる長天、秋、正に高くして、露氣清き折から、溪に近く、新しい蒲が石に倚り添うて生えて居る。夜來、雨が歇むと、西風忽ち急に、靜に窓前に向つて聲をなし、愈〻秋の寂しさを感せしめる。

【餘論】 紀昀は「二首觀るべし、然れども、必ずしも、定めて是れ東坡の筆ならず」といつて居る。

春夜

春宵一刻値千金。　春宵一刻、値千金、
花有清香月有陰。　花に清香あり、月に陰あり。
歌管樓臺聲細細。　歌管樓臺、聲細細、
鞦韆院落夜沈沈。　鞦韆院落、夜沈沈。

【詩意】 春の夜の稍や遲くなつて、あたりは漸く靜に、花の清香も愈よ著く、月も爲に陰ろひて地上に映る、その時こそ、この上もない風情があつて、ただの一刻、優に千金を値するといひたい位。折しも、歌管の樓臺には、吹奏漸く終らむとし、その聲、細細として、わづかに殘り、畫は女伴どもの笑ひどよめいて居たブランコある一構も、夜は沈沈として、極めて物靜かである。

【餘論】 詩人玉屑に「東坡の春宵一刻値千金云云、王介甫の金爐香燼漏聲殘の一首と流麗相似たり、然れども、亦た甲乙あり」といつて居る。そこで、介甫の全詩を左に擧げることにする。

金爐香燼漏聲殘。剪剪輕風陣陣寒。春色惱人眠不得。月移花影上欄干。

それから、東坡の此詩に就いては、津阪東陽が夜航餘話に於て解說したものがあつて、その詳細を極めて、大に後人の參考となるから、聊かくどい樣であるが、下に、その全文を引抄して置かう。曰く、

【字解】 〔一〕 鞦韆院落　ブランコの掛けてある一構へ。天寶遺事に「宮中寒食、設うて鞦韆を立て、宮嬪等をして嬉笑宴樂せしめ、明皇、呼んで半仙の戲となす」とある。

東坡、春夜ノ絕句ハ、遍ネク人口ニ膾炙スレドモ、ソノ巧ナル意ハ、知ルコト罕ナリ、漫ニ聲ニ吠エテ、雷同スルノミ、矮人觀場トイフベシ。凡ソ詩ニ過激ノ語アルハ、ソレニ目ヲ注ケテ、故ヲ求メ、全首ノ主意ヲ認得スベシ。春宵一刻値千金ヲ花有ニ清香一月有レ陰ノ景ヲ指ストバカリ見テハ、一刻ニ切リツメタル詮ヲ得ズ、ソレ迄ノコトナラバ、一夜千金ニテ可ナリ、漏刻ノ制、一晝夜ヲ百刻ニ分ツ、一刻ハ一時ノ十分一ナルゾ。歌管樓臺人寂寂、鞦韆院落夜沈沈トシテ、四鄰始メテ靜マルニ因ツテ、一刻千金ノ賞ヲ得タルナリ。起句、直ニ破題シテ、大綱ヲ一句ニ提ゲ、承句、ソノ景ヲ寫シ、結聯ニ其故ヲ敍セリ、皆一刻千金ノ解ナリ。コノ詩ハ、一種ノ奇法ニテ、末ヨリ次第ニ上ヘ反リテ讀マバ、詩意、貫通シテ、了然タリ。和歌ニモ、コノ體ママ有ルコトナリ。サルニテモ、一刻ト切リツメタル故ヲ得ザレバ、一篇ノ趣ヲ知ルコト能ハズ、徒ニ上ツラヲ解シ得テ、イトスメ易キ詩ヲ思ヘルハ、タトヘバ饅頭ノ皮ヲ嘗メテ、內餡アルコトヲ知フザルガ如シ。スベテ、經書古文ヲ解クコトモ、俗儒ノ講說ハ、皆是レナリ。蓋シ、晝ノ間ハ、鄰邸ニ鞦韆ノ戲、カマビスシク、仕女、春ニウカレテ奧庭ニ羣レ集マリ、ゾメキドヨミテ熱鬧ニ堪ヘズ。夕ニ至リテ、靜マリタルホドモナク、又樓臺ニ吹キ囃シ起リテ、歌舞醉狂、尤モ騷ガシ。夜フケテ宴散ジ、人シヅマリ、何事モ、寂寂沈沈トシテ、纔ニ始メテ閑靜ノ境ニ入リ、又ココニ於テ、花氣シメヤカニ薰リ、月影撩亂トシテ、イトオモシロキ幽況ヲ占メ得タリ。境界忽チニ打替リタルコト、煩惱卽菩提ト謂フベシ。サレドモ、春夜ノ短促ナルニ、スデニ寢ネントスル頃ニ及ビテノ事ナレバ、晝夜喧囂ノ間ニ於テ、僅ニ暫時ヲ得テ娛ムコト、特ニ一刻千金ニ直リ、惜ンデ寐ヌルニ忍ビザルナリ。初メヨリ、此ノ如クナル處ニ在リテハ、尋常ノ景境ニ慣レテ、必ズシモ、珍重スルニ及バズ。物以レ罕爲レ貴ハ、人情ノ常ナレバ、繁華熱鬧中ニ在リテ、晝夜飽キ厭ヘル所ニ、タマタマ暫ク清幽ヲ得タルコト、ソノ風味ノ旨ク妙ナル、飢渴ニ飲食ヲ得タルガ如ク、殊ニ嬉シク賞玩シテ、一刻千金ノ價ニ覺ユルナリ。コレモ、秋ナレバ、固ヨリ、清幽ノ時ニテ、カクマデ、奇トスルニ足ラザルベシ。首ニ春ノ字ヲ冠ラシメタルコト、是レ通篇ノ骨子ナリ。陰ノ字ハ、影ト同ジカラズ、月ノカゲロヒタル所ヲ云フナリ。庭中クマナク照ルヨリハ、花木參差トシテ影ヲ布イテ、一段幽邃ノ趣深シ。但シ、花月ニ香影アルハ、云フニ及バザル勿論ノコトナルニ、兩ツトモニ特ニ有ノ字ヲ下セルハ、素ヨリ、コノ花香月影ハ、宵ヨリ有リケル庭ノ景ナレドモ、殺風景ニ妨ゲラレテ、有ルコトヲ覺エズ、今始メテ認メ得テ新ナリ。故ニ特ニ有ト云ヘルナリ。有ノ字ヲ鄭重シテ用ヒタルコト、讀ム者、等閑ノ看ヲナスベカラズ。鞦韆ハ奧女中ノ戲ニテ、春ノ鬱氣ヲ散ズルナグサミナリ。庭樹ノ枝ニ繩二本ヲ繫イデ、ソレニ踏板ヲ架シテ乘ラシメ、ミヅカラ手繰リテ、高キニ至リ、衆ヲ兩朋ニ分ケテ、逐番ニ升降シテ入レ替リ、作舞ノ能否ヲタクラベ、旗ヲ建テテ、勝劣ヲ競フ。ツラツラト輕ク揚ガリ得テ、サラサラト下リ來ルヲ妙トス。或ハ體ブラメキテ、危ブミオソレ、肥鈍ニシテ、シドケナキ者ハ、半ヨリ俄ニ落チ來ルナド、互ニヲカシキ態ヲ笑ヒ樂ム故ニ、ソノ

譁シキニ堪ヘザルナリ。宋ノ洪覺範ノ詩ニ、

畫架雙裁翠絡偏。佳人春戲小樓前。飄ニ揚血色一裙施レ地。斷ニ送玉容一人上レ天。花板深沾紅杏雨。綵繩斜擘綠楊煙。下ニ來閒處一從容立。疑是蟾宮謫降仙。

又、元人楊鵬翼ノ詩、

日轉簷花樹影偏。謝家庭院簇ニ神仙一。綵繩斜擘纖纖筍。畫板輕承步步蓮、弄玉未レ升ニ雲漢一去上。綠珠先墜綺樓前。不レ知芳徑殘紅裏。明月何人拾ニ翠鈿一。

コレニテ、其樣ヲ想像スベシ。

醉睡者

有レ道難レ行不レ如レ醉。　道あるも、行き難ければ、醉ふに如かず、
有レ口難レ言不レ如レ睡。　口あるも、言ひ難ければ、睡るに如かず。
先生醉臥此石間。　先生、醉うて臥す、この石間、
萬古無人知ニ此意一。　萬古、人の此意を知るなし。

【題義】說明に及ばぬ。

醉睡者

【詩意】大きな道があつても、行くことが出來ぬとならば、ここで酒に醉つて居た方が宜しく、口があつても、物いふことが出來ぬとならば、睡つて居た方が、ましである。予は、今、この石の間に醉つて寐そべつて居るが、萬古の久しき、誰も此心を知つて居る人がない。

數日前、夢人示ニ余一卷文字一、大略若ニ諭一馬者一、用ニ吃蹶兩字一、夢中甚賞之。覺而忘ニ其餘一、戲作數語一足レ之

數日前、夢に、人、余に一卷の文字を示す。大略、馬を諭へしものの若く、吃蹶兩字を用ふ。夢中、甚だ之を賞し、覺めて其餘を忘る。戲に數語を作つて之に足す

天驥雖レ老。擧レ鞭脫逸。　天驥、老いたりと雖も、鞭を擧ぐれば脫逸す。
交馳蟻封一。步中衡石一。　交も蟻封に馳せ、步して衡石に中る。
旁睨ニ駑駘一。豐肉滅レ節。　旁に駑駘を睨し、豐肉、節を滅す。
徐行方レ軌。動輒吃蹶。　徐行、軌を方べ、動もすれば輒ち吃蹶。
天資相絕。未レ易レ致レ詰。　天資、相絕え、未だ詰を致し易からず。

【題義】數日前、夢に人あつて、予に一卷の文字を示したが、大略、馬を喩へたものらしく、吃蹶の

二字を用ひてあつた。夢中甚だ之を賞したが、覺めて見ると、その句以外は、忘れて仕舞つて居た。そこで、戯に數語を作つて、之に足したといふのである。

【詩意】天馬は老いたれども、鞭を揮り上げると、直に脱出して驅け、巧に蟻の塔をよけて馳せ、又歩すれば、目じるしとせる車の横木の石に當つて、正しく其處に就く。傍を見まはして、やくざ馬どもを睨めつけ、その肥えた肉は、骨節を隠す位。徐に行けば、一定の循路に從つて、少しも出入することがない。しかし、動もすれば、噛んだり跳ねたりするが、もとより、天資すぐれたものであつて、これを詰り責めるといふ譯には行かない。

四十年前元夕、與故人從游、得此句

四十年前の元夕、故人と從游して、此句を得たり

午夜朧朧淡月黄。　午夜、朧朧として、猶ほ暗塵の香ばしきあり。
夢回猶有暗塵香。　夢、回つて、淡月黄なり。
縱横滿地霜槐影。　縱横滿地、霜槐の影、
寂寞蓮燈半在亡。　寂寞蓮燈、半ば在りや亡し。

【字解】〔一〕暗塵香　南部新書に「宮人、皆沈香屑を以て履中を爽み、薄玉を以て底となし、行けば香爽、地に印す、名づけて塵香といふ」とある。〔二〕蓮燈　西京雜記に、「長安の巧工丁緩、常滴燈を爲る、七節五龍、鱗ふるに芙蓉蓮葉の奇を以てす」とある。

【題義】四十年前、上元の夕、故人と一緒に遊行して、この詩を得たから、ここに存して置くといふのである。

【詩意】真夜中には、朧朧として、薄月の影も黄ばみて見え、夢が醒めると、人の歩むに連れて、大路の塵の香ばしきが分かる。霜を帶びたる槐の影は、縱横に地上に鋪いて居るが、蓮燈は、寂寞として、半ば滅明して居る。

題李景元畫

李景元の畫に題す

聞說神仙郭恕先。　聞くならく、神仙の郭恕先、
醉中狂筆勢瀾翻。　醉中の狂筆、勢瀾翻。
百年寥落何人在。　百年寥落、何人か在る、
只有華亭李景元。　只だ華亭の李景元のみあり。

【字解】〔一〕郭恕先　宋史の本傳に「郭忠恕、字は恕先、河南洛陽の人、七歳にして能く書を誦し、文を屬す。童子に舉げられて及第し、尤も篆籀に工なり、坐して貶せられて流落し、復た仕進を求めず、酒を縱にして所爲し、或は月を陸えて食はず、盛暑日中に暴露して、體、沾汗せず、窮冬、河冰を鑿ちて、その旁に浴すれば、凌凍消釋、人皆これを異とす。尤も畫を善くし、得るもの、藏して以て寶となす。太宗、その名を聞き、召して國子監主簿を授く、益す酒を使ひ言を肆にし、擅に官物を竊ぐ、詔して死を減じて、決杖して登州に流す、すでに行いて、齊州臨邑に至り、部送吏に謂つて曰く、われ今

逝く、と。因つて地を捨して穴と爲し、面を容るべきを度り、俯して窟ひて卒す。嘉祥す。後累月、故人、將に改葬せむと欲す、その體、輕くして蟬蛻の若し」とあり、畫鑑に「古人の畫、諸科、各〻その人あり、界畫は、唐、絕えて作者なし、五代を歷て、はじめて郭忠恕一人を得たり」とある。〔三〕 **淵翻**　前に次韻答劉涇の詩中に注して置いた。

【題義】 鄧椿の畫繼に「李甲、字は景元、自ら華亭逸人と號す。逸筆、翎毛を作る、意外の趣あり、但だ木柯未だ佳ならざるのみ。坡、その喜鵲の圖に題し、開設神仙郭恕先、云云」とあり、又宋詩紀事に「景元、善く塡詞小令を爲り、時に聞こゆるあり、翎毛を畫くに意外の趣あり、米海岳、かつて之を稱す」とあり、馮應榴の案に「この詩題、一に題嘉興景德寺李景元畫竹に作る」とある。

【詩意】 むかし、神仙の郭恕先といふものがあつて、その畫を物するに當つては、醉中の狂筆、勢瀾翻として、ひとり、その技を逞しうして居た。恕先、逝いて、すでに百年、藝苑寥落、これに繼ぐものは、唯だ華亭の李景元のみである。

謝宋漢傑惠李承晏墨

老松燒盡結輕花。　老松、燒き盡して輕花を結ぶ、
妙法來從北李家。　妙法は、北李の家より來る。
翠色冷光何所似。　翠色冷光、何の似るところ、
牆東鬢髮墮寒鴉。　牆東の鬢髮、寒鴉落つ。

宋漢傑が李承晏の墨を惠まるるを謝す

【字解】 〔一〕 **北李**　見聞錄に、「唐の李超、易水の人、子庭陸と亡げて、歙州に至る。その地、松多し。因つて留まつて居り、墨を以て家に名づく。その堅きこと、玉の如く、その紋、犀の如し」とある。〔二〕 **牆東鬢髮**　牆東は、宋玉の好色賦に、東鄰女子とあるを用ひ、鬢髮は、その烏黑なると云ふ。

【題義】 鄧椿の畫繼に「宋子房、字は漢傑、鄭州滎陽の人、選之の子、復古の猶子なり、官、正郎に止まる。坡公、その畫に跋して、その眞士人の畫たるを謂ふなり、著すところの畫法六論、その精到を極む」とある。坡公、その畫に跋して、その眞士人の畫たるを謂ふなり、著すところの畫法六論、その精到の墨を惠贈されたから、これを謝するといふのである。

【詩意】 老松を燒き盡すと、煤が固まつて、輕い花の樣になる。それで墨を造るといふ祕法は、北方李超の家から相傳して、ここに李承晏の名墨と成つたのである。その墨の翠色を帶びて、光澤冷かなるは、何に似たるかといへば、牆東に立つ美人の黑髮が、鴉の濡れ羽色をして居ると同じである。

又答氈帳

臥病經旬減帶圍。　臥病經旬、帶圍を減じ、
清樽忘却故人期。　清樽、忘却す、故人の期。
莫嫌雪裏閒氈帳。　嫌ふ莫れ、雪裏の閒氈帳、

又、氈帳に答ふ

【字解】 〔一〕 **減帶圍**　南史梁昭明太子傳に「貴嬪薨ず、喪を終るまで、菜果を嘗めず、體、素より肥、腰帶十圍、ここに至つて、減削半ば

作事猶來未合時。　事を作す、猶來、未だ時に合はず。

【題義】この題は、一寸はッきりせず、一に答二子玉氈帳一とあるさうで、すると、子玉が氈帳の詩を作つて寄せたから、それに次韻して、答となしたのである。氈帳は、毛氈で造つた厚い臥帳であらう。

【詩意】身は、病に臥するに因つて、帳中に垂れこめ、すでに旬日を過ぎて、帶圍も減ずる位、瘦せ細り、清榕を傾くる爲に、故人と約して置いた期日さへも忘却した。雪中の氈帳、太だ閉にして、極めて無爲なるを嫌はずもあれ、從來、事を作しても、時に合はず、毎毎、成功せぬ處を見ると、矢張、かうして立て籠つて居る方が善からうと思はれる。

壽陽岸下

街東街西翠幄成。
池南池北綠錢生。
幽人獨來帶殘酒。
偶聽黃鸝第一聲。

壽陽岸下

街東街西、翠幄成り、
池南池北、綠錢生ず。
幽人、ひとり來つて殘酒を帶び、
偶ま聽く、黃鸝の第一聲。

【字解】〔一〕翠幄　翠色のテントで、これは佛事でも行ふ爲に、臨時に施設したものと見える。〔二〕綠錢　蓮の葉の小なるを云ふ。

に過ぐ」とある。〔二〕猶來　一に從來に作つて、その方が分かり易い。

【題義】馮應榴の案に「外集、この詩を登州の卷內に載す。將レ赴二文登一、別二擇老一、一首の後、留二題懷仁令古山亭一二絕の前に在り、これに據らば、併せて編年に入るべきなり。今細に年月を分つ能はず。且つ、先生、壽州を過ぐる、年月を考訂すべきなしと雖も、斷じて、登州に赴くの年に非ざるを以て、仍つて、補編卷中に列す」とあり、又「壽陽は、當に今の壽州を指すべし、山西の壽陽に非ざるに似たり」とある。

【詩意】壽陽の市の東でも、西でも、翠色のテントを張つて、何か佛事でも行はうとして居る樣な有樣。池の南にも、北にも、蓮の小さい葉が錢の如く見える。ここに、幽人は、獨り逍遙して、酒の醉は、まだ醒めやらず、偶然にも、黃鸝の初聲を聞いた。

【餘論】この詩は、わざと、定式の平仄を破つた詩であるから、結句の聽の字も、平聲として見るのが至當であらう。

春日與閒山居士小飲

春日、閒山居士と小飲す

一杯連坐兩髯棊。
數片深紅入座飛。
十分瀲灩君休赤。

一杯連坐、兩髯の棊、
數片の深紅、座に入つて飛ぶ。
十分の瀲灩、君、赤くするを休めよ、

【字解】〔一〕君休赤　赤、一に紅に作り、その方が分かり易い。〔二〕桃花紅面皮　東坡の自註に「廣人の詩に云ふ、未レ見桃花面皮、先作杏子

且看桃花好面皮。　且つ看よ、桃花の好面皮。

【題義】 閑山居士、失考。

【詩意】 一杯を傾けつつ、髯の長い二人が、坐を連ねて、碁を打つて居ると、數片の深紅、しづ心なく、座上に飛び散つた。酒の十分に瀲灩たるを、君は、とても飲めぬといつて訴ふるにも及ばないので、桃の花でさへ、顏を紅に染めて居るではないか。

村醪二尊、獻張平陽

萬戸春濃酒似油。　萬戸春は、濃かにして、酒、油に似たり、
想須百罌到牀頭。　想ふに須らく百罌、牀頭に到るべし。
主人日飲三千客。　主人、日に飲ます、三千の客、
應笑窮官送督郵。　應に笑ふべし、窮官の督郵に送るを。

【題義】 張平陽失考。これは、自家醸造の酒を張平陽に贈呈するに就いて、賦して添へたものである。ここに在るのは七絶一首・七律二首であるが、律は、絶句二首に作るべく、計七絶五首だらうといふ說もある。

【字解】 〔一〕 萬戸春　東坡が嶺南に在つて、自家で醸造した酒の名。〔二〕 督郵　郡の下役、前に九日次韻王鞏一の詩中に注して置いた。

【詩意】 萬戸春と銘を打つたる我が家の酒は、濃かにして油の如く、ここに百罌を呈上するから、やがて、牀頭に屆くであらう。君は、日ごとに、三千の客に振舞はれ、澤山の酒が入用であるから、予の如き窮官が、これッぱかりの者を、態態、下役を煩はして送り屆けたことを笑はれるであらう。

詩裏將軍已築壇。　詩裏の將軍、すでに壇を築く、
後來裨將欲登難。　後來、裨將、登らむと欲する難し。
已驚老健蘇梅在。　すでに驚く、老健、蘇梅の在るを、
更作風流王謝看。　更に風流王謝の看を作す。
□出定知書滿腹。　□し出でて定めて知る、書腹に滿つるを、
瘦生應爲語雕肝。　瘦生、應に語の爲に肝を雕すべし。
□□灑落江山外。　□□灑落たり、江山の外、
留與人間激懦官。　人間に留與して、懦官を激す。

【字解】 〔一〕 裨將　裨は助の義、卽ち次將。〔二〕 蘇梅　隱居詩話に「蘇子美は、奔放豪健を以て志となす、梅堯臣、亦た詩を能くす、しかも、平淡を工と爲す、世、これを蘇梅といふ」とある。〔三〕 王謝　東晉の名族、前に宿九仙山一の詩中に注して置いた。

【詩意】 君は、詩中の將軍として、すでに、壇を築いて諸方に號令しやうといふ意氣組みで、後來、裨將輩は、とても、壇に登ることが出來ない。その人の詩格は、老健にして、蘇舜欽・梅聖俞の如く、

その風流は、古しへの王謝の子弟をしのばしめる。その口から出る辭句を見ると、素養深くして、書の腹に滿つるを知るべく、近來、體の瘦せたのは、語を練るが爲に、肝腸を雕鐫するからである。君の豪懷は、灑落にして、江山の外にも著るく、これを人間に留與して、懦弱なる小官輩を激勵せむとして居られる。

【餘論】紀昀は「俚甚し」といつて居る。

張公高躅不可到。　張公の高躅、到るべからず、
我欲挽肩纔覺難。　われ肩を挽かむと欲して、わづかに、難きを覺ゆ。
事業已歸前輩錄。　事業、すでに前輩に歸して錄し、
典刑留與後人看。　典刑、後人に留與して看る。
詩如啄雪清牙頰。　詩は、雪を啄むが如く、牙頰を清くし、
身觀飛龍吐膽肝。　身は、飛龍に觀して、膽肝を吐く。
少負清名晚方用。　少にして清名を負ひ晚に方に用ひらる、
白頭翁竟作何官。　白頭の翁、竟に何の官と作る。

【字解】〔一〕典刑　前に子由初到陳州この詩中に注して置いた。
〔二〕飛龍　易の乾卦九五に飛龍在天とあつて、天子を指したのであらう。

【詩意】張君の高躅は、到底及ぶべからざるものであつて、われは、肩を引き止めて、これに追ひ付かうとしても、直に、その難きを覺える位。君の事業は、すでに前輩の手に依つて記錄せられ、その典型は、後人に留與して、長しへに、世の鑑となつて居る。君の詩は、雪を啄むが如くして、牙頰を清からしむべく、君の身は、至尊に朝觀して、肝膽を吐露した。君は、少にして、早く清名を負ひ、晚年に至つて、はじめて擢用せられ、まことに、結構な事であるが、白髮頭の吾輩は、何の官となつて居るか、まことに、お愧かしい次第である。

【餘論】紀昀は「淺拙、乃ち謂り、何を以て名を東坡に嫁する」といひ、又全首を評して「眞跡、未だ必ずしも偶ま存せずんばあらず、而して、僞も亦た正に復た少からず。賈人、利を射、百工競ひ出づ、未だ遽に信じて逸作と爲すべからず。況んや、集中、すでに已に載せず、又安んぞ、芻棄の餘に非ざるを知らむや。一概して之を收め、以て博を炫す、未だ之を眞識と謂ふべからざるなり」といつたのは、至極尤もな事である。

失題

獨鶴南飛送好音。

失題

獨鶴、南に飛んで好音を送る、

【字解】〔一〕橋梓　尙書大傳に

山中橋梓共成陰。
深衣偃僂如初命。
巵酒從容向晩斟。
城裏誰家開壽域。
堂東多士作儒林。
清霜未落黄花在。
笑折高枝繞鬢簪。

山中の橋梓、共に陰を成す。
深衣偃僂、初命の如く、
巵酒從容、晩に向つて斟む。
城裏、誰が家か壽域を開く、
堂東、多士、儒林と作る。
清霜、未だ落ちず、黄花在り、
笑うて、高枝を折つて鬢を繞つて簪す。

【題義】 查初白は「按するに、元豐五年の冬、公、黄州に在り、進士李委、公の生日を聞き、白鶴南飛の新曲を作つて、以て獻ず、この詩、疑ふらくは、是れ黄に謫せらるる時に作るところ。又按するに、卞氏式古堂書畫考、この詩を載せて云ふ、これ東坡の作」とある。

【詩意】 一羽の鶴が南に飛んで、その鳴く音は、まことに好ましく、南山中に於ては、橋梓の二木が父子の道を全うして、ともに茂つて居る。手首にまでかかる袖の長い衣を著て、俯向になると、初めて命せられて謹慎するが如く、打くつろいで杯酒を飲むのは、晩の事である。城中、誰が家に於て、壽域を開きたるかは知らねど、堂東に於ては、多士濟濟として、さながら、儒林の觀を呈して居る。

「南山の陽、木あり、橋と名づく、橋は父道なり。南山の陰、木あり、杞と名づく、杞は子道なり」とある。杞は梓に同じ。【二】 初命　前に再過常山の詩中に注して置いた。

まだ霜が降らず、菊の花は殘つて居る處から、その高枝を折り、鬢の周圍に插んで微笑んで居る。

【餘論】 紀昀は「依托の作」といつて居る。

題王維畫

摩詰本詞客。
亦自名畫師。
平生出入輞川上。
鳥飛魚泳嫌人知。
山光盎盎著眉睫。
水聲活活流肝脾。
行吟坐詠皆自見。
飄然不作世俗辭。
高情不盡落縑素。

王維の畫に題す

摩詰、本と詞客、
亦た自ら畫師と名づく。
平生、出入す輞川の上、
鳥は飛び、魚は泳いで、人の知るを嫌ふ。
山光、盎盎として眉睫に著き、
水聲、活活として肝脾に流る。
行吟坐詠、皆自ら見る。
飄然、作さず世俗の辭、
高情、盡きず縑素に落つ。

【字解】 【一】 畫師　前に王維吳道子畫の詩中に注して置いた。

連山絶澗開重帷。
百年流落存一二。
錦囊玉軸酬不貲。
誰令食肉貴公子。
不覺祖父驅熊羆。
細氈淨几讀文史。
落筆璀璨傳新詩。
青山長江豈君事。
一揮水墨光淋漓。
手中五尺小横卷。
天末萬里分毫釐。
謫官南出止均潁。
此心通達無不之。
歸來纏裹任紈綺。
天馬性在終難羈。
人言摩詰是初世。
欲從顧老癡不癡。
桓公崔公不可與。
但可與我寛衰遲。

連山絶澗、重帷を開く。
百年流落、一二を存し、
錦囊玉軸、酬いて貲はず。
誰か食肉の貴公子をして、
祖父が熊羆を驅りしを覺えざらしむ。
細氈淨几、文史を讀み、
落筆璀璨、新詩を傳ふ。
青山長江、豈に君が事ならむや、
一揮水墨、光淋漓。
手中五尺の小横卷、
天末萬里、毫釐を分つ。
謫官、南に出でて、均潁に止まる、
この心、通達、之かざるなし。
歸り來つて、纏裹、紈綺に任かす、
天馬、性、在り、終に羈し難し。
人は言ふ、摩詰、これ初世、
從かせむと欲す、顧老の癡と不癡と。
桓公、崔公、與にすべからず、
但だ我と衰遲を寛にすべし。

【二】酬不貲　價が高くして、とても購求することが出來ぬ、貲は續ふ。
【三】食肉貴公子　豪貴の狀を形容して云ふ、前に喬太博換左藏の詩中に注して置いた。
【四】祖父驅熊羆　祖父が熊羆の如き勇兵を驅つて、戰爭して武勳を建てたといふこと。
【五】纏裹任紈綺　奢綺を包んで荷造りする。
【六】顧老　顧凱之、痴絶と稱ざられしこと、前に數ば見ゆ。

【七】桓公崔公　東坡の自註に「桓玄、かつて長康の畫を竊み、崔圓、かつて摩詰をして壁に畫かしむ」とあり、その中、桓玄の事は、前に次韻米驗の詩中に注して置いたし、崔圓の事は、圖畫見聞志に「王維・鄭虔・張通、ともに、楊國忠の舊第に囚へらる、崔圓、召して、數壁に畫かしむ、後皆寛典に從ふ」とある。

【題義】王維の事は、前に王維吳道子畫の詩中に注して置いた。この詩は、卽ち王維の畫に題したのである。査初白は「愼、按ずるに、この古詩一首、谷橋の孫紹遠稽古葺むるところの聲畫集中に見ゆ」といひ、馮應榴の案に「王晉卿、將門の後を以て、詩を能くし、畫を善くし、又かつて均潁に謫官たり、詩中の語意と適ま符す。この詩、必ず晉卿の作ならむ」とある。なほ、晉卿の事は、前に作レ書寄二王晉卿一の詩中に注して置いた。

【詩意】王摩詰は、本來、詩人であるが、亦た自ら畫師となり、輞川に別墅を構へて、平生ここに出入し、鳥の飛び、魚の泳ぐのを見て樂み、そして、人の知ることを嫌ひ、山光は、盎盎として、眉睫に付著し、水聲は、活活として、肝脾に流れ入るばかり。行坐、唯だ吟詠を事とし、飄然として、

世俗の様な淺俗の文辭を作らない。その一段の高情は、詩のみで盡すことが出來ず、やがて、縑素の上に落ちて、絶大の名畫となり、連山絶澗、自然の大風景が重れる帷帳の間に開いて居る。摩詰は、隨分多く畫を作つたが、百年の久しき、風塵の間に流落して、その畫は、唯だ一二を存するばかり。錦囊玉軸、結構な裱裝をして、その價もなかなか高く、容易に買ひ取れない。おもへば、誰が肉食の貴公子をして、その祖先の武功を覺えず、專ら文事に向はしめたのか、これは、卽ち天才自然の趣向である。そこで、摩詰は、細氈に坐し、淨几に對して、日日、文史を誦讀し、一たび筆を落せば、璀璨として玉の如き新詩を傳へたのである。青山長江を畫くことは、もとより、その專門ではないが、一たび、水墨を揮へば、淋漓たる其光、まことに、希有の神技と稱すべく、わづか五尺ばかりで手中に收め得べき樣な、瑣小なる橫卷の中に於てだに、萬里の天末を寫し出して、毫釐の纖細なる處を見事に畫き分けしめた。予は、謫官の身で、南に向つて、均縣の間に止まつて居たが、この心、通達して、之かざるところなく、歸り去れば、賴まれた畫絹を荷造りして持つて來る位。但し、天馬に似て、奔放極まりなき我が性は、他の羈束を受くるを屑しとせず、氣が向かぬ時は、決して、筆を執らぬ覺悟である。人が言ふには、王摩詰は、南宗文人畫の開祖であつて、顧長康の如く、果して癡絶なるか、癡絶ならざるか、さういふ事は、どうでも善いとして、桓玄の如き、崔圓の如きものには、減多に畫いて遺らぬが宜しく、但だ予の如き世外の閒人と共に、暮年の衰遲を慰め合へば、それで善かつたらうと思はれる。

【餘論】紀昀は「これ亦た依託、乍ち看れば是なるに似たり、再び玩べば非なり」といつて居る。

安平泉

策杖徐徐步此山。
撥雲尋徑興飄然。
鑿開海眼知何代。
種出菱花不計年。
烹茗僧誇甌泛雪。
煉丹人化骨成仙。
當年陸羽空收拾。
遺却安平一片泉。

安平泉

杖に策して、徐徐、この山を步む、
雲を撥し、徑を尋ねて、興飄然。
海眼を鑿開す、知る何の代、
菱花を種ゑ出して、年を計らず。
茗を烹るの僧は誇る甌に雪を泛ぶるを、
丹を煉るの人は化して、骨、仙と成る。
當年の陸羽、空しく收拾、
遺却す、安平、一片の泉。

【字解】〔一〕撥雲　雲を撥れ飛ばす。〔二〕海眼　泉は海の目といふ義。〔三〕陸羽　茶の名人、前に寄二周安撫茶一の詩中に注して置いた。

【題義】咸淳臨安志に『仁和縣安仁西鄉安隱院は、臨平山の南に在り、清泰元年、吳越王建つ、舊名

安平。治平二年、今の額に改む。その地、曲竹を產す。相傳ふ、唐の邱隱士、丹成つて羽化し、杖を此に植つ、その竹、皆曲竹、間に丹井あり、井旁に池あり、安平泉と名づく、東坡、詩を題して云云」とある。

【詩意】杖に縋り、徐徐として、この山を步みつつ、雲を撥ね飛ばして徑を尋ねると、幽興飄然として盡きない。海眼を鑿開して、この池の出來たのは、いつの時代から始まつたか、菱花を植ゑてからも、年は數へられぬ位。茶を烹るの僧は、この水を用ふれば、甌中に雪を泛べた樣だといつて、誇り顏であるし、丹を煉つた邱隱士は、羽化し去り、骨ながら仙人に成つて仕舞つた。當年の陸羽は、天下の名泉を殘る隈なく尋ね巡つたが、この安平泉だけを遺却したのは、如何したことか。

和張均題峽山

孤舟轉巖曲。古寺出雲坳。
岸迫鳥聲合。水平山影交。
堂虛泉漱玉。砌靜筍遺苞。
我爲圖名利。無因此結茅。

張均の峽山に題するに和す

孤舟、巖曲に轉じ、古寺、雲坳を出づ。
岸は迫つて鳥聲合し、水は平かにして山影交はる。
堂は虛しくして、泉、玉に漱ぎ、砌は靜にして、筍、苞を遺す。
われ名利を圖るが爲に、ここに茅を結ぶに因なし。

【字解】〔一〕雲坳　坳は凹、卽ち窪地、雲の湧き出る谷間。〔二〕砌靜　砌は階に同じ。〔三〕遺苞　皮を落して置く。

【題義】査註に「張均失考」とある、そして、峽山は、前に見えて居た峽山寺であらう。

【詩意】孤舟、上流より下り、巖の曲れる處を一轉すると、雲の涌く谷間から、古寺が見える。兩岸相迫る處、鳥聲合して聞こえ、水は平かにして、山の影が互に交錯して居る。僧堂は、虛しくしてなく、泉聲、玉に漱ぐが如く、階邊、靜にして筍が皮を脫ぎ棄てた儘である。予は、まだ悟り切らぬ身で、專ら名利を圖るが故に、この地に來ても、茅屋を結ぶことの出來ないのは、まことに、愧づかしいことである。

題女唱驛

攬轡金房道。崎嶇難具陳。
浮嵐常作雨。冷氣不知春。
少見寬平路。多逢臃腫民。
欲知何處遠。巫峽是西鄰。

女唱驛に題す

轡を攬る金房の道、崎嶇として具さに陳べ難し。
浮嵐、常に雨を作し、冷氣、春を知らず。
寬平の路を見ること少く、臃腫の民に逢ふこと多し。
何の處か遠きを知らむと欲す、巫峽は是れ西鄰。

【字解】〔一〕攬轡　手綱を執る。〔二〕金房　金房二州を云ふ。〔三〕崎嶇　路の險しきこと、從つて行き惱むこと。〔四〕浮嵐　嵐は山氣。〔五〕寬平路　幅も廣く且つ平坦なる道路。〔六〕臃腫　腫れふくらむ、病氣の貌。